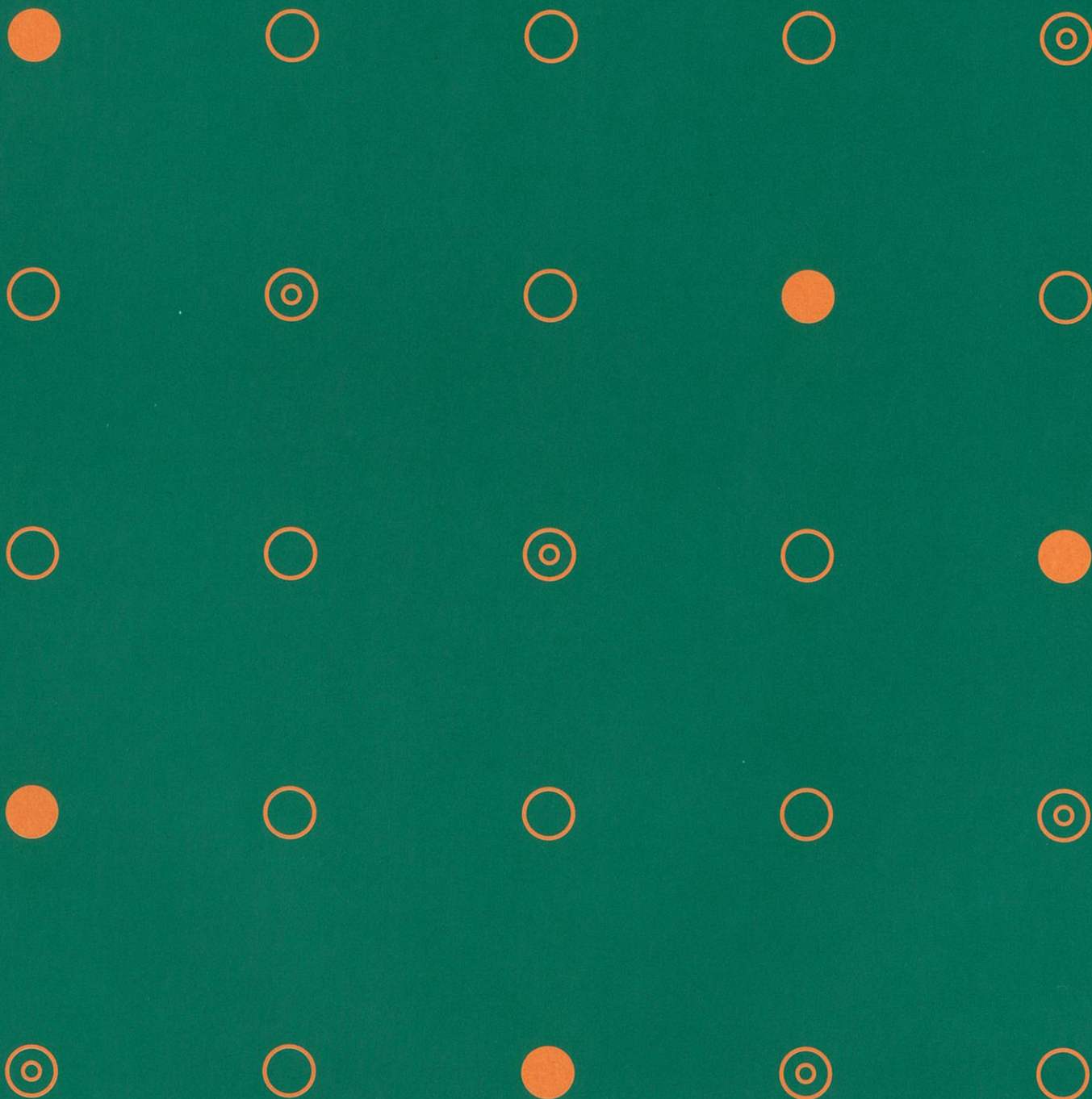


THE SAISON FOUNDATION

ANNUAL REPORT 2006 April 2006 to March 2007

20th ANNIVERSARY



二十周年を期して新しい飛躍へ

時代と共に私たち財団が果たさなければならない役割は変わります。品位も人間的な暖かさもない自由競争原理主義、市場経済至上主義を恥し気もなく高言する指導者が社会を牛耳っている時代に、芸術・文化を支援し、創造の源を守るという役割は、いよいよ大きなものになってきています。

一方、東西対立、冷戦の消滅後、批判者を失った産業社会からは、自由主義体制の長所を示し続けなければならないという、緊張感がなくなり、それは産業構造の空洞化と相俟って経営者間のモラルの低下をもたらしました。メセナ活動の意味、それが経済社会に与える活力と質の向上を理解している企業と、理解しようとする姿勢を持たない企業との産業社会のなかでの分化が進んでいるということもできそうです。

さいわい、私たちの財団はセゾングループという秀れた体質を堅持している企業群の支援に恵まれて、かつては仲間でもあった西武系の諸企業が崩壊しつつあるなかにあっても、持続的に文化芸術面における創造的活動を支援し続けることができました。私たち財団の側も環境の悪化に対応するために努力しコストの削減などに努めております。

そうした経緯を辿って当財団は今年の七月に創立二十周年を迎えました。この二十年のあいだに、当財団が応援、協力したいく人ものアーティストと集団が国際的に認められる芸術的達成を示したことは私どもの財団にとっての誇りです。この間、森下スタジオ、仲間としてのル テアトル銀座の果たした役割も大きかったと思います。

私たちはこの成果に自信を持って、必要があれば活動の巾を集中させ、必要があれば巾を広げるという、活動のダイナミズムを高めたいと思っています。創造活動と同じように、芸術文化支援活動も常に自己革新を求められる仕事です。二十周年を迎えられたことを今まで関連のあった人たち、官庁、企業、組織、アーティストの皆様にご感謝申し上げると共に、私たちは新しいステージへ向っての飛躍を成し遂げなければならないと考えています。

2007 年 10 月

財団法人セゾン文化財団
理事長 堤 清二

A New Leap Forward on Our Twentieth Anniversary

As times change, so does the role that our foundation has to play. In an era like this when leaders who preach winner-takes-it-all style free-competition and market economy principles that lack in dignity and human warmth control our society, the role of supporting arts and culture and to protect the fountainhead of creativity becomes more and more significant.

In an industrial society where there is no one left to condemn its faults after the end of the East-West confrontation and the Cold War, the strong sense of urgency to point out the virtues of liberalism has disappeared and this has led to deindustrialization and to moral decay among business leaders as well. Perhaps it could also be said that differentiation is advancing within the industrial society between corporations that understand the meaning of business support to the arts and how it can invigorate the economic community and improve quality standards, and those corporations who do not try to understand the significance of such support to the arts.

In the case of The Saison Foundation, we have been fortunate to receive support from the clusters of corporations that are upholding the exceptional nature that used to be shared within the conglomerate known as the Saison Group, and thanks to them we have been able to continue giving support to creative work in the fields of arts and culture while many of the Seibu-affiliated companies, which also used to be our friends, are now disintegrating. At the same time, we at The Saison Foundation are doing our best to respond to the aggravation of our surrounding environment by reducing our expenditures and by other various measures.

After going through such struggles, our foundation celebrated its twentieth anniversary in July this year. The pride of our foundation is the fact that the many of the artists and organizations that we have been supporting and encouraging over the past two decades are now recognized internationally by their artistic achievements. I believe our Morishita Studio and our partner Le Théâtre Ginza by Parco have also played important roles during these years.

With these accomplishments in mind, we hope to enhance the dynamism of our activities in the coming years: if need be, we will concentrate our activities; if need be, we will spread them again. As in the case of creative work, self-reform is also constantly required in the field of arts and cultural support. While we would like to thank those individuals, government offices, corporations, organizations, and artists who have been involved in the work of our foundation - all of you have made it possible for us to celebrate our twentieth anniversary - we believe it is necessary for us to take a leap forward to another new stage for the future.

October 2007

Seiji Tsutsumi
President, The Saison Foundation

巻頭対談

「民間財団の役割とセゾン文化財団の 20 年」

山崎正和 劇作家・評論家、LCA 大学院大学学長、セゾン文化財団評議員
堤 清二 セゾン文化財団 理事長



■文化支援の潮流の中で

—— 山崎先生には、設立当初から評議員をお務めいただいていますが、この 20 年間で文化状況、支援状況は随分変わってきましたね。

山崎 まず国であれ、企業であれ、文化について関心を持ち、そしてそのことが広い意味で社会全体の生産力に役立つ、という認識が生まれたのはほぼ 30 年前だったと思います。

最初は、企業の方々にとっての「文化」に対する考えは、企業イメージのおしゃれ、格好の良い「付け足し」というくらいのものでしたが、次第に会社の威力、威厳を高めるために、少しメセナ活動をやった方がいいだろうという感じになってきた。国は国で、当時税収が多かったこともありますが、むしろ国際的な関係の中で、他の先進国が文化に投資しているのだから、日本も少

しやらないと恥ずかしいぞというのが、たとえば国際交流基金のスタートだったわけです。実は私も最初の時にお手伝いしたのですが、当時はまだ認識において暗中模索だったことを思い出しますね。

それから、企業のメセナというのが一時は非常に盛んになりましたが、その先頭をお切りになったのも堤さんでした。つまりセゾンという企業グループのメセナ活動として、美術から、音楽から、目覚ましい活動をおやりになってきた。で、だんだん追隨してくる企業が増え、企業メセナ協議会も生まれました。

国では少しずつ、「文化的国威」を高めるというような意味合いで、お金の量を増やしてきたわけですが、画期的だったのは、私は新国立劇場だと思っています。どういう意味で画期的かと言いますと、二つあって、一つは、「日本文化といえば歌舞伎、お

花、お茶のような伝統文化」という固定観念から踏み出したこと。近代演劇にしる、近代音楽にせよ、すでにそれらは日本人の血肉になって、一種の伝統を形成していることを認めたことです。第二は、文化活動に対する支援は、場所をつくること——平たく言えばハコをつくること——だけではない、ハコもつくるが、中身もつくるという考え方が出てきた。それが国レベルで結実したのが新国立劇場だったのです。新国立劇場の制作費のかなり部分は国費ですからね。

そういう流れの中で、堤さんが私費をはたいて、財団をおつくりになった。財界人の遺産で美術館をつくるというケースはあっても、現に生きておられる財界人が、自分の企業とは関係なく、私財で財団をおつくりになるのは稀なことではないでしょうか。しかもその支援の対象が、美術品のように形としてずっと残るものではなく、舞台芸術という言ってみれば「消えもの」だというところが重要です。やはり非常に画期的なことを、堤さんが二重にも三重にもおやりになったと思いますね。

堤 そんなにおっしゃっていただくと多少気恥ずかしいような気もするのですけれども(笑)。確かに新国立劇場は、国立のパブリックな劇場としてはとても意欲的です。それに最近では地方自治体の財団の中にも、かなり活発な活動をするところが出てきています。このように「官」が文化支援に本格的に乗り出してきてくれば、「民」は「官」がやりにくいところをやればよい、相互に補完関係をつくっていければよいと思います。そうするとね、今年当財団も20周年を迎えますが、そろそろ純民間の財団としては、少し方向を変えていくことを考えてもよいのかもしれない。というのは、私どもが助成したグループなり、個人なりが、どんどん世界に出て公演し、評価も得られるようになってきた。20年やってきますとね、ああ、そうか、あそこも初めの頃は私どもも応援していたんだっただな、など思うことがあります。

でも一方では、若い人たちの中から才能を見つけるのが、だんだん困難になってきているような感じもします。それはこちらが歳をとったから困難になったのか、全体のクリエイティビティみたいなものが、日本の中で少し落ちてきているのか……。もちろん、本当にクリエイティビティが落ちてきているとすれば、それを刺激することこそが民間の役割なのでしょうが、ではどうやって刺激したらいいのか？ そのへんが難しいですね。

■「官」のジレンマ

山崎 私はセゾン文化財団に対しては、お客様 〆立場で見ているわけですが、これまでの活動は非常に意味があったと思いますよ。

と言いますのは、私自身、地方自治体の劇場(兵庫県立芸術文化センター)を10数年、芸術監督として預かった経験があります。そこで音楽や演劇をやっているわけですが、ここは当初から自治体としては非常に珍しくソフトをつくらう、しかもソフトを先行させようというものでした。

振り返ってみて感じるのは、自治体には——国はもちろんのことですが——大きなジレンマがあるわけです。というのは、税金で運営するのだから、できるだけ広い観客層に対して「還元」

すべきだという考え方と、観客層が広いのなら商業ベースでやっていけるのだから、公費をもってやる限りは、むしろ未来の才能の芽を育てるべきではないかというふたつの主張がありうる。平たく言えば、実験的か、大衆的か、というジレンマにいつも悩まされるんですね。新国立劇場だって、そうだと思います。歴代の芸術監督はそこで苦勞しているわけですね。さらにいうと、演劇や音楽の場合、公演規模を少し大きくしようと思うと、ひどくお金がかかる。ですから年間何十本も上演することはできないんですね。限られたものの中で、ポリシーを浮き彫りにしていくことは大変に難しいです。

そういった矛盾の中でやっている国や自治体の文化活動は、もちろん大変重要なのですが、いわばその間隙をぬって、思い切って自由に、前衛的なものや実験的なものを支援しているセゾン文化財団の活動は、私は非常に意義があったし、これからもあると思うんです。堤さんが今どういう方向転換をお考えなのかはわかりませんが、私は、仮にこのままであっても、依然として非常に大きな意義があると、いつも感心して見えています。

堤 そうおっしゃっていただくと、大変ありがたい感じがいたします。

たとえば音楽については、他にも優れた財団がありますから、私どもがやらなくてもいいのかなと思いますが、ひとつだけ、これまで全くタッチしていなかったのが伝統芸能です。これは当初、国がやるべき領域かとも考えていたのですが、同じ伝統分野でも、それを革新していこうと努力されている方々もいる。もしそれが困難な条件の中で行なわれているのだとすると、伝統だからといって最初から除外しない方が、あるいはいいのかもしれない。

前衛のことをおっしゃいましたが、これもさまざまで、美術の場合でいえば、ポップアート以来だんだん変わってきて、今では本当に芸術性があると言っているのかどうかみたいなものが、“前衛”という名で存在していることがありますね。しかもその“前衛”は恐ろしく商業ベースだったりしますから(笑)。

山崎 そうなんですね(笑)。それはおっしゃるとおりでして、現状を見ますと、ついこのあいだまで“前衛”と言われていた人が、いまや完全な本流に加わって、観客動員数も商業演劇顔負けの規模でしょう。

これはセゾン文化財団に直接要求しているわけではないのですが、たとえば旧新劇が苦戦している現状があります。私は自分もかつてそこにいたせいか、新劇がつくってきた日本語による演劇、言葉を大切にしている演劇が衰えていくのを見るに耐えられません。たとえばそういう分野にも支援が必要とされているような気がしますね。

ただ、公演そのものに助成するというのは、お金の規模が大きくならざるを得ませんし、実効性も乏しい。下手をすると助成されたために、かえって劇団の持出しが増えて困ってしまうというケースもあるでしょう。

私は例えば日本の劇作家の作品を、国際語で上演することを助ける——これはすでに一部おやりになっていますが——というふうなところを助成するとか、あるいは、若い劇作家が出

てきた時に、その人たちの最初の作品を上演する機会を与えてあげるような支援を期待したいですね。文化庁もそれをやり始めていることは知っているのですが、まだまだ足りないだろうと思いますね。

■トップの「好み」とプログラム・オフィサーの存在

山崎　しかし、日本でこういう財団が生まれてくるというのは奇跡的な現象といえるかもしれませんね。たとえば大型の財団は日本にもありますが、こういう財団の場合、多くは「社会還元」という意識でおやりになっている。そのため対象となるのは、規模が大きくて、すでにその仕事について定評があるものがほとんどです。世間の「良識」の王道を歩んでおられる。そういうことを悪いとは言いませんが、しかし日本の場合、財団というのは、本来の在り方としては「すぎ間産業」だと私は思っているんですよ。

サントリー文化財団ができたのが28年前ですが、財団をつくられた佐治敬三さん自身が、何よりもアカデミックなもの、インテレチュアルなものが好きだったのです。その「好きだ」というのがとても大事なことなんです。

アメリカの例を挙げますと、巨大財団のトップが、果たしてその仕事が好きかどうかというのはどうもよくわからない。つまり善いことは好きなんです(笑)。文字通り「フィランソピー」ですね。人類を愛していच्छやる。でも、何が好きなのかと訊くと、具体性がないんです。

まあアメリカほど財団文明が大きくなっていますと、機能も違うわけです。ある研究では、アメリカの財団の総予算は、連邦政府の予算の三分の一以上なのだそうですが、そのくらいの規模になると違ってくる。でも日本のような場合、財団の仕事というのは、国もあまりやらない、それから商業的にもあまり繁盛しない、そういう「すぎ間」を狙うことが大切だと考えるわけです。



サントリー文化財団には、一般の研究助成が基本にあり、その他にサントリー学芸賞というのがあります。文学賞はたくさんあるのに、評論、あるいは研究に対する賞が少ない。学者たちが、専門分野を深めるのは放っておいても安心ですが、いわゆるインターディシプリナリーな、異分野をまたぐ人、つなぐ人は放っておいたのでは乏しくなるばかりですから、そこで学芸賞をつくりました。

もうひとつは、地域文化賞というものをつくりました。そんなものは、5年もしたらタネが切れるよ、とよくいわれたものですけどね(笑)。結果的には国も追随して、地域文化というのは今やたいへん盛んになっています。結局、「すぎ間産業をやってきたから、ここまで凌いできたんだろうと思います。

それとやはり、これはセゾン文化財団のケースにも当てはまるのだけれども、まずトップが、そういう文化助成、あるいは文化活動そのものが好きだという第一の条件に加えて、その下で具体的な事柄に取り組んでくれる人の存在が大きいです。トップと現場に近いところで動かす人とのコンビネーションが大事だと思います。

堤　なるほど。やはり20年も経つと、少しずつそういうエキスパートも育ってきますね。

山崎　私は、やはり専門性をもったプログラム・オフィサーを置いたことがこの財団を非常にしっかりしたものにしたと思います。日本では財団のプログラム・オフィサーになろうという人がまずいません。そもそも職場がありませんから。かといって養成するのも簡単ではありませんね。さらに難しいのは、プログラム・オフィサーは、助成対象—この財団でいえば演劇の世界—をよく知っていなければなりません。しかし一方で、個人的なしがらみがあってはならない。だから演劇界で活動してきて、そこからプログラムオフィサーになろうとする人がいるかもしれませんが、かなり選択が難しいですね。

堤　だから僕は出版企業なり、出版プランには一切口を出さないことにしているのです(笑)。



山崎 さすがだなと思ったのは、森下スタジオをつくられた時です。若い劇団にとって一番困るのは劇場ではなくて稽古場ですね。そういうことは、現場にいるわれわれ、芝居をやっている人間にはもう身染みてわかっていますけれど、よくそそを理解して稽古場をおつくりになったと感心しています。東京は地価が高いですから若い人たちはなかなか空間をもてません。今、貸し稽古場を借りますと一日に数万円かかります。どなたの発案が存じませんが、あれは本当にいいお仕事をしてくださったと思います。

堤 あれは誰が言い出したのか、いつの間にかスタジオをつくらうという話になりました。助成対象のグループが、みんな稽古場に困っていましたからね。若い人が空間をもてないのは、これは美術の分野でも同じで、こちらも何とかしたいのですが…。

山崎 堤さんに一度伺いたいと思っていたのだけれども、いわゆる流通業、サービス産業をやってこられたことと、文化活動への援助とはつながっていたのですか？

堤 理屈はつけていましたけれど(笑)、しかし本質的につながっていたとは、正直に申し上げると言い難いですね。

山崎 そうすると、堤さんというパーソナリティーの中に、文学者として、詩人としての素質がもともとありであって、その個性が両方をつないでいたということですかね。

堤 まあ、僕が言うと、社内ではまるっきり反対はしにくかったでしょうが、適当なところにおいてもらいたいなあというのはあったんじゃないかと思います(笑)。

山崎 それにしては随分盛んでしたよね。

堤 続けているうちに、だんだん理解者が増える傾向が出てきていたのは確かですね。

■これからの 20 年

山崎 でも、20 年というのは面白い年数ですね、長いようだけれど、あっという間でもあるし。

堤 むしろこれからの 20 年が大事ななと思っています。

私は、ロックフェラー系のアジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) という財団の活動を、もうかれこれ 25 年ほどお手伝いしています。そこでは毎年アジア地域の、これだと思う芸術家をアメリカに派遣する仕事をしてきました。もちろんセゾン文化財団とも密接に連携しながら活動しているのですが、この間アジアからもかなり才能のある人たちが出てきて、しかも彼らは忍耐力がありますから、アメリカで頑張って勉強しています。

これからアジアはだいぶ変わってきそうな感じがしますが、その変化の中で文化が果たす役割は非常に大きいでしょう。そこにもわれわれが貢献できることがあるように思います。どうも日本はアジアに愛されることをしない傾向がありますから、せめて文化の面ではね。

山崎 そうですね。しかし今後のことを考えますと、不幸なことに日本の財団には、跡継ぎになる人材を合理的に再生産するシステムがないんですよ。そういう土壌というものが育ってきていませんから、これは本当に難しいことだと思います。たとえば堤さんにしても、今のスタッフにしても、つまりは偶然の産物なんです。



繰り返しますが、財団という仕事は、“人”がすべてです。ハードというものが無いし、組織といったって、事務局に数人いるくらいだから。

でも私は最近ね、「いい仕事をする」というのは、一代でいいのではないかという気もしているんですよ。その成果が、またどこか思いがけないところへ飛び火して、育つかも说不定い。

堤 そうですよ、そこで別のものが根を生やしてゆく…。

山崎 そうそう、そういう形で、ものは継承されるのかなという気がしますね。

大学のような組織を見てもそうです。国家の直接の一部になっているような大学を別にすれば、今はみんな流動化してきているし、一方で新しいところが活力をもちつつある。まあ、それでいいのかもしれない。

堤 そうなのかもしれませんね。今日はどうもありがとうございました。

撮影：斉藤巧一郎

セゾン文化財団 20 周年に寄せて I. メッセージ

セゾン文化財団のこれまでの助成対象者の方をはじめ、お世話になった皆様から、当財団との関わり、今後への期待についてメッセージをいただきました。 (五十音順、敬称略)

朝倉 摂

舞台美術家
セゾン文化財団評議員



とまらずに歩いていること

セゾン文化財団の歩みは、大変地味ではあるが一つ二つと焦らずに演劇を始め舞踊の分野に至るまで目をくばらせて、促進してきた。

日本の多くの現代演劇を始め舞踊は巾広く、一つにまとめることは実にむづかしい。だが、私はいつも思うのだが、もうすこし巾を広げてもいいのではないと思う。たとえばドキュメンタリー映画や、ごく地味な劇映画なども国際的な視野に立ってみる事も大事なことでないかと思う。

何か書きたいこともたくさんあるようだが、具体的に上げることは大変むづかしい。ただ、セゾン文化財団はとまらず歩いていることはたしかだと思う。

石井達朗

舞踊評論家
セゾン文化財団評議員



注目する三つの出来事

セゾン文化財団について、以下の三つのことに注目している。

一つ目は、演劇や舞踊、あるいはどちらのジャンルにも入れられないようなパフォーマンスアートなどで、商業ベースには乗らず、評価も未知数だが、先鋭的なアーティストを積極的に支援しようとする姿勢。個々の名は挙げないが、過去に助成してきたアーティストたち、そして現在、助成しているアーティストたちを見れば明らかだ。時には、それは冒険であり、リスクを伴うが、財団自らが「今」に対して批判精神をもつことでもある。

二つ目は、財団の職員が、ほとんど専門家的に、助成するアーティストたちをしっかりとフォローし、また、新しく生れてくる有能な卵たちにきちんと目を向けていることだ。これはあまり例のないことだと思う。このようなしっかりとした運営組織があるからこそ、公的な助成の補完にならない、独自性と個性を打ち出せるのだ。

三つ目は、森下スタジオ。都内の演劇人や舞踊家は稽古場探しに四苦八苦し奔走している。森下スタジオを設立し、「スタジオ助成」というシステムを生み出したのも、現在の状況をしっかりと認識していればこそである。また、ここはスタジオのみならず、多様な実験の場として、意欲的な公演スペースとしても機能してきたことは周知の事実である。

市村作知雄

NPO 法人アートネットワーク・ジャパン代表/東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科准教授



敬愛する人々へ

セゾン文化財団には、いつも先頭を走っていてほしいと思う。助成財団の助成額は本当に小さいものだ。とくに金利がずっと低いままで随分と長い時間がたって、きつとあんまり明るい展望もひらけないことだろう。でも、財団はプログラムが勝負だ。先端的なプログラムをつくって、それがモデルになっていけば、計り知れない影響を与えることができる。セゾン文化財団はずっとそれをやりつづけていて、つぎはどんなプログラムをつくってくれるのだろうと、私はいつも楽しみにしている。これまでセゾン文化財団とNPO 法人アートネットワーク・ジャパンはいくつかの共同プロジェクトを実施してきた。今もアメリカと日本の「戯曲」をテーマにしたプロジェクトが継続されていて、その結果、戯曲の地位が二つの文化圏でかなり違うことが確認され、私は得をした気分だ。ただ、このプロジェクトは戯曲のリーディングという方法をとった日米の交換プロジェクトなのだが、私はどうも近頃はリーディングという方法に魅力を感じなくなってきて少し困っている。なぜ魅力を感じなくなったかは、ここで述べることはできないが、それはさておき、セゾン文化財団は、私にとっては助成金をくれる良き財団というよりは、何かを一緒にやっていきたいと思わせる数少ない組織・人々なのである。

一柳 慧

作曲家/ピアニスト
セゾン文化財団評議員



撮影:幸田 森

伊藤キム

ダンサー/振付家



撮影:山口 遊

内野 儀

東京大学教授
セゾン文化財団評議員



夢を現実のものとする

セゾン文化財団設立 20 周年おめでとうございます。この 20 年間に私たちを取り巻く状況は大きく変化しました。本来自由で開かれたものである社会は、市場原理の導入などによって硬直化が進み、閉塞感が漂う画一的な様相を色濃く映し出しています。そのような中で、セゾン文化財団の芸術家への支援活動が、創立当初から一貫した姿勢のもと、いささかも揺らぐことなく今日まで継続されているのは驚くべきことだと思います。

セゾン文化財団及びその関係者の皆さんとの交流は、かつて私が若かりし頃経験した刺激に富んだニューヨークの雰囲気をはうふつとさせるものがあります。経済的、空間的支援の貴重さは言うまでもないことですが、同時に芸術家が夢を育み、自らを高めながら夢を現実のものとして実現できる精神的支えとしての財団の存在意義がこれからますます希まれてくるのではないのでしょうか。

共に歩んで

たしか 15 年ほど前の 92 年頃だったろうか、初めて財団のオフィスに助成金申請の手続きに行った。当時私はまだ「伊藤キム+輝く未来」結成前で、ドイツ在住のダンサー 吉岡由美子氏と組んで日欧での共同公演の企画を練っており、申請を試みた。

その日は申請締め切り日で、ギリギリに駆け込んだ。部屋に通され、書類を提出して面接を受ける。担当者は、スラリとして素敵な男性だったが、申請書をほぼ徹夜で作ったこちら同様、彼も目を赤くしていた。そのスマートな印象とはかけ離れていた。それまではこの財団に対して、こちらと違って大人な組織で近寄りたがたい印象だったが、彼の赤い目を見て「あ、一緒にがんばってくれてるんだな」とほんのり安心感を得た。

見事、申請は通った。

それ以来、私はこの財団とともに歩んできている気がする。ともに、なんておこがましい言い方だが、なんだか並走している気分なのは確かだ。実際、05 年に受けた「世界一周旅行」へのサバティカル助成も、「そろそろ長期でオフをとろうかな」と考えていた矢先に舞い込んできたシステムで、こう言っちゃなんだが願ったり叶ったり、かゆいところに手が届くとはまさにこのことだ。でも、物わかりがいいだけではダメで、常に芸術と社会の間に立ってバランスを取りつづけていただければと思う。

個人同様、組織も変容していくだろう。特に現代芸術という「ナモノ」を扱う分野では変化は激しい。これからは時代に揉まれながら、お互いに成長していければ、と思う。

状況を作る

財団法人セゾン文化財団設立 20 周年おめでとうございます。

この 20 年間に日本の舞台芸術をめぐる状況は大きく変わりました。状況というと、偶発性に支配されて人知の及ぶところではないというイメージがありますが、この間、日本の舞台芸術の発展に財団が果たした功績には計り知れないものがあると思います。文化庁等のいわゆる公的助成金の場合、既に可視的にある状況に乗っかって、ある程度平等に助成をすること(だけ)になりますが、セゾンの場合は、明確なポリシーをもって——国際的に通用する若手アーティスト育成を中心とする——状況を作ってきたと考えられるのです。「状況を作る」ことが重要なのは、そうした主体的な姿勢がないと、芸術文化活動は基本的には市場原理に支配されるだけになるからです。若手の才能を信じて財政的サポートのみならずモラルサポートも惜しまないセゾンならではの体制は、そうした主体的な姿勢から育まれてきたものにちがいありません。

「状況を作る」主体性には失敗がつきものです。つまり、これと見込んだ若手が意外に伸び悩むことだってありうるわけです。しかしそれを恐れていてはお役所仕事にしかならないのは自明であり、ある種の頑固さもまた、「状況を作る」姿勢には必要でしょう。その意味でセゾン文化財団は理想的な活動を展開してきており、これからもその姿勢を貫き、日本の舞台芸術発展のために力を注いでいただければと思います。

大島早紀子

H・アール・カオス主宰
演出・振付家



撮影:Tadayuki Minamoto

大谷 燦

NPO 法人 DANCE
BOX Executive
Director



撮影:Peggy Kaplan

荻野達也

fringe プロデューサー



芸術創造活動、育児支援制度付き！

97年度から6年間芸術創造活動の助成を頂きました。カンパニーの活動を振り返ってみると、何かに憑かれたように年数本の新作を発表し続けていた頃であり、海外公演も急激に増えた時期でした。このもっとも支援が必要な時期によく助成していただけたものと本当に感謝しています。助成終了直後、たてつけに子供2人を産んでいます、子供を育てながらの創作、公演活動は、想像を絶する大変さがあります。

フィンランドで公演したときに驚いたのは、フィンランドのこぶつき？アーティストに対する助成は、ベビーシッターの渡航費、旅費、ベビーシッター代などが出るのが一般的なのだそうです。「アーティスト」をめぐる社会的想像力の豊かさに驚き、触発されるものがありました。日本では、夢の助成だと思いますが、セゾン文化財団の個性豊かな助成方法の一つに加えてもらえたら素晴らしいと思います。芸術創造活動、育児支援制度付き！なんてのはいかがでしょう？

関西でのダンス支援

セゾン文化財団設立20周年おめでとうございます。設立以降現在まで、新しいパフォーマンスアーツを志すものにとって多角的な面から、大きな役割を果たされてきたと思います。また、継続性のある支援システムは、単年度や1回限りの助成とは異なり、アーティストや芸術団体が、腰を据えて事業に取り組むことが可能になり、日本の舞台芸術の発展において様々な好結果を生み出してきたと思います。

さて、DANCE BOXを立ち上げたのは1996年。当時は、関西でモダンダンスやバレエ、ジャズダンス、舞踏など様々な舞踊の分野で若いアーティストが台頭し始めていた時期でした。一方で、公演をする場所や、成長していくためのシステムは未整備で、アーティストと話し合うなかで、恒常的に活動できる拠点をつくり、公演機会を増やしていくことに取り組みました。

立ち上げから4年が経過し、DANCE CIRCUS、SELECTION、INDEPENDENTというアーティストの育成システムも軌道に乗ってきた2000年、セゾン文化財団から、創造環境整備活動として助成をいただきました。この年を期に、DANCE CIRCUSへの参加者は国内外に広がり、さらに若いアーティストの胎動が始まりました。DANCE BOXは今年で11周年を迎えますが、これまでのご支援で育ってきたアーティストの活動の場をさらに広げていくとともに、次世代のアーティストの育成にもこれまで以上に力を注ぎたいと思います。今後とも宜しくお願い致します。ありがとうございました。

演劇人にとっても希望の20年

舞台芸術への助成が現在のような公的支援にシフトする以前から、セゾン文化財団は民間の雄として異彩を放っていた。その源流であるセゾングループの文化戦略を常に意識してきた世代として、この系譜がなければ日本の現代演劇・コンテンポラリーダンスは相当異なる歩みを見せたに違いないと感じる。いま世に出ている集団、演劇人の何割かは全く違った人生を歩んだのではないかとすら感じる。セゾン文化財団の20年は、まさに演劇人にとっても希望の20年だったと思う。

演劇への公演助成を行なう制度は全国に多数あるが、団体助成や公演と直接結び付かない創造環境整備を主要なプログラムとしているのは、セゾン文化財団のほか数組織のみである。運営面で発展途上にある小劇場界こそ、この創造環境整備が不可欠な現状にあると思うのだが、なぜか行政は公演という単位でしか物事を計れないようだ。セゾン文化財団の事業計画が、志ある制作者の駆け込み寺の様相を呈しているのも当然だろう。

私自身は関西在住時代に地元初の演劇制作ワークショップ fringe を開設してからは地域交流事業で支援をいただいた。いずれも前例のない試みで、参加者のその後に大きな影響を与えたと思う。演劇は舞台の上だけではない。舞台の上だけに助成してもなにも変わらない。そのことを誰よりも知り抜いているセゾン文化財団の熱いまなざしに、演劇人は真摯な行動で応えなければならない。

荻原康子

社団法人企業メセナ
協議会シニア・プログラム・
オフィサー



文化支援もクリエイティブに

セゾン文化財団が現代演劇・舞踊の分野で果たした功績を計ろうとするなら、まずはこの間に支援してきたアーティストの現在を見ればいい。自ずと、その先見の明が裏付けられるというものだ。

だが、それ以上に注目すべきは、助成財団として常にアート現場が抱えている課題に向き合い、その解決のための方策を模索し実践してきた点にあると私は思う。財団設立の当初から、創造のプロセスに対する中長期的な支援を方針に掲げ、数年間にわたる助成を行ってきた。公演単位の助成や赤字補填が前提の支援に比べ、「(創造に結びつくなら)何にでも使いたい」自由度の高いお金がどれだけ活動の幅を広げることか。ステップアップのため、あるいはじっくり思索を練る時期での柔軟なサポートのありがたさ―「後で振り返ってよくわかる」とは、アーティストから異口同音に聞く声である。

また94年には森下スタジオを開設。先の芸術創造活動プログラムもそうだが、「創造」に眼差しを向けた支援のあり方は、国や自治体の公的支援や企業のメセナプログラムに少なからぬ影響を与えた。トヨタ自動車が自社の体育室をダンスカンパニーの稽古場として提供する「トヨタ創造空間プロジェクト」も、もとはといえば森下スタジオを見学したことがきっかけだと聞く。そうした意味でも、優れて政策提言的な事業を展開してきたといえるだろう。

一歩先の行動が閉塞した状況を変えていく。これからも確信的かつ革新的に、日本の文化振興を牽引していただきたいと思う。

オン・ケンセン

Ong Keng Sen

演出家/シアターワークス
芸術監督



時代とニーズ

セゾン文化財団の活動で印象的なのは、舞台芸術のカンパニーのために創造環境整備を図る部分に重点をおいているところ。これはカンパニーの創作の継続性や安定した活動に必要なものです。森下スタジオの存在を通して、作品創作のための場所を、土地不足の東京で安心して持つことができるのです。この助成は、海外のアートシーンで発表される日本のコンテンポラリー・ダンスの作品群を生み出し、国際共同事業に加わるアーティストの流動性を高める助けとなっています。

さらに、森下スタジオは公開ワークショップやワーク・イン・プログレスの場に緩やかに変容しています。それは、セゾン文化財団のスタッフが現状を把握しながら、常に最善の方法を模索しているからです。私が2001年にここで創作、発表した『Dreamtime in Morishita Studios』は、第二次世界大戦の東南アジアと日本における問題について論議を起こす内容のものでした。クオ・パオクンのテキストにインスパイアされた、日本のアーティストたちとのコラボレーションによるプロジェクトでした。あるトラウマを挟む双方が共にその傷口を見直し、若い観客に提示できたのは、芸術に対するセゾン文化財団の確信があったからこそです。若者向けのクラブやファッションショーのスタイルを取り入れながら過去の辛い記憶を考察するこの作品は、クオ・パオクンが調査を開始した日本で上演され、若い観客に真摯に受け入れられました。

財団の先進性は森下スタジオの実験的な使い方を進めることにあります。これは、海外のアーティストに滞在場所を提供することでもあります。私が、2005年にパリのCentre National de La Danseとニューヨークのリンカーン・センターでの発表作品の創作のために滞在した時には、もうひとつの実験的な狙いがありました。私が選んだ日本人アーティストとの公開対話のために森下スタジオを使うことです。私はここでキュレーションをし、実験を行い、創作をし、多くの日本のアーティストたちと語り合いました。このような自由で芸術的な場所は東京にはほとんどないと思います。セゾン文化財団が時代とニーズとともに成長し続けることを期待しています。

鐘下辰男

劇作家・演出家/演劇企画
集団 THE・GAZIRA 主宰/
桜美林大学客員准教授



共に過ごした二〇年

セゾン文化財団二〇周年、おめでとうございます。

奇しくも私が主催する「ガジラ」も今年、二〇周年を迎えました。小劇場ブームと言われた八〇年代後半から「演劇再編」が起こったともいえる九〇年代、そして二一世紀への突入と、同じ「時間」を私達は過ごしてきたことになります。その中で、企業が、または国家がその芸術活動を「助成」という、日本の現代演劇がこれまで経験して来なかった新しいシステムが形成されてきたわけですが、「ガジラ」だけで言わせていただければ森下スタジオでの「稽古場助成」が印象的です。当時はどこの集団も「稽古場不足」に頭を悩ませていたので、これは大いに助かりました。また、頂いた助成金での二週間に及びイギリス滞りは、ガジラはもちろん、その後の私の創作活動に多大な影響を与えたと思います。しかし、演劇界全体を視野に見たとき、このように形成されてきた新しいシステムを、現場人である我々「演劇人」が、果たして有効に使用できたのか、してきたのかという反省も同時にあるように思われます。これからも、よきパートナーとして互いに日本の現代演劇の実情を見つめ合い、一〇年、そして二〇年と、これからの「時間」を過ごしていければと願っています。

ポリー・カール

Polly Carl

ミネアポリス・プレイライツ
センター芸術監督



撮影：Keri Pickett

河島伸子

同志社大学
経済学部教授



川村 毅

劇作家／演出家／
ティーファクトリー主宰



撮影：増森 健

共通の言語を見つけて

セゾン文化財団と三年間にわたる日米劇作家交流事業を立ち上げることができ、本当にうれしく思っています。私は、セゾン文化財団のアーティストとの関わり合いやプレイライツセンターでコラボレーションをした日本人劇作家への直接的なケアについて、強い印象を受けました。アメリカの財団には、このような支援方法は、まずありません。彼らはいていの場合、既存の組織に資金を援助するだけです。セゾン文化財団のスタッフは、私と作家を結びつけ、プロジェクトのための劇作家の人選に尽力してくれました。私たちの会話では、炸裂するような早口の私の英語(たとえアメリカ人でもあまりに早くしゃべるので時にはついて来られないほどの!)に一生懸命に耳を傾けてくれました。セゾンのスタッフの劇作家、演劇そして翻訳をする中でたちあがってくる問題への深い理解に感謝します。私は、アーティストのスタイルや作家のユニークなボキャブラリーについてこのような洞察力をもつ財団のオフィサーと仕事をすることがありません。大きな海を超えて、二つの全く異なる言語と文化の沼地の中で、私は、セゾン文化財団と共通の言葉(parlance)を見つけることができました。その言葉は、私たちが最も重要な仕事——新しい言語で新しいアートを作ること、アーティストとアーツ・アドミニストレーターと観客の間に一生続くような関係を構築すること——を一緒にすることを可能にしてくれたのです。

セゾン文化財団の成果

日本における民間の文化支援が、1990 年ごろより急速に発達したことに、セゾン文化財団の存在は大きな意味を持つ。そもそも、演劇という、日本の芸術文化の中ではどういうわけか取り残され気味、劣位におかれていたジャンルへの助成に注目し、ここに特化した点が優れていた。同時期に発展した企業メセナにおいても、演劇に注目するところがないわけではなかったが、全般には音楽や美術がメセナの対象としては人気があり、演劇、特に現代演劇への助成の厚みにおいて、この財団に勝るところはない。

また何より注目すべきは、演劇という分野の発展にとって、何が必要か、財団の限られた資源をもっとも有効に活用して、この分野の質を高めるにはどうしたらよいか、徹底的に調査・検討を進めた上での助成プログラムが組まれてきたことである。単に、定評ある劇団の活動に助成金を出すだけなら、他の財団や企業にもできるが、セゾン文化財団が、より長期的な視野にたって、演劇人たちとの対話を通じて、助成プログラムを組んできたことは明らかである。森下スタジオの提供、アーツ・マネジメント人材育成、演劇政策に関する研究助成などのユニークな助成活動がそれを物語る。

セゾン文化財団の助成活動が、今後も地味ながら着実な成果をあげ、次の 20 年で日本の演劇活動がまた一つレベルを上げることを願う。

一本の線として

セゾン文化財団の助成、協力、支援がなければ、私の多くの海外での演劇活動は、あり得なかっただろう。

特に今、強く思いとして残っているのは、ティーファクトリーによる「ハムレットクローン」の、森下スタジオでのワークショップ及び公演を経て、ドイツ四都市ツアーに至る三年間の支援だ。

「ハムレットクローン」という自らのテキストから、いかなる演劇言語が生成するかという私の探求は、三年間という支援の体制がなければ、とうてい不可能なものだった。

例えば、二十代の頃は、シネセゾンで配給され、シネヴィヴアンで上映される、殊にヨーロッパの新作に刺激され、WAVE で先端の音楽を購入したりと、セゾン文化に実は様々な局面で色々な恩恵を受けている世代に組する私にとって、年月を経てこのような形で自分の演劇活動を支援していただけたことは、何か私のなかでは、恩恵と感謝という一本の線でつながっているという気もしてしまう。

二十周年、おめでとうございます。

さらに、風評にとらわれない、独自の視座での邁進を期待しております。

木佐貫邦子

舞踊家/桜美林大学
総合文化学群教員



スタジオという励まし

セゾン文化財団の助成を受け、これまでに森下スタジオではあらゆる場面においてずいぶんとお世話になってまいりました。様々な目的のために多くの出会いを通じてどれほどこのスタジオで学ばせていただいたか計り知れません。たくさんの出来事を思い出しますが……。2002年の「TOO BRIGHT TO SEE, TOO DARK TO SEE.」の稽古期間中に老齢だった父が他界しました。ちょうど連休とぶつかってしまい、斎場の都合ですぐに葬式ができないという状況で、葬式までぽかっと3日間空いてしまいました。私はいつものように森下スタジオに通い、稽古に没頭しました。間に合っていなかったシーンはここで一気に仕上げました。なぜあの時あんなに手際よく(?)はかどったのか今でもよくわからないのですが、たぶん父がぼんぼんと私のお尻をたたいてくれたのかもしれません。そのシーンにはアルボ・ベルトの曲をつけました。このシーンは父の死と重なり本番の舞台では知らず知らずのうちに泣いていました。あの時、あの葬式までの3日間、もし森下スタジオがなければ、と言いますか、スタジオに足を運ぶというダンサーにとってのあたり前の行為がなかったら、私はきつとめそめそするばかりだっただろうと思います。静かに待っていてくれたスタジオが私と私のダンスを支えてくれたのだと心から感謝をしています。

金 守珍

新宿梁山泊代表
演出家/俳優/
映画監督



同じテーブルで

セゾン文化財団設立 20 周年を心よりお祝い申し上げます。新宿梁山泊も今年で創立 20 周年、奇しくも同い年ということになります。

セゾン文化財団の助成金ที่เขาと一線画するのは、ただ金銭を授与するという一方通行の助成システムではなく、「助成する側」と「される側」が同じテーブルにつき、一緒になって文化を創造していく、という点にあると思います。新宿梁山泊も、セゾン文化財団とで築き上げたすばらしいパートナーシップのおかげで、韓国、中国での「人魚伝説」テント公演が実現し、公演を観た韓国の演劇界の人たちと、その後、大きな絆が生まれました。セゾン文化財団によって蒔かれた種が、年月とともに大きな樹木となり、豊かな葉を繁らせてくれたのです。また伊豆のアトリエの建設、紫テントの新調など劇団だけの力では成しえない夢が実現し、今もその夢の力が大きな広がりを持って我々を支えています。

新宿梁山泊の発展と成長は、セゾン文化財団の助成抜きには考えられません。これからもセゾン文化財団が演劇界のサポートリーダーとして益々で発展されることを、心から願います。

熊倉純子

東京芸術大学音楽環
境創造科准教授



革新的なプログラム

20 周年おめでとうございます。芸術支援がめざましい展開を見せたこの 20 年、常に革新的なプログラムでフロンティアを切り拓いてこられたセゾン文化財団に心からの敬意を表します。1990 年の企業メセナ協議会発足以来、民間による芸術支援がさまざまな実験を試みた時代に、官の支援体系にも大きな影響を与えたセゾン文化財団の活動は、日本の文化振興における民の誇りの証です。さらにアートマネジメントの人材育成においても画期的な役割を果たされたことは特筆すべきだと思います。プログラム・オフィサーという仕事の重要性が今後さらに認められていくよう、ぜひ引き続きみなさんのご活躍を祈っています。

しかし 21 世紀を迎え、指定管理者制度の導入などで舞台芸術の環境は厳しさを増しています。またヴァーチャルな文化環境の発達でライブの表現活動はそのあり方を問われる時代になりつつあると思われます。こうした新たな状況に対応するプログラムを開発し、引き続き国際的にアピールできる若き才能をサポートしてくださることを心から期待しています。

小池博史

パパ・タラフマラ芸術監督
演出家/写真家



撮影：Aya Sunahara

今、必要だと思うこと

セゾン文化財団の助成を長年、受けてきた。20年近くに渡って、であるから、根底から助けられたことも幾度となくあった。だから感謝してもしきれない。

そもそもセゾン文化財団ができたのは、舞台芸術のような複製の効かないメディアをどうやって現代の有効なアートとして成立させるかが主旨だったのだらうと推測してきた。

もし正しいなら、どのような舞台芸術がセゾン文化財団の主旨に合致するかが大切である。例えば文化庁の望む形とセゾン文化財団の望む形が一致していることもあれば、そうでないこともあって当然だ。その相違が生じる場合の相違点は何であり、それこそが、セゾン文化財団にとっては要になってくるはずだ。

私は、セゾン文化財団にはミッションと目的意識を持ちつつ、未来を見据えた舞台芸術作品制作への参加意識を強く持ち続けて欲しいと願っている。

今、強く必要なのは、新しい活力ある文化を創らねば、という意欲だ。日々、状況が変わり、情報に溢れ、私たち自身の居場所さえ見つけにくい時代だからこそ、現在、そして未来の文化のあり方を考えつつ、制作し、批判し、肯定し、援助し、助成する必要があると思う。

それは理念と言ってもいい。いかなる理念を持ち、どのような理想を描くかだ。もう一度、私たちは、根幹を問い直す必要があるように思う。嗜好性を超え、人の文化を考えた今後のあり方を、である。

小山田 徹

美術家/ダムタイプ



感謝しきれぬコト

今から15年前の10月、私達(ダムタイプのメンバーや多くの友人達)は一人の人間からそれぞれに送られて来た手紙によって大きく人生が変わりました。送り主は古橋悌二(ダムタイプメンバー)、紙面には自らのHIV感染とそれに対峙する古橋の決意が書かれており、そのあまりに強く優しい思考に打ちのめされ、私達は変化をしながら彼との日々を生きねばなりませんでした。「アートは有効な表現手段か？」という彼からの問いかけに対して、考える限りの自省と変化の為の試みを七転八倒しながら繰り返しました。古橋は残念ながら95年に亡くなりましたが、死ぬまで、フルスイングで様々な試みを行なう事が出来たと思います。そして、多くの友人達がその後の試みを続けています。その原動力の一つにセゾン文化財団の助成があった事は活動を共にした皆の心に染みており、年間活動助成金という新しく柔軟な助成の制度がなければ、多くの活動は不可能でした。この助成によって切り開かれた未来は大きなものです。複雑な状況の私達に多大な理解を示して頂いたスタッフの方々にも感謝いたします。今後とも柔軟な制度の発明を協働していきたいと思っています。最後に古橋の言葉を。「アート。人間の精神に影響を与えるものの中の最も公平な手段として、私の選択に間違いはなかったのだと信じたい。そして、それに従事していただける自分を幸せに思うし、一緒に何かを創ってくれる友人を持って本当にありがたく思う。」

坂手洋二

劇作家/演出家/燐光群主宰



撮影：鏡田伸幸

「団体助成」という価値観の提示

セゾン文化財団さんには、毎年のようにさまざまな援助をいただいている。ここしばらくは海外交流に関するものが多かったが、今思い出しても画期的であったと思われるのは、他に先駆けて、演劇集団(カンパニー)に対する、一つ一つの事業に対象を絞らない純粋な意味での「団体助成」をスタートされたことである。

私たちは1994年から四年にわたって最初の「団体助成」を受けた。初めてのヨーロッパ公演に出かけたその旅先でその助成をいただけることを知り、異国の風景の中、新しい可能性に後押しされる心持ちで昂揚した。

この「団体助成」の素晴らしさは、方針や運用についての「変更」も含めた裁量を認め、カンパニーに対して信頼を与えることである。信頼とは、時々、枷であり、重荷でもあるが、自由な発想、柔軟かつフレキシブルな運営を実践できる「機動力」あるカンパニーなら、その責任を果たせるはずだ。

一つ一つの「事業」を消化する形態をとらなければならない助成システムは、有形無形の制限を受け、多くのロスが生じる不毛さを持っている。それに比べて、カンパニーへの信頼を明らかにする「団体助成」に認められた「自由度」は、きわめて合理的である。

その運動としての意義は、大きなものだと思う。深く感謝し、今後も優れた「前例」を提示することで表現文化への支援のあり方について、リードしていただきたいと思う。

佐藤郁哉

一橋大学教授



佐東範一

NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク (JCDN) 代表



佐藤まいみ

舞台芸術プロデューサー
埼玉県芸術文化振興財団
プロデューサー



継続性と広がり

20 周年、おめでとうございます。

以前あるところでフォード財団が 1950 年代初めから 1970 年代半ばにかけておこなった芸術助成が米国の舞台芸術、とりわけレジデント劇場の制度化に対して果たした役割について取り上げることがあります。セゾン文化財団が日本の舞台芸術に対して果たしてきた貢献は、それに勝るとも劣らないところがあります。実際、セゾン文化財団の助成事業をはじめとする様々な支援事業が存在していなかったならば、日本における現在の演劇シーンとダンスシーンは、継続性や広がりという点で見劣りのするものであったと思われる。

私自身のセゾン文化財団とのご縁は、1993 年度から 1995 年度にかけて現代演劇に関する調査研究に対して助成していただいた事にあります。その最終的な成果は、1999 年になってようやく『現代演劇のフィールドワーク』（東京大学出版会）という本の形でまとめあげることができましたが、財団の理事や職員の方々には、研究成果がそのような形を成すまで辛抱強く見守っていただき、またさまざまな機会に叱咤激励していただきました。これに加えて、財団活動に関連する研究会やさまざまなイベントでお目にかかることが出来たさまざまな舞台芸術関係者の方々とのご縁は、私にとって研究を進める上でまたとない財産になりました。

セゾン文化財団が 20 周年（＝はたち）を越えて、さらに舞台芸術の発展に寄与されることを祈念してやみません。

セゾン文化財団がなければ JCDN は生まれなかった。

15 年間に在籍した白虎社が 94 年に突然解散となり、これからどうしようかと、しばらく舞台から離れていた時に、友人の紹介で来日していたデビッド・ホワイトに出会った。ニューヨークのダンス・シアター・ワークショップ (DTW) という組織の代表だった。彼が話してくれたニューヨークの話がとても面白くて、これから何をするかわからないけれど、そこで勉強させてほしいと頼んだ。OK だった。幸運にもセゾン文化財団とアジアカルチュラルカウンシルのアートマネジメント研修の助成を受けることが出来、96 年 9 月から一年間、相方の水野と二人でニューヨークでインターンとして働いた。その 1 年間はカルチャーショックの連続だった。帰国して、日本にもネットワークが必要だ!! ダンスのネットワークを創るぞ!! と考えた。しかしどのようなネットワークが日本では可能なのか、全国行脚をして 3 年間準備したいという願いにセゾン文化財団が再び応えてくれた。環境整備の助成金を 3 年間出してくれた。これが無一文の私たちにとって本当に大きかった。毎月の家賃の支払いもどうしようかという経済状態の中、全国に行き各地のダンス関係者に会うことができ、その出会いが、ネットワークの基盤となった。自宅の一部屋で始まったものが、スタッフ 6 人を抱え事務所を持つようになり、今も続いている。もうあのニューヨークから丸 10 年が経っている。セゾン文化財団がなければ今の JCDN はなかったし、私は何をしているのだろうか。ここから感謝しています。

セゾン文化財団と日本のコンテンポラリーダンス

設立 20 周年と聞いて感慨深いものを感じます。今内外で活躍している日本の振付家やダンサーの多くは、ある時期に森下の稽古場に通ったり、助成金をいただいたりとなんらかの関わりを持ったのではないかと思います。

20 年前、1987 年には意欲的に舞台芸術を志す若い個人のアーティストの活動を支える、開かれた公的な組織というものは存在していなかった時代。セゾン文化財団の設立はそういった時期に望まれて登場した、いわば砂漠で出会ったオアシスのような感があったのではないかと思います。で、その結果セゾン文化財団の活動はその後の日本のダンスシーンの動向に大きな影響を及ぼしていきました。

どういった活動を支えるかの眼差しを持つためには舞台芸術に対する深い理解と熱意を持つ職員が存在は欠かせません。セゾン文化財団が今も多くのアーティストから頼られ、期待されているのは、代表の堤氏はじめ事務局の方々の日々のたゆまぬ努力（いつも劇場で見かけます）の積み重ねのたまものでしょう。みなさま 20 年間本当にお疲れさまでした。深く感謝します。今後も未来にはばたこうとする若いダンサーや振付家たちに頼られる財団でいて下さい。

ラルフ・サミュエルソン

Ralph Samuelson

アジア・カルチュラル・カウンシル [ACC] ディレクター



塩谷陽子

ジャパン・ソサエティー (在 NY)
芸術監督・芸術文化事業研究者



嶋田実名子

財団法人花王芸術・科学財団 常務理事兼事務局長



国際的な文化支援におけるユニークな関係

1983年、堤清二氏率いる当時のセゾングループは、アジア・カルチュラル・カウンシル [ACC] による「日米芸術交流プログラム」の創設に200万ドルの寄附を行いました。これはアメリカの芸術関連団体に対する日本からの単独名義の寄附として当時最高の額でした。1963年にジョン・D. ロックフェラーが ACC の前身を創設して以来、日本は常に重要な存在でしたが、この寄附により、日米間の芸術交流は格段に充実したものになりました。さらに、ACC のアジア初の拠点となる東京事務所の開設が実現し、以後 ACC がアジア各国の非営利団体等と構築してきた協力関係の原型となりました。

セゾン文化財団の設立後、このパートナーシップはますます効果的なものとなり、両者の緊密な関係は、国際的な文化支援活動の世界において極めてユニークな、モデルケースと呼べるものだと思います。

「日米芸術交流プログラム」に対して、1989年以来セゾン文化財団から毎年助成をいただいています。両者の協力関係はそれだけではありません。日米両国やアジア諸国の芸術に関する情報交換を日常的に行う一方、同財団が支援している日本の現代演劇・舞踊の芸術家によるアメリカでのリサーチ等の活動を ACC がサポートすることがあり、それによってセゾン文化財団による従来の助成のインパクトをより強化するなど、お互いの助成プログラムを補完し合っています。また、1990年代には、日本と東南アジアとアメリカの舞踊界をつなげる「トライアングル・アーツ・プログラム」を共催しました。

芸術の社会的役割に対して高い関心を示しながら、日本およびアジアの芸術支援に重要な役割を果たしてきたセゾン文化財団と密接に活動してきたことは私たちにとって光栄です。将来も、芸術家と芸術団体への支援、また文化交流の促進、そして国際的な相互理解の向上のために、一緒に仕事ができることを心から願っております。

我々は世界一だ! と思えるのもセゾンのおかげ

10 年前、ジャパン・ソサエティーが初めてセゾン文化財団から現代演劇紹介のための助成金をいただいた時が、私がジャパン・ソサエティーの舞台公演部に参加した時だった。白状すれば、いや、もうどうしようかと思うくらい、受け入れ体制が皆無だった。舞台美術や照明プランの図面が日本から送られて来ても、解釈できる人材がいなかった。セットを発注したくても、地元の工房との付き合いもない。ゼロ体制からくみずほぐれつ、よくまあやっつけたものだ。

翌年からいただいた助成金は、5 力年という長期の約束。そのため、毎年一つずつ、慣れるに従ってただ公演を打つだけではないワザ(?)を習得した。ツアーをプロデュースし、ワークショップを各地で設け、現地のアーティストとの交流の場を作り、オフ・サイトの関連プログラムを作り、今では仕込みの時間から果ては最終日の撤去の時間まで、劇団のリーダーたる演出家には自由時間などまったくありませんよというほどに、米国滞在の時間をスケジュールでパンパンにできるまでになった。英訳や字幕制作も含めて、恐らく日本以外でこれほど日本語の演劇を見せるノウハウに長けたプレゼンターは世界に我々以外いない! と声高に自負してしまうまでに成長した(と思う)。掛け値無しに、これすべてセゾンさんのおかげです。

継続して一団体に助成金を出すことは、財団にとって勇気のいることだろう。その英断あってこそ、今日の我々の自負である。2 期目の 5 力年助成もそろそろ終わりに近づいている。まだまだ我々成長できる、そんな自負もあるので、どうぞまたあと 5 年、支えてくださ〜い!

文化財団のトップランナーとして

財団設立 20 周年おめでとうございます。

文化支援の財団を運営する私にとって、『セゾン文化財団さんの存在は『憧れ』であり、『目標』です。文化支援のやり方は様々ですし、どれが正解というわけではありませんが、貴財団は、資金助成だけでなく、スタジオという空間の提供や、人材育成など、様々な実験的な試みも同時に、この 20 年間、日本の芸術創造活動を総合的に育成されてきたと思います。この手ごたえのある文化支援活動を実現させるためには、財団を運営される事務局の皆様の見識と努力なくしてはできません。多くの表現者達が、セゾン文化財団に支えられ、認められ勇気を得たと思います。これからも、様々な先進的な試みをしていただき、「財団の活動でそんなこともできるのか」と私達、同業者を驚かせてください。ともに文化支援を担うものとして、私達もそれを目標に、さらに本当に有効な芸術助成について工夫を重ねてまいります。次の節目に向けてますますのご発展をお祈り申し上げます。

清水信臣

劇団解体社主宰/演出家



撮影:宮内 勝

謝意

積年にわたる私たちへの支援に謝意を表します。

貴方たちが、私たちの「現場」を信頼しつづけてくれたことに。たとえば、幾度となく行われた大胆な計画変更への大きな理解にたいして。また、どんな小さな公演にも駆けつけてくれたこと、その場で、あるいは折々の場で語られた貴方たちの姿勢にたいして、すなわち、市場の論理が支配する風景の「外」で実践される舞台への愛と激励にたいして。

積年にわたる貴方たちとの関係のなかで学んだことに謝意を表します。それは、いま私たちが絶えず自戒すべきこと、すなわち助成制度の「内面化」であり、手段と目的の倒錯である。

曾田修司

跡見学園女子大学教授



創造性と社会性への視点

セゾン文化財団は、他の誰にも出来ないことをやってのけるアーティストという存在の唯一無二性に多大な尊敬を持って接している。そして、同財団は、アーティストはその専門性を持った唯一無二性のゆえに公共性を持つ、と考えている日本にはめずらしい芸術支援機関である。私には、そのように思える。

アーティストを育てる。独自であることにこだわる。小劇場や NPO に着目し、支援する。セゾン文化財団には、創造性と社会性を重視する姿勢が顕著に見られる。

金額の面で言えば、アートに対してもっと巨額の助成を行っている支援機関が他に存在する。しかし、アートに関わる制度が未整備である現状に鋭く切り込み、自らが最初に取り入れた創意工夫が社会化され、同種のプログラムが他に波及していくような活動を戦略的に行ってきた財団は(他にないわけではないが)きわめて稀有な存在である。

今年 2 月に政府が決定した「文化芸術の振興に関する基本的な方針」(第 2 次)の中に、「専門的機関を経由して助成する再助成制度の有効性について検討」との文が盛り込まれた。セゾン文化財団のような明確なポリシーを持ったグラントメーカーがいくつもあれば、再助成(re-granting)の導入によって日本の芸術支援のあり方は大きく変わる可能性がある。そのことにも私は大いに期待したいと思う。

高樹光一郎

ハイウッド・プロデューサー



某月某日の携帯電話

さすがに日にちは曖昧だが、今でも忘れない。1996 年某月某日。自衛隊市ヶ谷駐屯地の裏にさしかかる坂道を自動車運転中に携帯電話が鳴った。

セゾン文化財団からの助成決定のお知らせの電話だった。

1995 年、プロデューサーとか制作なんて言葉すら知らなかった時に伊藤キムに出会い、様々な巡りあわせで、伊藤キム+輝く未来の制作をすることとなった。その次の年から伊藤キム+輝く未来は 6 年間助成をいただき、BATIK は 3 年間、AbsT は 08 年までの 3 年間と、幸いなことに関わってきたカンパニーが続けて助成をいただけたことで、セゾン文化財団とのおつきあいは 10 年を越えた。活動の基盤となる資金をもって活動できるということがどれだけ安心感があり、充実した活動につながったか。加えていつも暖かく見守っていただき感謝に耐えない。カンパニープロデューサーとしては、舌の根も乾かぬうちに言ってしまうと、若手だけでなく更なる活躍が期待出来る中堅カンパニーへの支援なども今後あったらいいなぁと期待してしまう。

この 10 年余りのプロデューサー生活は大変なことも沢山あったが、充実していたと思う。振り返ってみると、今日までのすべてのことは冒頭に書いた助成決定の電話をもらったところからはじまったんだなぁなどと思ってみたりして。

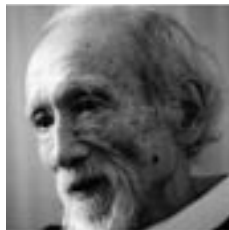
高萩 宏

世田谷パブリックシアター
制作部長



高橋昌也

俳優/演出家
セゾン文化財団
評議員



田中 泯

舞踏家



天にも昇る心地

1991年のいつであったか、はっきりと覚えてはいない。セゾン文化財団がまだ最初のビルにあって、銀座1丁目の地下鉄の駅を出た後、セゾン劇場を通り過ぎて行った先のビルにあった。僕は「何か話があるので」と言うことで財団に呼び出された。1990年の夢の遊眠社のエジンバラ公演、1991年秋の英国でのジャパン・フェスティバルでの演劇部門全体への助成ですっかりお世話になっていたの、それらの件の何かであろうと思い、伺った。

そこで聞いたのが、ニューヨークのコロンビア大学アーツアドミニストレーション学科への留学の話だった。留学生となるための条件などを聞き、返事は良く考えてから、ということで事務所を出て、銀座方向に少し歩いた公衆電話から家へ電話した。全く予想していなかった展開だけに、妻に説明するのがもどかしかった。アメリカの大学院への留学の話があったが、いくつか難しい点があってと説明している僕に、妻が「でも、決めているんでしょ」と言ったとき、初めて僕はもういろいろなこと乗り越えてでも留学しよう」と決めている自分に気づいた。

「天にも昇る心地」があるとすれば、この時の何時間だろう。その後、英語の資格試験、大学院レベルに耐えられるかの適正試験のようなもの、ニューヨークでの生活費の心配など、具体的な問題が次々出てくる。が、僕にとって、人生が予想もしていなかったことで、大きく変わった一瞬で、あの「フワッとした気持ち」は今でも忘れられない。

森下スタジオの功績

財団の設立と、開場間もない「銀座セゾン劇場(現・ル テアトル銀座)」の芸術監督をお引き上げたのが同じ年だったこともあって、この二十年微力ながら財団のお手伝いを続けている。当初の数年间は、助成対象の選考審査員として末席につらなっていたが、その頃助成した人々が今は、押しも押されもせぬ中堅として多方面で活躍されているのは喜ばしい限りだ。「現代舞台芸術」の助成を主たる目的としたまことにユニークな助成機関は言うまでもなく本邦初のことだから、経済的に間尺の合わない舞台芸術を志す人々にとっては、まさに福音というほかないだろう。出だしの頃は彼らに対する経済的援助が主だったが、都会の、とくに東京でいちばん難渋していたのが「稽古場」という問題で、これが創作活動の大きな妨げとなっていたので、その「場」を提供できる仕組みをつくろうと、稽古場を建てるに適した土地探しに、週一、二回は事務局スタッフと連れだって、あちこち駆けずり廻ったのも懐かしい思い出だ。結果、舞台人に馴染みの森下町に格好の土地をみつけ、理想的な一大「舞台芸術センター」の実現に向け、あらゆる機能を備えた地下二階地上三階という壮大な設計図の完成をみたが、地質の関係で地下工事が不可能ということで、断腸の思いで縮小したのが現在の「森下スタジオ」だ。理想どおりに行かなかったとはいえ、念願の「稽古場」の提供による助成という目的は果たせたが、今では予想をはるかに超える成果をあげ、稽古場のみにとどまらず、さまざまなワークショップや試演会の場としても使用されるようになり、「発表」の場としての機能も果たしているのは嬉しいというべきだろうか。

森のプロジェクトを3年経験して。

東京に森はあるのか、あるならば、そこに人を集めてダンスを見てもらおう、と思いついてから久しい時が流れました。都市を離れての森は、すぐにでも見つかるし、人々の営みの延長上にあることは現実的だ。しかし、都市の中の森となると、まさに事は面倒になる。が、しかし、私達のからだの中にひそんでいる森への郷愁は否定しようなく、存在していると、私は確信している。観客とダンスが環境を共有し、時をすごす。それも都市の営みの只中でだ。幸せにも井の頭公園というかつての武蔵野の入口の地に、伝統の森の一隅を借りることが出来た。ここでの三年三回の経験は、作品創造という意味では各方面への資料が山積される結果となった。望み以上の結果といえる。にも増して、観客のからだが体験した事態は計り知れない。ダンスを眼で見、脳で判断(?)し、心に伝わる、といった劇場空間での手続きとは根本的に異なる手続きが、森では発生してしまう。

森に至る体験、そして森の生態圏への参入によって、まず五感が開かれる、そこに空からかすかに聞こえてくる都市の音、さらに近隣住民たちの眼差し、ダンスが加わってくる。観客は、人間の、そして又環境のダンスに巻き込まれるようにして在る。「入場料」という義務と権利を取り払った関係の中でのダンス進行は必然解放へと向かう。

自然環境への見直しが急がれている現在、人々が夏の一夕を森という共通感覚の只中で共同を感じとれたことを確信出来たことは余りにも大きな成果だと言えます。

貴財団の支援に心より感謝を申し上げます。

勅使川原三郎

舞踊家/振付家



撮影:Bengt Wanselius

「表現以前」に大切な事

セゾン文化財団設立 20 周年おめでとうございます。貴財団とのおつき合いは、財団の設立と共に始まったと理解しています。

森下スタジオでは 3 年間にわたり、「KARAS ダンスワークショップ」を継続させてもらいました。常に 100 人を超える若い参加者が、「勅使川原メソッド」を経験しました。経験者の多くはその後経歴を積み、様々な分野において活動しているようです。

その頃から今現在も常に言い続けていることは、「表現以前」に大切な事を精一杯経験的に学びなさい、ということです。「基礎」という言葉は明瞭なようでいて、それが何かを示してはいません。「表現」、それは目的としなくても、誰でもできることです。だからそんな言葉に惑わされず、独自の目標、好きなものを、いやそんな程度におさまらないくらいのももの見つけてほしい。

「森下スタジオ」の 3 年間を終え、私たちは同じ江東区に「KARAS 亀戸スタジオ」を 1996 年より開始し、現在に至っています。

今後ともおつき合いをお願いしたいと思っています。

平田オリザ

劇作家/演出家/青年団主宰



撮影:青木 司

稀少な財団

指定管理者制度による混乱などを遠因として、東京、大阪といった大きな自治体では、昨今、アーツカウンシル(芸術評議委員会)設立の気運が高まっています。私自身、そのような活動に関わることが増えてきているのですが、その際にいつも発言をしているのが、こういった機関は、理事会の下に、調査研究機関的な性格を兼ね備えた事務局機能を持つことが重要だという点です。そして、おそらく、それがきちんと機能している組織は、数少ない。セゾン文化財団は、その数少ない団体の一つだと思っています。

このままいくと、セゾン文化財団が、指定管理者として某自治体のアーツカウンシルを受託するなんていう事態になってしまうのではないかと。まあ、それは冗談ですが、それくらいにセゾン文化財団の、この二十年のあり方は、突出して素晴らしかったと思っています。舞台芸術を支援する数少ない財団として、今後もさらなる成長を期待します。

福井健策

弁護士・ニューヨーク
州弁護士



近況のご報告

財団には、1997 年と 99 年の二度、助成を頂きました。米国コロンビア大学への留学と、VLA という、ニューヨークで低所得のアーティストのために法的援助を与える非営利団体での研修です。今や、エンタテインメント分野は新任弁護士の「ちょいあこがれ」だそうですが、私が弁護士になった 10 数年前、国内に専門家はほとんどいませんでした。日本の文化振興をリードするセゾン文化財団の助成を受けて留学することは、私にとって、「法律家も芸術文化の一翼を担うのだ」という決意表明でもあったのです。

帰国後、財団の主催でおこなった「舞台芸術と法律・契約」の連続セミナー(ナビゲーター奥山緑さん)が嚆矢のひとつとなって、少なからぬ大学や団体で同種の講座が組まれるようになりました。4 年前に、芸術支援を旗じるしに設立した「骨董通り法律事務所 For the Arts」には、現在 5 名の弁護士が集い、多様なジャンルからの依頼に日々無い知恵を絞って奮闘しています。個人アーティストからの飛び込みの相談も少なくありません。「アートと法制度」の関係を考える提言もおこなっています。

手前みそですが、そうした汗の一粒一粒が財団への私なりの恩返しです。20 周年おめでとうございます。そして、ありがとうございました。

布施龍一

レニ・パッツ代表



魅惑のリストと魔法のシート

レニ・パッツを結成した14年前、セゾン文化財団は我々にとって魅惑的なブランドだった。若手の公演に対し使途も問わずに大枚をポンと差し出す気風の良さと、なによりその採択リストの豪華さがブランド性を高めていた。しがらみを感じさせないそのリストは時代の活力と純粋な期待感を明確な輪郭とともに伝えていたし、選ばれた者には誇りを与えてくれた。こうした魅力はセゾンに特有だった。

そのリストにレニ・パッツは94年の第一回公演で初登場し、その後01年からの7年間でのべ6回載る事が出来た。

年間助成の契約の席で「4年目以降は海外での活躍に対する支援と考えています」と宣言され、採択された安堵もつかの間、一日も早く海外公演を実現しなければと酷く焦ったが、そこへ脇から「3年間の活動計画」と書かれた紙が差し出され、「このシートに書いたことはみんな実現するから大丈夫よ」と耳打ちされた。誰が言ったかすでに記憶は曖昧だが、これ幸いと大層大胆な海外での計画をそこに書き込んだ。そのご利益あって初年度からとんとん拍子で海外での活動は広がり、今では海外公演が活動の中心となっている。我々の今日は、あの日の財団の示唆と魔法のシートのおかげなのだ。

セゾン文化財団とは批評性と先見性のみを根拠に助成を行う唯一の団体である。全盛にも優る魅力的な英断と採択リストを今後に期待しつつ、20周年を祝福したい。

おめでとうございます。また魔法のシートくださいね。

松本 修

演出家 / MODE 主宰



感謝しています

MODEというカンパニーを旗揚げして、自前のアトリエを構え、作りたいものだけを作ると意気込んで始めたのはいいものの、やはり経済の問題は避けて通ることはできなかった。だから、活動を開始して二年目からのセゾン文化財団の公演助成と、その後の年間助成はなんと幸運なことであって、まったくお世辞ではなく、あれらの助成なくしては20年近くもMODEの舞台作りは続けられなかったし、演出家としての私個人の創作も続いているだろうと思う。全国を飛び回ってワークショップを展開したのも、建前は「地域演劇」や「公共劇場」の発展を謳っていたものの、今考えると、その成果は確実に私自身の創作の糧になったと思うし、ロシア・東欧を巡って劇場通いをしたのもその後の私のチェーホフやカフカの舞台作りのベースになっている。現在、「地域演劇」や「公共劇場」、そして「東京の演劇シーン」は当時、希望を込めて思い描いていたものとはいささか(かなり?)違った形で展開している。正直、苦々しい思いをし、幻滅することも多々あるのだが、まあ、そうそう世の中一気には変わらないものだから、じっくり構えて、創作する者は自分のやりたいことに拘り続ける他はないだろう。だからこそ、セゾン文化財団のような存在が欠かせない。今後も、新しい才能への援助とアドバイスを続けていただきたい。期待はずれも偶にはあるかもしれないが、セゾン文化財団は「見る目」がある。かなりの確率で当たりが多い。それにしても、舞台のことだけを考えていた日々。あのころは良かったなあ。……さて、明日、セゾンの助成金で歩き廻ったロシアに11年振りに行ってきます。モスクワはメイエルホリド・シアター・センターでの別役実作品『場所と思い出』の上演です。遠回りではありましたが、これも助成の成果であると、自己評価する次第であります。

宮城 聡

演出家 / (財) 静岡県
舞台芸術センター芸術
総監督



変わらないもの

いつのまにか「世界をめざせ!」と思っていた。

そして最近まで僕は、演劇人が「世界をめざせ!」と思うようになるのは、誰でもほぼ自動的にそうなるのだと考えていた。

しかしあるとき自分より若い世代の演劇人に「なぜ世界をめざさなくちゃいけないんですか?」と尋ねられ、初めて、あ、これは自動的にそうなるのではなく、そう思うようになる原因があるのだ、と気づいた。

僕の場合のその原因とは何だったろう?

すぐにはわからない。

きっと原因はひとつだけではないのだろう。

だが考えているうちに、どうやら原因の一部を成したのが、二十年前のセゾン文化財団の助成システムじゃないかという気がしてきたのだ。世界で活躍するようになれば、お金の心配をしなくてすむようになる……というイメージ。

爾来二十年。どこまで行っても「これでいい!」と思えることのないこの道だが、どこまで行っても変わらぬ目標は「世界と出会いたい」、これに尽きる。

セゾン文化財団が若い演劇人に「世界をめざせ!」とそそのかし続けられんことを!

宮沢章夫

劇作家・演出家・作家
遊園地再生事業団主宰



撮影：引地信彦

あたりまえのレベルをひきあげる

演劇において文化的な支援を求めるとき、たとえば極端なことを言い出せば、「自分たちの稽古場と劇場が持てたらいい」というように理想や希望を言い出したらきりがありません。そこで当然、支援を受ける側もある程度の見通しを立て、それはいくらなんでも欲ばりだと反省するか、そもそも、そこまで思いつかないのが普通です。けれど、そうした極端な発想が浮かばないこともまた表現者を貧しくしていないでしょうか。それというのも、文化支援のモデルがすでにあるからです。舞台を作るときもやはり、演出家は、誰が決めたのかわからない「あたりまえのレベル」を前提にします。たとえば衣装のことを考えてみると、女優がスーツで登場するとき、それはチャンネルでなければならないのが「あたりまえのレベル」だったら、誰もが疑わずにチャンネルを用意するでしょう。べつにチャンネルを着ればいい作品になるとは思えませんが、それがあたりまえの世界では、なんの疑問もなく、そうするにちがいないのです。これはあまりに突飛なたとえでした。ただ、「あたりまえのレベル」が低いことで貧しくなっていることは舞台を作る上でまだいくつもあります。それはほんの些細なことにも存在するでしょう。文化支援に期待するのは、こうした貧しい発想を生み出してしまふ「あたりまえのレベル」を変えることだと私は考えます。それはむしろ、表現者に対する教育だと言ってもいいでしょう。いまのパフォーミングアーツを取り巻く状況は、きわめて狭い視野でしか考えられていないように感じます。日本の、もっといえば、一部の国内の大都市でだけで話題になりそこに人気者が生まれたらそれで満足してしまうのは、パフォーミングアーツにとって可能性を狭めるだけの、きわめて小さな「あたりまえ」です。世界に出てはじめて、それが「あたりまえ」だとすれば、演劇もきっと変わります。それが前提なら、「あたりまえのレベル」はいまとはまったく異なるものになるでしょう。いま、文化支援に期待するものを書き出せば数多くありますが、そうした「あたりまえのレベル」を引き上げることもまた、助成金を配布するような直接性は持たないにしても、絶対に必要なことだと考えるのです。

山岡義典

日本 NPO センター
副代表理事
法政大学教授



これからも日本の財団界に新しい風を

新鮮な思いでセゾン文化財団の設立を迎えたことは、今でも忘れられない。私はその頃トヨタ財団に席を置き、数年前には専務理事の林雄二郎と共著で新書版の『日本の財団』を出版したところで、助成財団センター（当時は助成財団資料センター）の設立と運営にも関わっていた。そのためあって、助成財団界への期待はとりわけ大きかった。

セゾン文化財団の設立は、その期待の一端を実現させてくれた大きな出来事であった。財団界に新しい風が吹いた、そんな思いで設立を迎えたものだ。そしてその思いを裏切ることなく、次々と斬新なプログラムを展開してこれた。芸術活動に資金的支援をするとはどういうことか、そのことを常に考え、問題意識をもちながら事業を展開されてきた。助成プログラムに哲学を感じさせるといったらオーバーだろうか。

財団を牽引されてきた現専務理事とは、15年前に私がトヨタ財団を離れてからも、ずっとお世話になり続けてきた。10年前の日本 NPO センターの設立にあたっては評議員に就任いただき、その最初の事業である『NPO 基礎講座』の講義と出版では助成財団の項を担当していただいた。また5年前に設立した市民社会創造ファンドでも、当初から運営委員（理事）として刺激ある助言をいただいている。

20年の礎をもとに、これからも日本の財団界に新しい風を吹かせ続けていただきたい。

米屋尚子

芸団協・芸能文化振興部
キャリアサポート担当部長



柔軟な姿勢

きわめて個人的なエピソードで恐縮だが、1991年秋、それまでフリーランスで演劇ジャーナリストだった私は、イギリスに留学した。当時、アートマネジメントという言葉が広まり始めてはいたけれど、一体、日本でそういう教育が本当に可能なかどうか、ちゃんと学んでみたいと思っていたことと、演劇の本場イギリスで演劇を学びたいと思っていたからだった。留学先は、ロンドンのシティ・ユニバーシティ芸術政策運営学科、アーツ・アドミニストレーションの大学院ディプロマ・コース。同学科には芸術批評の修士コースもあり、そこで学びたかったが、英語に自信が持てなかったのも、まずはディプロマコースを希望したのだった。非ヨーロッパ圏からの留学生の学費は高い。下宿は質素なところだったが、安くはない。爪に灯をともしような儉約生活を続けても、自分の貯金だけでは1年ちょっとがせいぜい。私のように一旦社会人になった者は、一般的に日本の助成財団では留学支援対象外だった。批評コースにも行きたいがどうしよう、というときに助けてくれたのが、セゾン文化財団だった。

当時は、セゾン文化財団にも研究助成はあったが留学支援の枠組みはなかった。だから当初、何らかの研究名目の助成申請をしてみようかと考え相談したが、お金を得るのが主目的で調査研究の申請をするのは筋が違う。だいたい語学のハンディがあるし大学院の勉強は片手間でできるような生易しいものではない。諦めようかと逡巡している頃、新しく留学支援を始めるから申請してみてくれという朗報が届いた。おかげで私は92年秋から93年にかけて、2つめのコースに進学できた。ここで学んだことが、その後の自分の仕事にどれだけ重要な基盤となったことか！

私の場合は一例にすぎない。稽古場助成や芸術家のサバティカル支援も、舞台芸術関係者のニーズに耳を傾け、その時々に必要なと思われる新しい支援を始めることを躊躇しない同財団の柔軟な姿勢の表れだ。一度確立した枠組みに拘泥することなく常に見直しつつ前に進む。言うは易しだが、多くの制度、組織が実行できないでいることではないだろうか。

セゾン文化財団 20 周年に寄せて Ⅱ. セゾン文化財団の果たしてきた役割

セゾン文化財団の活動を見守ってくださっている識者の方々から、当財団の果たしてきた役割についてご寄稿をいただきました。

(五十音順、敬称略)

文化政策からみたセゾン文化財団の意義 ～ 1990 年前後の文化状況を振り返りつつ～

伊藤裕夫

富山大学芸術文化学部教授



今年はセゾン文化財団が設立されて 20 周年になるという。20 年前、1987 年前後の日本といえば、円高が契機となって始まったいわゆるバブル景気のさなか、安田火災海上（現：損保ジャパン）がゴッホの「ひまわり」を高額で落札した事を皮切りに円高を背景にした外国の有名絵画の購入ブームが始まり、また「冠イベント」と称されるスポーツや文化事業が盛んに行われ、企業の文化施設も多数オープンした頃である。

どうもマスコミ的にみると、バブル経済真っ盛り、企業も泡銭を垂れ流していたとみられがちな時代ではあるが、実はこの時期は、好景気の恩恵もあって芸術文化振興基金の創設や企業メセナ協議会の設立など、文化政策面においては大きな進展が見られた時期でもあった。芸術文化系の企業財団が多数設立されたのもこの時期である。^{註 1)} こうした中、セゾン文化財団は、現代演劇（当初は美術も対象であった）に絞って、地味ながらもきわめて先駆的な助成活動を始めた点で突出していた。

本稿では、セゾン文化財団が誕生した 1980 年代後半から本格的な活動が軌道に乗った 1990 年代前半の文化状況を振り返りつつ、アメリカの助成財団の事例を参照することで、セゾン文化財団のわが国の文化政策上における意義を考えてみたい。

1. 1990 年前後の日本の文化状況

まず、セゾン文化財団が創設された 1987 年頃の日本の文化に関わる社会環境、特に企業の文化活動を中心に概観してみよう。

高度経済成長とその後の二度にわたるオイルショックの克服を経て、1970 年代後半あたりから、企業による文化関連活動が盛んになる。とは言っても、当時の「文化」は広い意味でのそれで、スポーツやレジャー活動、ファッション、料理といった生活文化系が主流で、芸術文化系もニューミュージックや映画などポピュラーなものが多かった。まさに、「モノのゆたかさから、ココロのゆたかさへ」という時流の中での「文化」へのすり寄りが始まったわけである。

これが 1980 年代、それも中盤にもなってくると、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」を反映してか「文化」も高級（高額）化し国際化していく。印象派の絵画展やブロードウェイ・ミュージカルに始まって、オペラ、バレエと様々な欧米の第一級の「アート」事業が企業の冠をいただいて、首都圏を中心に繰り広げられるようになる。

またイベントだけでなく、80 年代後半にはサントリーホール（サントリ

ー1986 年）カザルスホール（主婦の友社1987 年）東京グローブ座（西戸山開発、1988 年）、東急文化村（東急グループ 1989 年）など、企業の文化施設もオープンしている。セゾン文化財団とも関係の深い銀座セゾン劇場も同時期（1987 年）のオープンである。

こうした流れと併行して、もう少し真剣に文化の振興に取り組もうという動きも企業人の間から出てきた。1988 年の秋、フランス政府と朝日新聞社の共催による「日仏文化サミット」が開催されたが、この中で日仏の企業の文化への関わり方の違いが話題になった。フランスは自他共に認める「文化国家」ではあるが、企業による文化への取り組みは遅れており、日本企業の熱心な文化活動への取り組みの背景を知りたがった。一方、日本はフランス企業の非常に個性的な理念をもった取り組みや、アドミカル（ADMICAL＝商工業メセナ推進協会）という推進組織の存在に興味を持ったのである。この結果、座長を務めた故永井道雄氏の提唱もあって、1990 年春の（社）企業メセナ協議会の設立にいたる。そしてそれと相前後して、経団連に 1%クラブと社会貢献推進委員会が発足、また資生堂をはじめとするいくつかの企業では文化担当セクションや社会貢献部門が新設された。

企業メセナ協議会が設立された同じ 1990 年春には、他にも文化政策上、注目すべき動きがあった。1980 年代後半からの文化・芸術団体もよるたびたびの要請もあって、国から 500 億円と民間から 130 億円を基に芸術文化振興基金が創設され、様々な芸術活動に対する助成が始まった。また、地方自治体においても、はじめて専属の創造部門を有し、市の予算の 1%が運営費に充てられる、本来的な意味での文化施設である水戸芸術館がオープンした。

このように、この 1990 年前後という時期は、わが国の文化を取り巻く環境の転換期であったわけだが、しかしこの段階ではそれは芸術文化振興への財政的基盤が整備されたというレベルを超えておらず、なぜ芸術文化振興なのかという理念はもとより、どのように芸術文化を振興するのかという基本的な方策もほとんど提示されることはなかった。

こうした状況の中で、セゾン文化財団は船出したわけだが、ではセゾン文化財団も、こうした動きのワン・オブ・ゼムであったのだろうか。

2. 米国フォード財団と演劇支援

セゾン文化財団による助成活動の意義を考えるに当たり、財団（正

確には民間非営利活動)先進国であるアメリカ合衆国の事例——セゾン文化財団も設立に当たってたぶん参考にしたであろう、1950年代から10数年にわたって行われたフォード財団の地域演劇育成プロジェクトを取りあげ、検討したい。

アメリカには、民間公益活動を行う財団が多数存在するが、その多くは事業等で成功し資産をなした人が、フィランソピー(人類愛)の精神から財産の一部を寄贈し、その運用益を様々な社会的活動に助成する活動を行っている。しかし重要なポイントとして、アメリカの財団は、単に資金的な助成をするだけでなく、特に大手の場合は社会の変革を目指す民間政策集団といった側面を持っており、このプロジェクトはそうした政策実験の代表的なものといえる。

フォード財団は、1936年、フォード自動車の創設者であるヘンリー・フォードの長男エドセル・フォードによって創設された。1950年頃までは、地元ミシガン州でチャリティ活動や教育等に助成活動などを行うローカルな財団であったが、50年代になって保有するフォード自動車の株を売却したことから資産が急膨張し、全米でも最大級の財団に成長し、以降は全国、さらに国際レベルの助成活動を行うようになった。地域演劇育成プロジェクトは、フォード財団がまさに全米レベルでの新展開を開始したもっとも初期の助成プログラムであった。

当時のアメリカにおいては、演劇を含め文化領域は基本的に「市民社会」のものという認識で、政府は基本的にそれに関わるべきでないとの考えから(連邦政府に芸術支援を行う機関 NEA が創設されたのは1965年のことである)、アメリカにおける芸術文化は、巨大都市を中心とする「商業芸術」と、一部の個人パトロンの支援によるヨーロッパ由来の「純粋芸術」(具体的には交響楽団やオペラカンパニー美術館等)、および大学や職場を中心としたアマチュア活動が行われているといった状況で、中でも演劇は「純粋芸術」とは見なされていなかったためパトロンによる支援もほとんどなく、20世紀半ばまでは、ニューヨーク・ブロードウェイに代表される商業演劇と、地域コミュニティレベルでの演劇活動(「小劇団」運動が真にプロフェッショナルとはよべないレベルで細々と活動)に限定されていた。また、俳優、脚本家、演出家など演劇に関わる人材はニューヨークとロサンゼルスに集中しており、彼らを地域レベルの劇団に引きつけたくともかなわず、演劇のレベルの向上も絶望的な状況にあった。

さて、こうした状況の中でフォード財団によるプロジェクトが始まったわけであるが、その詳細については佐藤郁哉氏の論文等^{註2)}を参照していただくとして、ここではその基本的な考え方と施策の柱をあげておく。

先にも触れたように、アメリカの財団は、単なる資金助成だけでなく、社会を変えていくための政策形成者といった側面を持っている。フォード財団は助成プログラム策定に当たり、約半年間をかけて、全米175カ所で芸術関係者に対する聞き取り調査や研究会を開催し、また当時のヨーロッパにおける芸術支援や劇場政策に関する現地調査を行い、舞台芸術の現状、発展を妨げている問題点、解決すべき課題を詳細に分析した。そして得られた結論が、地域における非営利かつプロフェッショナルな演劇の育成で、基本的な考え方としては、各地で細々と

生き残って活動が続いている地域レベルの劇団を、その芸術的ならびに経済的基盤の強化とネットワーク化を通して各地に「レジデント劇場」(劇場付き劇団ないし専属劇団を持った劇場)を形成していくというものであった。そしてそれを実現すべく、以下のような基本施策を立て、非常にきめ細かい助成プログラムを実施したのであった。

その第一は演劇界ネットワークの形成である。当時アメリカの地域演劇人は互いに孤立して活動していたため、聞き取り調査で知り合った同様の夢と悩みを持つ演劇人同士をつなげ、孤立の克服と連携に向けた中間支援組織である全米演劇連絡協議会の結成にむけて支援した。第二は、劇団=劇場に向けての組織的・経営的な基盤の整備である。持続的な組織を前提とした演劇づくりのアプローチとして、ブロードウェイシステム(プロデューサー主導によるコンビネーションシステム)とは異なる仕組み、すなわちアンサンブル・カンパニーがレパートリーを持って継続的な公演活動を行っていくことができる基盤形成を支援した。第三は、演劇の真のプロフェッショナル化のための基盤確立に向けた支援である。演劇人達の夢は、単に演劇で「食べていける」というところにあるのではなく、「知的触発、プロフェッショナリズム、芸術的真実に対する献身」の実現にあるわけで、これを可能にするには、「訓練、創造、公演制作」の面でよりプロフェッショナル化をはかっていくことが求められるからである。

このプロジェクトは、当初は5年限定のものであったが、その5年を経ずして実績をあげ、理事会からも高く評価され、期間は延長され、予算も増額、結果的には1970年代いっぱいまで、具体的な施策自体は変化しながらも継続され総額4300万ドル(当時の日本円で約150億円)が投じられたのであった。

このように、フォード財団のプロジェクトは、単なる資金援助ではなく、まず演劇人達の交流を促進しつつ、安定した活動ができるプロフェッショナルなレジデント劇場づくりの基盤形成に向けたきわめて手の行き届いた個別支援プログラムからなっていた。そして、70年代に入ってから特に力を入れたのは、フォード財団の支援が終了してからも各地のレジデント劇場が自立的に活動を継続できるための仕組みづくりであった。そのため、キャッシュリザーブというきわめて大胆な資金援助を行ったほか、レジデント劇場の立地する地域での社会的支援の仕組みづくりや、1965年に創設された連邦政府の芸術基金(NEA)や個別プログラムの他の助成財団への橋渡しなどがなされた。

3. セゾン文化財団の文化政策上の意義

セゾン文化財団の意義を考えるに当たって、フォード財団の地域演劇育成プログラムを取り上げたのは、財団の役割とは何かということ提起しかつたからである。それは先に述べたように、財政的な助成はもちろんその本来的な役割ではあるが、しかしそこには独自の理念と方法論がなくてはならないということである。そのためには、助成に当たって助成対象に関する調査を十分に行うことが欠かせない。セゾン文化財団も1987年の設立後本格的に助成事業を開始するに際し、88年から92年にかけて演劇界の状況調査を行っていること、これこそセゾン文化財団が当時の他の助成機関ともっとも大きな違いを生み

出した点であった。

その結果、資金提供のみでない複合的な支援体制の整備が進められ、創造プロセスへの支援、創造環境の整備といった基本的な方策を確立し、1回限りの助成ではない中長期的な支援として、運営を軸にした年間助成プログラムを開始した。他にも、国際共同公演やアーツマネジメント分野での人材育成、また94年には森下スタジオが開設されている。これらの施策は、当時の文化庁はもとより、芸術文化振興基金をはじめとする官民の支援システムのどこもまだ思いさえ浮かんでもいない、きわめて先駆的な試みであった(周知のように、これらのプログラムの一部は、数年遅れて文化庁のアーツプランに取り入れられた)。文化を消費的なものと捉えず、生産(創造)という面から、現在の日本にかけている問題(これが本来の意味での「ニーズ」である)を調査を通して把握し、その課題に応えた施策をプログラムとして定着させた功績はきわめて高いものがある。

筆者は、芸術文化支援に限らず、民間による社会貢献活動は、近代の社会システムにあっては一種のオルターナティブであると考えている。それは公的なそれを補完するものであって、決して主役となるものではないと思っている。しかしそれは量的な意味での「補充」であってはならず、そのためには独自の視点をもった政策提言がなくてはならない。そういった意味では、セゾン文化財団のこの間の取り組みは、わが国では希な民間政策形成の事例である。

しかしあえて難を言えば、その後の変化——(財)地域創造の設立や文化庁のアーツプランの開始の中で、セゾン文化財団の独自性がやや埋没しつつあるような気もしないわけではない。阪神淡路大震災や長期の不況を経て、今日のわが国の文化状況は1990年当時とは大きく変化した。NPOをはじめとする市民活動が盛んになる一方、構造改革にともない「格差」が拡大しつつある。

筆者はこの数年、地方暮らしをしていることもあり、地域における文化ニーズという問題に関心が強くなってきている。フォード財団の真似をしるという気はさらさら無いが、日本においても地域からの演劇育成ということにも取り組むことも必要なのではないだろうか。何だか最後は個人的な要望になってしまったが、20年たった今、セゾン文化財団にはもう一度日本の演劇状況調査から、再出発することを期待したい。

註

- 1) 企業メセナ協議会の調査(2004年)によれば芸術文化系の企業財団140のうち、1985～1989年に設立された財団は27、1990～1994年に設立された財団は39と、1990年をはさむ10年間に約半数近い財団が誕生した。なお、セゾン文化財団は、当初基金の過半を堤清二氏個人が拠出しているので、企業財団というよりはアメリカでいうインデペンデント・ファンデーションに近い。
- 2) 佐藤郁哉氏は、フォード財団の地域演劇育成プロジェクトについて、雑誌『悲劇喜劇』に「フォード財団とアメリカの地域劇場」(2001.2～9に連載)を、またより学術的な形では『一橋大学商学研究』(2001年)に「非営利型芸術生産システムの形成」を書いている。また筆者も、佐藤氏の論文を参照しつつ、雑誌『演劇人』17号(2004年10月)に「地域公共劇場の成立条件」でとりあげた。

セゾン文化財団頌

加藤種男

アサヒビル芸術文化財団事務局長



セゾン文化財団がどのような経緯で設立されたかをよく知らない。しかしながら、それがこれまでのセゾンにおける様々な芸術文化の基盤整備活動の中で、きわめて先鋭的かつ明確なヴィジョンの基に戦略的に位置づけられて生み出されたものであることだけは断言できる。それは、他の企業における芸術文化への支援活動、すなわち企業メセナの多くと比較してみると、容易に見て取れることだ。早い話が、私が進めてきた活動と比較して、その中長期の展望にたった先駆的な戦略性には、あらためて舌を巻くし、しかもその展望を実現する持続性とその成果の大きさを驚嘆に値する。

戦略的配置の先行事例の一つは早くも1979年に開館していた「スタジオ200」である。コンパクトではあったが、主としてパフォーマンス・アーツのオールターナティブ・スペースとして、先駆的で多彩な活動を展開した。そこで行われたことは、「従来の表現空間」に収まらない広がりであり、「便宜的な仕分け」による「ジャンルの呪縛」を打ち破ることであった。

スタジオ200以外にもセゾンは様々な芸術文化活動を展開してきた。いずれも、その出発点から方針が明白であった。その上に現場で得られた経験によって、方針を堅持しつつプログラム内容を微調整したり追加したりしてきたのである。方針を堅持するのは、中長期の展望が明確であったからだ。これは、いわゆる経済バブルや、その延長上にあったメセナバブルとは全く無縁に、先を見通した明確な意思の基にはじめられたことを、示している。そうした経験の上にセゾン文化財団が生まれる。

さて、その方針は何であったか。いわく「現代性、若手世代育成、国際性」の三点である。まず現代性について。今でこそ、いくつかの企業は積極的に現代性の高い芸術活動の支援にも目配りをするようになったけれども、セゾン文化財団は、この方針を「メセナ元年」といわれた1990年以前に打ち立てている。今でも、企業も、国や自治体も、現代ものを敬遠する傾向は強い。たまに取り組む場合でも、なるべく分かりやすい凡庸な表現を対象としようとする。現代に生きている人間が、どうして現代の表現を避けて通ろうとするのか。それは、「現代芸術は難関であり、そもそもあんなわけの解からない表現の、どこが芸術なのか」ということにあるらしい。

しかし、セゾンの積極性は全く違う。現代に生きている人間として芸術文化の振興を掲げている以上、時代の精神を表現する芸術活動を

取り上げることは、あまりにも当然の責務ではなからうか、と考えるのである。そもそも、現代の精神を表現する芸術が、どうして現代の我々に解からないことがあるうか。一步譲って、人々にとって難解に見えたり、新たな表現ゆえに抵抗感があったりするとしても、それだからこそ、現代人にとって最も必要な同時代の表現を、人々に届けるための支援をすることが必要だと考えるのである。

若手世代の育成は、さすがに多くの企業や自治体等でも取り組むところが増えてきた。しかし、これとても評価の定まった著名な芸術家の支援に比べれば、まだまだ少なく、今でも貴重な方針である。さらに、同じく若手育成をうたっている、一般的には評価の定まった分野の若手発掘に偏っている。すなわち、多くはクラシック音楽とか公募展のように、評価基準が確立した中で、無名の新人を発掘するにとどまっている。セゾンの場合は、これと違って、基準の定まらない新たな表現ジャンルで、新たな若手を発掘し育成する。ここにもこの財団の独自の価値がある。

これに国際性を加えた、三つの方針によってスタートした財団が、早くから着目していたのが、個別の公演への助成ではなく、中長期の活動全体への継続した助成である。セゾン文化財団が、私たちに教えた最大の点は、芸術文化の振興には、優れた発表への支援にとどまっていなければならない、創造のプロセス全体に対する支援が必要だ、ということであった。資金提供だけではない複合的な支援、アーツマネジメントの人材育成を含むプロフェッショナル教育への支援、コラボレーションの重視、創造団体の環境の改善と運営基盤の強化への支援、国際共同創造活動への支援などなど。これらを要するに、芸術文化の振興とは、他ならぬ芸術文化の基盤整備のことなのだと、明確に提示したのである。

セゾン文化財団が、優れてこうした芸術文化振興の先頭に立って他の様々な機関を牽引できたのは、なぜか。それは、財団設立以前からの活動展開から集約してきた知見が花開いた点もある。しかし、何より重要なのは、専門能力の高いプログラム・オフィサーを何人も雇用し、彼らに常に現場を歩かせ、現場の声を集めさせた点にある。

その結果、創造の環境整備には、稽古場が不可欠と考え、「森下スタジオ」を開設したのであるし、目標を持たない団体を助成しても、その効果は期待できないという経験知から、選考に当たっては、常に目標

を聞きただすのである。助成申請応募に舞踊が急増すれば、その部門を新設し、一方活動の評価制度をいち早く導入し、モニタリングには批評家の育成をかねて全く無名の研究者を数多く起用したりもする。公演助成ではない団体の運営助成を強化し、運営費に人件費が含まれるのを当然と言い切り、また、アーツマネジメントの海外留学を支援した。さらには、アーティストにも休息と補給が必要だとして、サバティカル支援制度までもつくりだす。

行政はもちろん企業メセナの多くも、手を付けなかったこうしたことのほとんどを、セゾンが先鞭を付けたのである。なぜなら、これがプログラム・オフィサーの仕事だからだ。方針を堅持し、現場を知る彼らは、個々の助成活動以上に、真にどのような支援が芸術文化の振興には役立つのかを、常に考え、プログラムのイノベーションと新規開発を仕事としているのである。

アサヒビール芸術文化財団は、セゾン文化財団のアジアでの共同事業に対して、ささやかな助成をさせていただいている。これを記すのはもちろん、私どもの慧眼を誇るためではない。むしろ逆に私たちの専門性の不足をしているところを、セゾンの高い見識によって支援してただこうという考えから実施したことだ。私たちが全ての支援先を選びきることは出来ない。それぞれに専門性の高い助成機関の連携により支援先の選択を拡大したい。他の専門機関の力を借りることにより、より効果的な助成が拡大する。このため、アサヒビール芸術文化財団は、セゾンのプログラム開発に倣って、芸術文化機関への助成制度を導入した。これにより私たちの直接支援とともにそうした機関を通じた、いわばリグラント(再助成)方式により、最終的な助成先は飛躍的に拡大する。目が複数になり、助成制度としての透明性も保障される。

この手法を、たとえば国や自治体レベルに置き換えて考えると、どういことがいえるだろうか。国や自治体の、芸術家や芸術団体への直接支援には憲法上の制約がある。したがって、たとえば国が芸術文化振興会をつくり、これを通じた間接支援を行っている。しかし、いわゆるアーツ・カウンシルにおけるアーム・レングスの関係と比較すると、文化庁と振興会との関係は密接すぎ、また選考制度にも未成熟な点が多い。

これに対して、今後二つの可能性が考えられる。一つは、芸術文化振興会のアーツ・カウンシル化である。そのためには、予算の飛躍的な拡大と共に、実は様々な制度上の整備が必要であるが、特に指摘しておきたいのがプログラム・オフィサーの存在である。助成先の選定にも、またそれ以上に、プログラムの開発や、その効果測定等々に、プログラム・オフィサーの存在は不可欠である。外部の非常勤の選考委員だけで選考は成り立たない。プログラム・オフィサーが存在しない助成機関はありえない。仮にアーツ・カウンシルを国レベルで成立させるとしたら、セゾン文化財団の知恵を借りることが、その成否を左右すると言っても言い過ぎではないであろう。

もうひとつの可能性は、最終的には、国レベルでの芸術文化の振興に、アーツ・カウンシルは不可欠と考えるが、そのゴールが必ずしも近くないとすれば、過渡期の制度として、セゾン文化財団をはじめとする、

いくつかの民間の助成機関や中間支援組織を、リグラント機関として活用することである。これは、比較的着ししやすい方法であり、速やかに検討してほしいものだ。

さらに、アーツ・カウンシルを自治体レベルにまで拡大する必要がある。現在多くの自治体は事業推進のための外郭団体を持っているが、助成機能を有する外郭団体は少ない。事業そのものは、アート NPO に代表される民間機関に相当程度委ねることが可能である。むしろ外郭団体の機能を地方版アーツ・カウンシルに変更していく必要がある。

なおこの際、重要な点の一つ付け加えると、アーツ・カウンシルを機能させる上で、国自体の芸術文化基盤整備のための組織強化が前提となる。これには、現在の文化庁にとどまらず、国際的な文化振興を進める外務省、創造産業の振興をはかる経済産業省、自治体の文化振興に関わる総務省等々、関係省庁の中の文化振興に関する組織を横断的に統合して、新たな文化省の創設を視野に入れる必要がある。分散している予算を統合するだけでも、文化振興の視野が広がり、圧倒的に効果が高まる。

最後に私的な言い方になるので気が引けるとはいえ、セゾン文化財団なくして、今日の私の仕事は成り立たなかつただろう。芸術文化にかかわる仕事を、何の準備もなく始めてしまって、かれこれ 20 年近くにもなる。企業の文化担当者の多くが、私同様に準備なく仕事を始めた以上、私が携わったことを含め、企業による文化活動がどうしても芸術文化の最も華やかに見える、公演や展示という成果物に集中しがちなのは、やむをえないことだった。けれども、重要なのはソフトとハード両方の面での基盤整備なのだ、ということを私はセゾン文化財団から学んだ。

メセナ活動に従事し始めてまもなく、毎月のようにセゾン文化財団を訪れていた。それは「パフォーミング・アーツ 10 年委員会」という集まりがここを会場としていたからで、これは現在アート・ネットワーク・ジャパンを主宰している市村作知雄さんのイニシアティブもあったが、専門家たちの中になぜか私も加えていただいていた。そのメンバーの多くが、現在舞台芸術の振興に大きな役割を果たしている。今にして思えば、この会とセゾン文化財団が、私のアートマネジメントことはじめの学校だったのである。

舞台芸術と文化政策に新しい地平を切り拓いてきた 20 年

吉本光宏

ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室長



撮影：杉全泰

セゾン文化財団の 20 年の歴史は、日本の文化政策の激動期と重なる。その間、同財団は、助成という手法によって、日本の舞台芸術にたえず新しい地平を切り拓いてきた。それは、助成プログラムの中核をなす「芸術創造活動プログラム」の対象団体が、いずれも現代演劇や舞踊の世界で日本を代表する存在となっていることを見れば明らかである(p.46 別表(月)参照)。

●個人財団のポテンシャルとセゾングループの DNA

セゾン文化財団の取り組みは、助成対象の現代演劇・舞踊という芸術に活力を与えただけではない。常に支援を受ける芸術サイドに立った「現場主義」とも呼べる助成のスキームによって、文化庁や芸術文化振興基金など、公的な芸術助成制度にはないプログラムやしぐみを提案し、そのことで広く日本の文化政策全体に示唆を与え続けている。

公的機関に求められる公平性や説明責任、行政上のルールや制約などに縛られない民間財団の自由な立場が、そうした果敢なプログラムを可能にした主な要因であろう。しかし、国内に 20 余り存在する民間芸術助成財団の中でも、セゾン文化財団には際だった特徴が二つある。それは堤清二という「個人」の出捐で設立されていることそして、プログラム・オフィサーと呼ばれる助成財団のプロフェッショナルを起用していることである。

民間財団の多くは、企業の出捐によって設立され、企業からの出向社員などが事務局長や助成担当として財団の運営や事業に携わっている。出捐企業から独立した法人格を有していても、実際には「親会社」の傘の下で財団の経営が行われているのが実態である。もちろん、企業財団のこうした経営方針は、決して否定されるべきものではない。むしろ、民間企業による戦略的かつ長期的なメセナの手法として高く評価すべきものである。

しかし、セゾン文化財団の 20 年の実績を振り返ると、個人財団とプログラム・オフィサー制という二つの特性が、真に独立した「意志のある財団」としての経営を可能にし、ユニークな助成プログラムを実現させてきた原動力だったのではないかと、と思われる。

財団のコアメンバーが、セゾングループの文化事業の最前線で活躍していたことも見逃せない。アートやアーティストの生々しい現場に触れた経験が、「現場主義」を支え、DNA のようにこの財団の基本的な思想を形作っていると思えるからである。

●助成の戦略性とシンクタンク機能

セゾン文化財団は、設立以来、多彩な自主製作事業・共催事業を展開しているが、財団の骨格を形成しているのは、やはりそのユニークな助成プログラムである。現在は、現代舞踊・現代演劇を主な助成対象に、(日)アーティストの創造活動を長期的に支援、(月)資金助成のみではない複合的な支援、(火)芸術活動を支えるインフラストラクチャーの整備・改善をサポート、という三つの基本方針に基づいた支援活動が行われている。しかし、財団の年表(pp.40-45)を見ると、様々なプログラムが創設、統合あるいは廃止され、常に、新陳代謝が繰り返されてきたことがわかる。

設立当初、演劇界の状況調査に基づいて設定された重点課題は、資金のみではない支援体制(場所の提供、情報・ノウハウの提供、機会の提供)、プロフェッショナル教育への支援強化、創造プロセスへの支援の重点化、コラボレーションの重視、の四つであった。このスキームは形を変えながら現在まで受け継がれている。そして、1992 年の財団レビュー調査によって、「優れた芸術団体の創造環境の改善と運営基盤の強化が急務」という政策判断が行われ、以降の助成プログラムの基本的な姿勢となった。

96 年には、創造環境整備、芸術創造、国際交流という三つの枠組みに再編成され、98 年には国内プログラムと国際交流プログラムが分離されているが、創造活動を支援するという財団の基本姿勢は現在に至るまで貫かれている。

こうした助成プログラムの改編の歴史を振り返ると、限られたリソースでいかに最大限の成果を導き出すか、ということに、多大な知恵と努力が注がれてきたことがわかる。途中、バブル経済の崩壊に伴う著しい金利低下によって、財団予算は大きく減少したと思われるが、そのことが、かえって助成プログラムの戦略を研ぎ澄まされたものにし、助成財団として足腰を強靱なものにしてきたとは言えないだろうか。

芸術文化振興基金では 1990 年の創設以来、助成の枠組みが 20 年近く変更されていないこと、文化庁の新しい助成制度は新規予算を伴うものが多いこと、民間財団でも設立当初のプログラムが大幅に変更されることは希なこと、などを考えると、セゾン文化財団は、日本の芸術文化の分野では数少ないシンクタンク機能、政策立案機能を備えた助成財団だと言える。そして事業評価によって常に自らの成果を問い、より戦略的な助成プログラムの構築を可能にしてきたのは、プログラム・

オフィサーの確かな見識と将来ビジョンに他ならない。

●政策提案力を備えた助成プログラム

さらに注目できるのは、それらの助成プログラムが、文化庁などの公的機関の政策に少なからぬ影響を与えた、と思える点である。94年にスタートした森下スタジオの稽古場支援は、今や廃校や遊休施設を活用した同様の試みとして全国の自治体に広がり、企業メセナの有力な手法にもなっている。96年に創設された文化庁の「芸術団体重点支援事業」は、一時的ではあったものの、92年にセゾン文化財団が試験的に開始した年間助成プログラム(現「芸術創造活動プログラム」)と同じく運営助成的な性格を有していた。

アーツマネジメント教育の嚆矢となった米・コロンビア大学奨学生派遣制度は92年に始まったが、*その後、文化庁でもアーツマネジメント研修は大幅に強化された。さらに、若手育成を対象に2000年に始まったDANCE BOX、STスポット、セッションハウスへの支援は、劇場助成という点で、02年の文化庁の「芸術拠点形成事業」に先んじている。

文化庁などの公的機関が、実際にセゾン文化財団の助成プログラムを参照したかどうかは別にして、少なくともそれらを取り入れたものであったことは間違いない。森下スタジオの開設時に、稽古場助成というスキームが主務官庁の理解をなかなか得られずに苦慮した、という逸話は、セゾン文化財団の先見性を象徴的に物語っている。

また、現在の公的助成制度のほとんどは、公演という最終成果、つまり「芸術の消費」だけを切り取ったものであり、芸術の創造過程とそのコストに対する配慮が著しく欠けている。自己負担金の範囲内、助成対象経費の2分の1以内という助成金の制度は、虚偽の実績報告などを招きやすく、芸術団体の経営努力への意欲を削ぐ恐れがある。全額が事業終了後の支給というしくみは、経営体力のない団体には大きなハードルとなっている。

それに対して、セゾン文化財団は96年に公演助成を休止し、助成金の使途は特定せず、前払いとなっている。これは、現在の公的芸術助成に対する痛烈な批評であり、そこには財団の理念や誇りが集約されている。

●インターメディアリの中核的牽引車として

最近注目される中間支援型のNPOへの助成でも、セゾン文化財団の功績は大きい。今や日本を代表するサービスオーガニゼーションとして、現代舞踊の振興に大きな力を発揮しているジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)は、98年から3年間、創設期にセゾン文化財団の助成を受けている。それに先立ち、JCDN設立の発端となった現代表の佐東氏のダンス・シアター・ワークショップでの研修を助成したのも、セゾン文化財団であった。

つまり、個人への研修助成、NPOの起業支援という、結果が見通しにくい地道な助成活動が、現在のJCDNの成果を生み出したと言っても過言ではない。財団の投じた貴重な資金がJCDNのシードマネーとなり、その後文化庁などの公的助成を得て活動を軌道に乗せ、数年後に数倍、数十倍の事業規模となって日本の現代舞踊の基盤を支

えている。この「てこ」のような成果は、まさしく助成財団の醍醐味であり、戦略のたまものと言える。

財団の片山氏(現常務理事)は2000年度の事業報告書に、「JCDN開設準備室のようなネットワーク型組織の立ち上げに対して助成を行ってきたのは、まずはそのようないくつかの団体が活動を開始し、その重要さが認知されることが先決と考えたからである」と、助成対象の成果が広く社会に与える影響までもを考えた長期的戦略の狙いを記している。

こうした大きな成果をあげてきたセゾン文化財団にも、課題がないわけではない。基本財産の運用益を主な財源とする財団にとって、バブル崩壊後、現在まで続く低金利は財団経営の足かせとなっている。セゾン文化財団も同様に、グループ企業などから寄附金を受け入れているものの、プログラムの縮小や廃止を余儀なくされた時期があった。

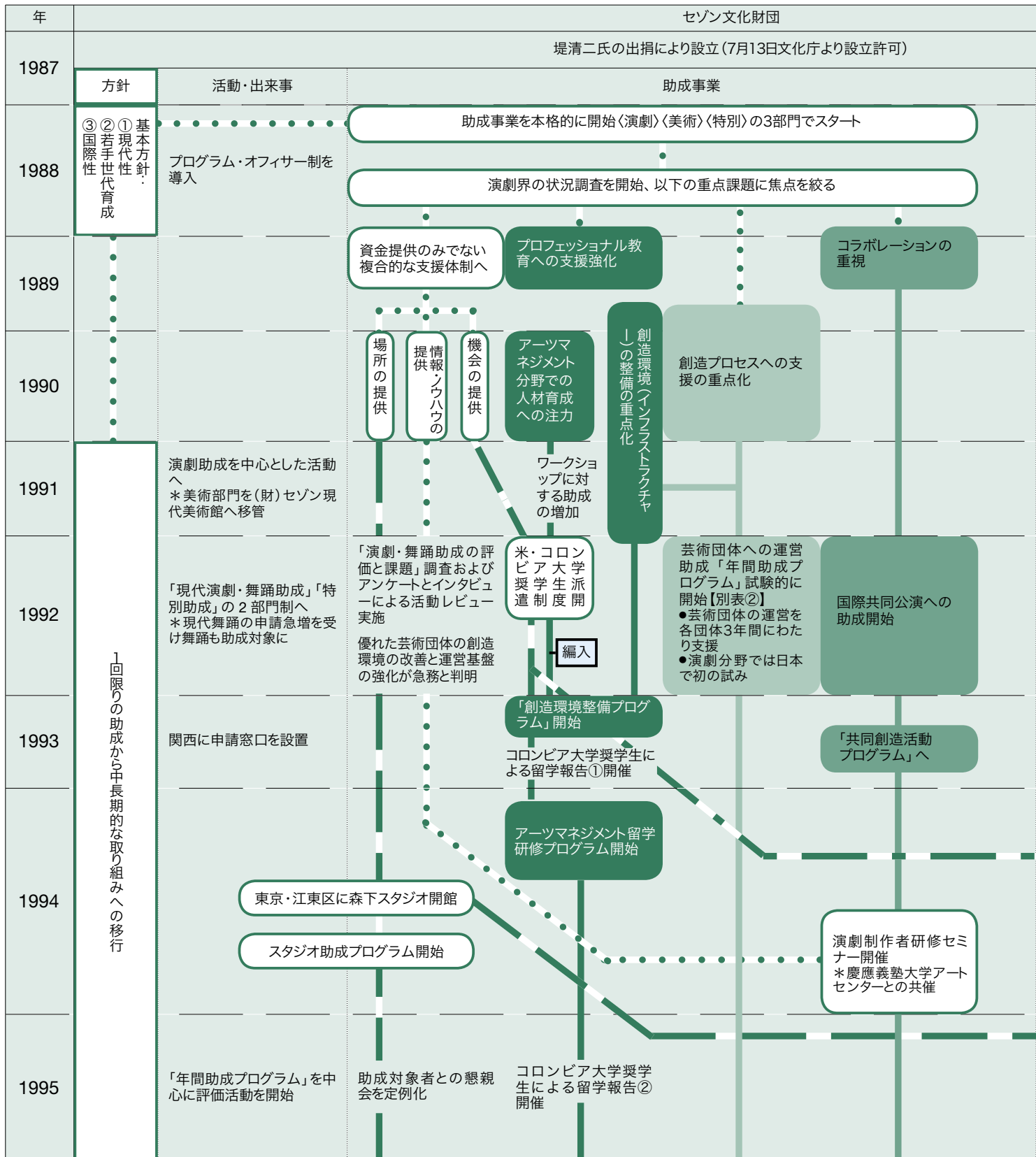
しかし昨年、公益法人制度改革関連3法案が成立し、新制度下の公益財団に認定されれば、寄付税制の優遇が受けられる方向で検討が進んでいる。これは、芸術団体の経営に大きなインパクトをもたらすとともに、セゾン文化財団にとっても大きな可能性を秘めているのではないだろうか。米国並みの寄付税制が整えられれば、財源確保に新たな道が開かれるからである。

既にセゾン文化財団は、2004年以降フランス・ダンス・03、アサヒビール芸術文化財団、東京都などから寄附や助成を受け、「日仏舞踊交流プログラム」や『Mobile —アジアの移住労働者』の共同製作事業を実施している。これは、他の機関や個人から資金を受け入れ、再配分する「再助成」のトライアルとも受け取れる。また、米国ジャパン・ソサイエティやアーツ・ミッドウエストとの最近のパートナーシップは、財団の中間支援機能の新たな展開であろう。

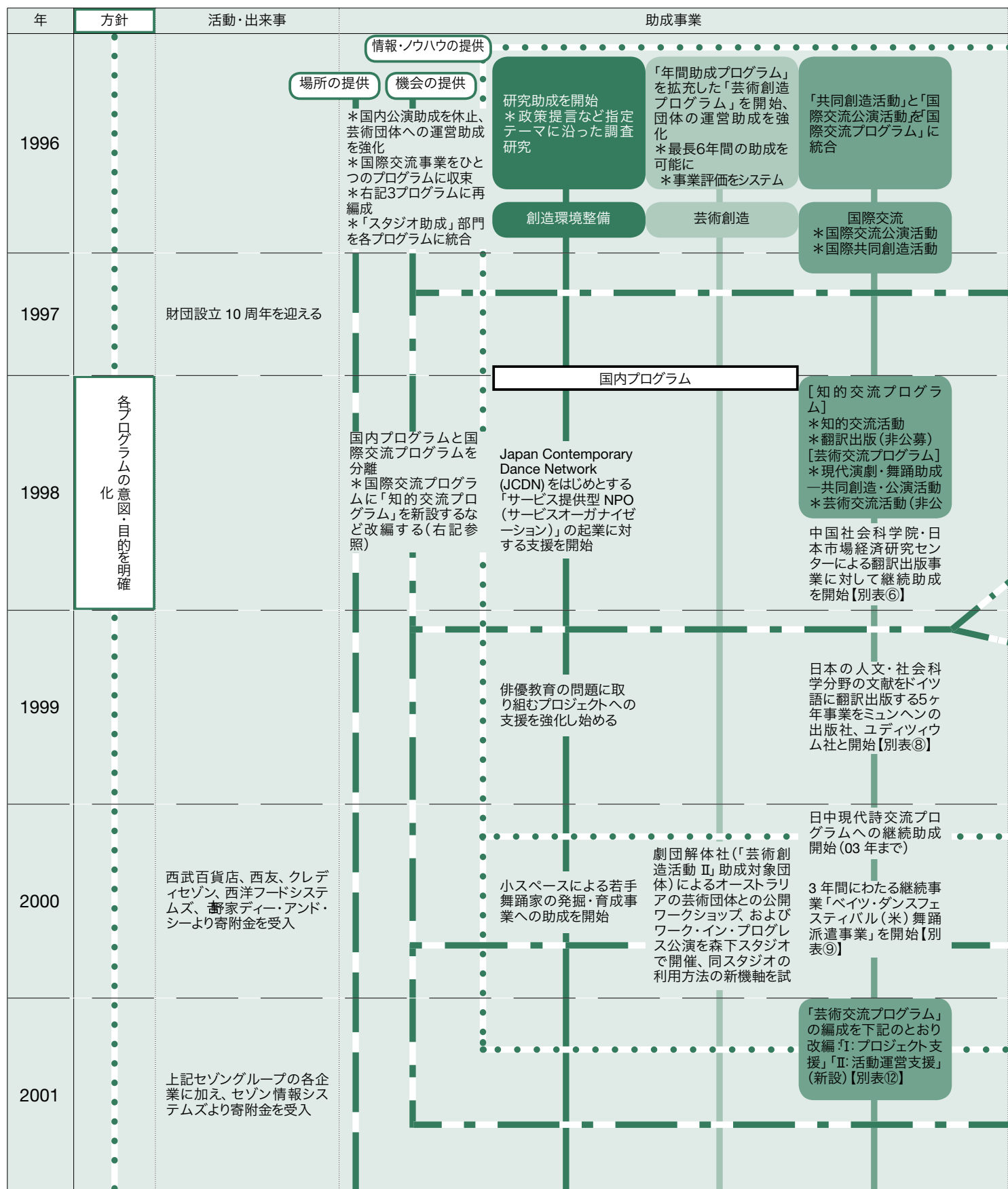
NPOや財団の活動が活発な米国では、芸術団体や中間支援組織、財団などが互いに支え合い、全体として強靱な芸術文化のコミュニティを形成している。20年と言えば成人式。今までに鍛え、蓄えたノウハウやネットワークを最大限に活用し、日本の芸術文化におけるインターメディアリの中核として、これまで同様、颯爽と最前線を開拓し続ける。セゾン文化財団のそんな姿が、私の目には浮かんでいる。

*筆者も97年度に同制度の助成によって1年間の得難い経験と勉学の機会を与えて頂いた。現在でもそれは有形無形の財産となっており、セゾン文化財団には心から感謝している。残念ながらこの制度自体は98年度に終了したが、その後もアーツマネジメント留学・研修の助成は継続されている。

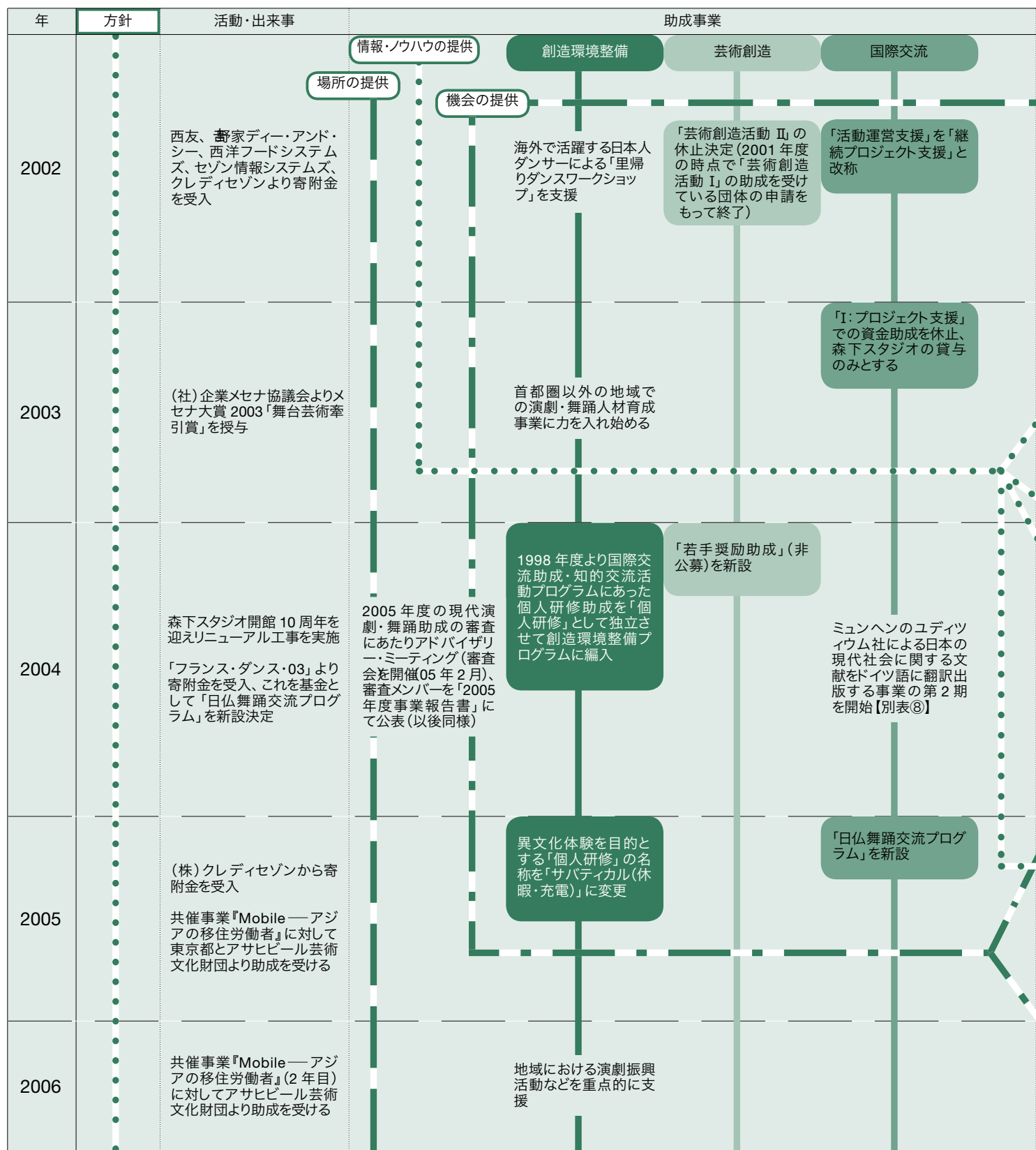
セゾン文化財団年表 1987-2006 年



	芸術文化支援状況			社会情勢
自主製作・共催事業／パートナーシップ	公演協賛型支援、施設建設型支援への偏り	メセナブーム	公共ホール建設ラッシュ	●利根川道マサチューセッツ工科大学教授）、日本人初のノーベル医学生理学受賞 ●ブラックマンデー、全世界で株式市場大暴落
				●青函トンネル、瀬戸大橋開通 ●東京ドーム完成 ●ソ連軍、アフガニスタンから撤退開始 ●イラン・イラク戦争停戦 ●米大統領選、ブッシュ（父）副大統領当選 ●リクルート事件表面化 ●パンナム機爆破事件
海外招聘公演の自主製作を開始【別表①】				●元号、平成へ ●消費税導入 ●宇野内閣を経て海部内閣成立 ●ベルリンの壁崩壊 ●ワールド・ワイド・ウェブ（WWW）開発される
ダムタイプ『pH』特別公演を主催（大阪）				●バブル経済崩壊が始まる ●イラク軍、クウェートに侵攻 ●日銀が公定歩合を6.00%に引き上げる ●ドイツ再統一
シンポジウム「内なる国際化をめざして」を主催（京都）				●湾岸戦争勃発 ●南アフリカ、人種差別法全廃 ●宮沢内閣成立 ●ソビエト連邦消滅
シンガポールでの「日本映画鑑賞会」を星日文化協会と共催				●文化庁在外研修制度にアーツマネジメント部門の派遣が加わる ●芸術文化振興基金に対する民間からの寄附が100億円に達する ●文化経済学会発足 ●アジア女性演劇会議が東京と京都で開催 ●愛知県芸術文化センター開館
トライアングル・アーツ・プログラム（TAP）プロジェクト イン ダンスⅠ ●アジア・カルチュラル・カウンシルとの共催事業 ●日本・米国・インドネシアを結ぶ集中的な個人交流プログラム ●振付家ダンサー、マネジャー批評家らが参加【別表】				●文化経済学会（日本）初の年次大会を開催 ●第1回「世界劇場会議」、名古屋で開催 ●慶應義塾大学アート・センター設立
森下スタジオ開館記念事業 ●セミナー「日本型アートマネジメントの展望と21世紀の劇団経営」●ワークショップ「演劇体験～演劇を身近に感じるために～」●セゾン文化財団ワークショップ KARAS との共同企画				●世界貿易センター爆破事件 ●細川連立内閣成立 ●サッカー日本代表、ワールドカップへの出場を逃す（ドーハの悲劇）
シンポジウム「創造のための場づくりとは」開催 セゾン文化財団ワークショップ KARAS との共同企画	アーティスト・イン・レジデンスがさかんに	自治体中心にワークショップブーム、自治体による稽古場開設がさかんに		●日本劇作家協会発足 ●関西演劇人会議（のちの「大阪現代舞台芸術協会」の前身）発足 ●（財）地域創造設立（自治省） ●（財）国際文化交流推進協会設立（外務省）
				●ルワンダ・ジェノサイド事件 ●羽田内閣成立 ●松本サリン事件 ●村山内閣成立 ●大江健三郎、ノーベル文学賞受賞 ●「プレイステーション」（ソニー・コンピュータエンタテインメント）発売
				●WTO（世界貿易機関）発足 ●阪神淡路大震災 ●野茂英雄、ドジャースと契約 ●地下鉄サリン事件 ●日銀、公定歩合を0.5%に引き下げる ●「Windows 95」（マイクロソフト社）発売



自主製作・共催事業／パートナーシップ		芸術文化支援状況	社会情勢
ニュースレター viewpoint 創刊 芸術支援政策、舞台芸術教育、アーツマネジメント、国際的な活動を巡る議論の場を提供【別表④】 制作実践セミナー実施(5回) 若手演劇・舞踊制作者を対象と実務面での共通の問題を議論【別表⑤】 トライアングル・アーツ・プログラム(TAP)プロジェクト インダンスⅡ ＊アジア・カルチュラル・カウンシル、ニューイングランド・ファンデーション・フォー・ジ・アーツとの共催事業【別表③】 ニュースレター viewpoint、季刊化 制作実践セミナー第二期実施(4回)【別表⑤】 5年間にわたって継続的に日本の現代演劇を北米に紹介するニューヨークのジャパン・ソサエティーの主催事業「Japanese Theater NOW」への助成を開始【別表⑦】	アーテリスト・インレジデンスからかんに 自治体中心にワークシヨンプラットフォーム 自治体による稽古場開設がさかんに	■アーツプラン21開始(文化庁) ■利用者による自主管理方式を採用入れた金沢市民芸術村開設 ■稽古場としても利用が可能なスタジオを有する長岡リリックホール開館 ■日本 NPO センター発足 ■TORII HALL (大阪) 内に DANCE BOX 実行委員会設立、関西でのコンテンポラリーダンスの拠点として活動を開始 ■静岡県舞台芸術センター開場 ■新国立劇場開場 ■世田谷パブリックシアター開設 ■特定非営利活動促進法(NPO 法)案提出 ■演劇人会議 発足 ■大阪現代舞台芸術協会(「DIVE」)設立 ■日本 NPO センター、全国フォーラム初開催 ■特定非営利活動促進法NPO 法成立施行、非営利セクターが社会の関心を集める ■文化庁「文化振興マスタープラン～文化立国の実現に向けて」策定 ■秋吉台国際芸術村開館 ■日本アートマネジメント学会発足 ■Japan Contemporary Dance Network (JCDN) 設立準備室活動開始	●橋本内閣成立 ●世界初のクローン羊誕生 ●民主党結成 ●米クリントン大統領再選 ●ペルー日本大使館占拠事件 ●DVD プレイヤー製品化 ●香港返還 ●アジア通貨危機 ●地球温暖化防止京都会議にて「京都議定書」議決 ●今村昌平(『うなぎ』)、市川準(『東京夜曲』)、北野武(『HANA-BI』)が相次いで海外の映画祭で受賞 ●改正外為法施行、内外の資本取引自由化により日本版金融ビッグバン開始 ●和歌山毒物カレー事件 ●小渕内閣成立 ●「iMac」発売(アップル社) ●Google 社設立
トライアングル・アーツ・プログラム(TAP)プロジェクト インダンス ＊TAPⅠとⅡの評価作業とTAPⅢに関する計画立案を実施【別表③】 制作実践セミナー法律編、およびマーケティング勉強会を開催 若手舞踊育成プログラム「ネクスト・ネクスト」をはじめとする共催事業「セゾンシアタープログラム」を開始【別表⑩⑪】 制作実践セミナー法律編を開催【別表⑤】 セゾンシアタープログラムの一環として、シンガポールの劇団シアターワークスによる森下スタジオでのレジデンシー事業『Dreamtime in Morishita Studios』などを開催【別表⑩】	既存の劇場、美術館の閉館が相次ぐ一方、新規の文化施設がオープン(廃校などの旧来の施設の再利用による芸術文化拠点開設) アート系 NPO の誕生	■「ふらの演劇工房」が国内初の NPO 法人として認証 ■日本 NPO 学会設立 ■日本アートマネジメント学会、初の全国大会開催 ■ART COMPLEX 1928(京都)開館 ■東京国際舞台芸術フェスティバル(旧「東京国際演劇祭」、現「東京国際芸術祭」)、毎年開催となる ■セゾン美術館、銀座セゾン劇場閉館 ■博多座、福岡アジア美術館開館 ■1993年に小学校の統廃合のため閉校となった明倫小学校(京都)の一部改修した「京都芸術センター」が開館、廃校を転用する芸術文化創造・支援拠点の先駆的な例となる ■練習室とホールを兼ね備えた大阪市立芸術創造館開館 ■アサヒビール「アートノバ」プログラム開始 ■第1回越後妻有アートトリエンナーレ開催 ■佐賀町エキジビット・スペース閉館 ■現「東京国際芸術祭」を運営するアートネ ■自民・公明・保守の与党3党、「公益法人の運営の適正化に関する法律案(仮称)」合意 ■朝日舞台芸術賞(朝日新聞)創設 ■第1回横浜トリエンナーレ 2001開催 ■文化芸術振興基本法が公布・施行 ■トヨタ コレオグラフィアワード(トヨタ自動車)創設 ■(財)光文社シエラザード文化財団の稽古場シエラザードスタジオ開館(03年度より一時休止、現在光文社スタジオとして再開) ■トーキョーワンダーサイト開館 ■JCDN、NPO 法人として認定される	●日銀、ゼロ金利政策実施 ●NATO 軍、ユーゴ空爆 ●東海村 JCO 臨界事故 ●世界貿易機関(WTO)第3回閣僚会議が開催されたシアトルで反グローバリゼーションの大規模なデモが行われる ●2000年を控え、Y2K(コンピューター 2000年)問題が話題となる ●森内閣成立 ●沖縄で第26回サミット開催 ●イチロー、マリナーズと契約 ●高度情報通信ネットワーク社会形成基本法(IT 基本法)成立 ●白川英樹(筑波大学名誉教授)、ノーベル化学賞受賞 ●米大統領選で民主党ゴア候補(当時副大統領)敗北、共和党ブッシュ(子)候補当選 ●ブッシュ米政権、京都議定書からの離脱を表明 ●小泉内閣成立 ●ハンセン病補償法成立 ●日本初の BSE(牛海綿状脳症)感染牛発見 ●米同時多発テロ事件(9.11) ●米英軍によるアフガニスタンへの攻撃開始 ●野依良治(名古屋大学大学院教授)、ノーベル化学賞受賞 ●iPod 第一次世代発売 ●参議院本会議でテロ関連三法案可決成立



【参考資料】
 企業メセナ協議会「メセナ年表」、トヨタアートマネジメント「アートマネジメント関連年表」、公益法人協会「制度改革アーカイヴズ」、
 国際交流基金「国際交流基金30年のあゆみ」、各種ウェブサイト

自主製作・共催事業／パートナーシップ		芸術文化支援状況	社会情勢
トライアングル・アーツ・プログラム (TAP) プロジェクト イン ダンス Ⅲ * TAP I と II の評価と今後の活動のプランニングを行なう * ドキュメンテーション (記録) の作業として関係者へのインタビューを映像収録 (〜2003 年度) 【別表③】	既存の劇場、美術館の閉館が相次ぐ一方、新規の文化施設がオープン (廃校などの旧来の施設の再利用による芸術文化拠点開設) アート系 NPO による活動の本格化	「公益法人制度の抜本的改革に向けた取組みについて」が閣議決定 - 文化庁による「文化芸術創造プラン (新世紀アーツプラン)」開始、芸術団体助成休止 - 稽古場等を併設した「せんだい演劇工房 10-BOX」開館 - 東京グローブ座、一時休館後ジャニーズ事務所に移管 - カザルスホール休館、日本大学に移管 - DANCE BOX、NPO 法人として認証され、フェスティバルゲート (大阪) 内に劇場 Art Theater dB を開場 「大阪のど真ん中に小劇場を取り戻す会」設立 - アサヒビール、「アサヒ・アート・フェスティバル」開始	- 欧州連合の単一通貨「ユーロ」の紙幣・硬貨導入 - ブッシュ米大統領、一般教書演説でイラン、イラク、北朝鮮を「悪の枢軸」として批判 - 東ティモール民主共和国成立 - サッカーワールドカップ 日韓共同開催 - 住民基本台帳ネットワーク開始 - 小泉首相、訪朝 - 小柴昌俊 (東京大学名誉教授) にノーベル物理学賞、また田中耕一 (島津製作所社員) に同化学賞の受賞決定、初の日本人同年ダブル受賞 - モスクワ劇場占拠事件 - イラク 大量破壊兵器に関する国連の査察を受け入れる
トライアングル・アーツ・プログラム (TAP) プロジェクト イン ダンス Ⅲ * TAP の映像作品完成、ベイツ・ダンス・フェスティバル森下スタジオにて上映【別表③】		- NPO 法人認証数が累計で 1 万件を超える - 大阪・OMS (扇町ミュージアムスクエア) 閉館 - ART COMPLEX 1928 がエンジェルシステム、ロングラン投資システムを導入 - 日本芸術文化振興基金、国際交流基金が独立行政法人化 - 指定管理者制度導入 - 第 1 回アート NPO フォーラム開催 - 山口情報芸術センター (YCAM) 開館 - トヨタ自動車株式会社による「トヨタ創造空間プロジェクト」本格的に開始 - 都市開発のため休館したコンカリーニョが NPO 法人として活動再開	- イラク戦争開戦 - 宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』、米アカデミー賞長編アニメ賞を受賞 - 感染症 SARS が世界的に流行 - 六本木ヒルズオープン - 有事関連連三法成立 - 自由党が民主党に合流 - 米軍、イラクのフセイン元大統領を拘束
制作実践セミナー 2004 を実施【別表⑤】		- 国立劇場おきなわ開場 - 横浜の歴史的建造物を活用する文化創造プログラム BankART 1929 開始 - 東京・豊島区の旧朝日中学校を稽古場として (のちに同体育館を劇場として) 再生する「にしすがも創造舎」がスタート (管理運営: NPO 法人アートネットワーク・ジャパン、NPO 法人芸術家と子どもたち) - 金沢 21 世紀美術館開館 - 大阪の旧精華小学校の体育館を小劇場として再生する「精華小劇場」が開館 (管理運営: 精華小劇場活用委員会) - 自治体初のダンスカンパニー Noism04 活動開始 (新潟市民芸術文化会館りゅーとびあ) - 政令指定都市初の芸術家への無利息つなぎ融資制度を京都市が創設 - アートマネジメント総合サイト「ネット TAM」開設 (トヨタ自動車・企業メセナ協議会)	- 国内で鳥インフルエンザ発生 - 自衛隊イラク派遣 - 新潟県中越地震 - 米ブッシュ大統領 (子) 再選 - インドネシア・スマトラ島沖地震・津波 - 韓流ブーム 「オレオレ詐欺」多発
アーティストサロン「プロセスと作品 オン・ケンセン in Morishita Studios」を開催		- 政府税調「新たな非営利法人に関する課税及び寄附金税制についての基本的考え方」を発表 - 民主党が「公益法人制度改革案」を発表、その後各党によるマニフェストが出揃う - NPO 法人認証数が累計で 2 万件を超える - 東京・新宿区の旧淀橋第三小学校を芸能関連団体の事務所、稽古用施設等として再生する「芸能花伝舎」が開館 (管理運営: 日本芸能実演家団体協議会 [芸団協]) - 新国立劇場演劇研修所開所 - 吉祥寺シアター (東京) 開館	- YouTube 社設立 - 日本国際博覧会 (愛知万博) 開催 - 個人情報保護法施行 - JR 宝塚線 (福知山線) 脱線事故 - ロンドン同時爆破テロ - ハリケーン「カトリナ」「リタ」「ウィルマ」 - 郵政民営化関連法案成立 - 失業・人種差別問題が発端となってフランスで暴動発生、非常事態宣言発動 - ブログサービス登録者 473 万人、SNS 登録者 393 万人に達する (総務省)
トライアングル・アーツ・プログラム (TAP) プロジェクト イン ダンス Ⅲ * アジア・ソサエティ (NY) にて映像作品上映及びインスタレーション【別表③】		- 公益法人制度改革関連法案が成立 - 横浜市との協働のもと、NPO 法人アートネットワーク・ジャパンと NPO 法人 ST スポット横浜の共同事業体が管理・運営を行なう公設民営の文化施設急な坂スタジオ (横浜) 開館	- ジャワ島中部および南西部地震 - 冥王星、惑星から準惑星に分類 - 安倍内閣成立 - 米中間選挙で民主党が上下院で多数党に
シンガポールの劇団ザ・ネセサリー・ステージによる森下スタジオでのレジデンス事業『Mobile——アジアの移住労働者』などを実施【別表⑩】			
日本の現代戯曲の海外での上演を実現するための 3 年間プロジェクトを米非営利団体アーツ・ミッドウェストとの共催事業「日米現代劇作家・戯曲交流プロジェクト」(提携: 米プレイライツ・センター、アートネットワーク・ジャパン/協力: ガスリー・シアター) として開始【別表⑩】			

【別表について】

* 肩書、所属団体名等は助成・開催・刊行当時のものを記載
* 敬称略

【別表①】海外招聘公演の自主製作事業（銀座セゾン劇場等での公演事業）一覧

年	アーティスト名	作品名	会場
1990	マギー・マラン・カンパニー	『レボルシオン』	銀座セゾン劇場
1991	ピーターブルック(演出)	『デンベスト』	銀座セゾン劇場
1992	スティーブン・バーコフ(演出)	『サロメ』『審判』	銀座セゾン劇場
1993	モスクワ・タバコフ劇場	『わが大地』『平凡物語』『検察官』	パルコ劇場、神戸文化小ホール
1994	ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー	『冬物語』	銀座セゾン劇場
1995	ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー	『恋の骨折り損』	銀座セゾン劇場
1997	ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー	『夏の夜の夢』	銀座セゾン劇場
1998	ロイヤル・ナショナル・シアター	『オセロー』	銀座セゾン劇場
1999	テアトル・ヴィディ・ローザンヌ	『フェードル』	銀座セゾン劇場

【別表②】芸術創造活動プログラム助成対象団体一覧(1992-2006 年)

* 緑字の団体は 2006 年度現在の助成対象者

ジャンル	対象者名	代表者・芸術監督	助成対象年度
演劇	新宿梁山泊	金 守 珍	1992-94
	MODE	松本 修	1994-96
	燐光群	坂手洋二	1994-97
	青年団	平田オリザ	1995-97
	劇団解体社	清水信臣	1996-98、 99-2001
	演劇企画集団 THE・GAZIRA	鐘下辰男	1996-98
	遊園地再生事業団	宮沢章夫	1996-98
	199Q 太陽族	岩崎正裕	1998-2000
	MONO	土田英生	1999-2001、 02-04
	桃園会	深津篤史	2000-02、 03-05
	劇団「指輪ホテル」	羊屋白玉	2001-03、 04-06
	演劇弁当 猫ニヤー	ブルースカイ	2001-03
	ナイロン 100℃	ケラリーノ・サンドロヴィッチ	
	うずめ劇場	ベーター・ゲスナー	2003-05
	地点	三浦 基	2005-07
	劇団、本谷有希子	本谷有希子	2005-07
	マレヒトの会	松田正隆	2006-08
	チェルフィッチュ	岡田利規	2006-08
	伊藤ギム + 輝く未来	伊藤ギム	1996-98、 99-2001
舞踊	山崎広太・rosy Co.,	山崎広太	1996-99
	H・アール・カオス	大島早紀子	1997-99、 2000-02
	イデピアン・クルー	井手茂太	1998-2000、 03-05
	Leni-Basso	北村明子	2000-02、 04-06
	Dance Theatre LUDENS	岩淵多喜子	2000-02、 03-05
	PROJECT FUKUROW	石川ふくろう	2001-03
	Study of Live works	白井 剛	2001-03
	発条ト		
	Abst	白井 剛	2006-08
	ニブロール	矢内原美邦	2002-04
	珍しいキノコ舞踊団	伊藤千枝	2003-05
	BATIK	黒田育世	2004-06
	Co. 山田うん	山田うん	2005-07
	パフォーマンズ パパ・タラフマラ	小池博史	1992-94
	ダムタイプ	古橋悌二	1993-96

【別表③】トライアングル・アーツ・プログラム (TAP) プロジェクト イン ダンス アメリカ、インドネシア、日本のダンスにおける人物交流プログラム実施内容 (1994、1997、1999、2001-2005 年度)

* 上記 3 カ国から推薦された振付家・ダンサー、制作者、研究者・批評家らがグループで各国に滞在しながら、それぞれの国のダンス関係者との交流を深める事業。

1994 年・TAP I

日程	レジデンス先	参加者	協力
8/22-9/18	ジェイコブス・ピロー・ダンスフェスティバル(米・マサチューセッツ)	【アメリカ】ボリー・モトリー(振付家・ダンサー)、サミュエル・A. ミラー(ジェイコブスピローダンスフェスティバルディレクター)	共催: アジアン・カルチュラル・カウンシル 助成: 国際交流基金 協賛: アサヒビール株式会社
10/6-10/24	ジャカルタ・インスティテュート・オブ・ジ・アーツ(インドネシア・ジャカルタ)	【インドネシア】デディ・ルタン(振付家・ダンサー)、トム・イブナー(制作)	
11/7-11/27	森下スタジオ(東京)	【日本】米井澄江(振付家・ダンサー)、吉井省也(制作)	

1997 年・TAP II

日程	レジデンス先	参加者	協力
7/31-8/27	ベイツ・ダンス・フェスティバル(メイン)、UCLA インロード/アジア(カリフォルニア)	【アメリカ】ナンシー・スターク・スミス(振付家・ダンサー)、ローラ・ファール(ベイツ・ダンスフェスティバルエグゼクティブ・ディレクター)	共催: アジアン・カルチュラル・カウンシル ニューイングランド芸術財団 助成: 国際交流基金、財団法人東京都歴史文化財団
9/15-10/13	ジョグジャカルタ、ソロ、ジャカルタ(インドネシア)	【インドネシア】スカルジ・スリマン(振付家・ダンサー)	
10/14-11/11	森下スタジオ(東京)、京都	イスカンダール・カマ・ローディン(照明家) 【日本】山崎広太(振付家・ダンサー)、佐東範一(制作)、伊藤恭子(舞踊批評・ジャーナリスト/日本のみの参加)	

1999 年

日程	実施場所	内容
3/1-11/30	ベイツ・ダンス・フェスティバル(メイン) 他	1994 年度と 97 年度のトライアングル・アーツ・プログラムの評価作業を行ないながら、TAP III の計画等について意見交換を行なう。関係者によるミーティングをベイツ・ダンス・フェスティバルで開催(8/12 ~ 8/14)。

2001-2005 年度・TAP III

期間	実施場所	内容
2001-03 年度	アメリカ、インドネシア、日本	TAP III として、これまでの活動の評価とプランニングを本格的に実施。米映像作家モリー・デイヴィスと 94 年度の TAP I に参加した振付家・ダンサーのボリー・モトリーのチームが上記 3 カ国をまわり、関係者へのインタビュー等を収録するドキュメンテーションの作業を行なう。
2003/8/9	ベイツ・ダンス・フェスティバル(メイン)	TAP に関する映像作品完成、Traditions, Inventions and Exchange: Images from the Triangle Project - A Work-in-Progress として上映
2003/11/25	森下スタジオ(東京)	Traditions, Inventions and Exchange: Images from the Triangle Project - A Work-in-Progress を上映
2005/6/28-	アジア・ソサエティ(NY)	Traditions, Inventions and Exchange: Dance in

【別表④】セゾン文化財団ニュースレター「viewpoint」記事一覧(1996-2006 年度)

号	発行日	タイトル	著者・所属等
1	1996/10/1	アートマネジメントの視点 ----- 劇団に運営戦略はあり得るか — 青年団の軌跡を通じて ----- viewpoint の発刊にあたって	ジョアン・ジェフリー(米・芸術文化研究センター創設者兼所長、コロ ンビア大学教育大学院芸術行政管理修士課程[アーツ・アドミニストレー ション・プログラム]ディレクター)/訳: 助川たかね 平田オリザ(劇作家・劇団青年団主宰)
2	1997/3/1	トライアングル・アーツ・プログラム — コンセプトとしての過程 ----- チェ・ホフを探して — ぼくのロシア・東欧演劇巡り ----- 第 1 回制作実践セミナー「海外公演の実施と問題点」レポート	サミュエル・A. ミラー(ニューイングランド芸術財団理事長) 松本 修(演出家・MODE 主宰)
3	1997/7/20	目から鱗のおちた体験 — ジャック・ルコックのプロの演技教育 ----- 演劇の力・文化の力 ----- シンポジウム「文化支援の展望」 — 公的・民間支援の可能性」レポート 第 2 回制作実践セミナー「ワークショップ活動の可能性 — 自治体との取り組みを中心に」レポート	高橋昌也(銀座セゾン劇場芸術総監督) 佐藤郁哉(一橋大学商学部助教授)
4	1997/11/30	米国立邦政府(NEA)の演劇・ダンス支援政策の軌跡 ----- 芸術団体の法人化をめぐる — 「第 3 の選択肢」としての合資会社 ----- 日本のダンス教育と舞踊家養成のプロジェクトについて -----	片山泰輔(三和総合研究所 経済・社会政策室シニア・エコノミスト) 桑野雄一郎(弁護士) 米井澄江(振付家・ダンサー)
5	1998/2/28	イギリスにおける舞台芸術の支援策: 地方分散、職業としての演劇、マネジメントの奨励 ----- 才能を覚醒させる装置としての交流 ----- アーティストと社会の架け橋: ダンスシアターワークショップでの 1 年間 -----	河島伸子(英国ウォリック大学舞台芸術学部[文化政策研究セン ター]リサーチ・フェロー) 伊藤恭子(舞踊評論家・ジャーナリスト) 佐東範一(アーツ・アドミニストレーター)
6	1998/5/25	演劇教育機関の逆説 — 芸術家はどのような環境の中から生まれてくるのか? ----- アジア・カルチュラル・カウンシル — アジアと米国の文化交流支援の 35 年 ----- 第 5 回制作実践セミナー「地方公演のルート作り — 効果的なアプローチとプレゼンテーションの方法」レポート	鴻 英良(演劇評論家) ラルフ・サミュエルソン(アジア・カルチュラル・カウンシル[ACC] ディレクター)
7	1998/8/25	フランクフルト市立劇場におけるマネージメントの革新 ----- — W. フォーサイスを支えたマネージメントから我々は何を学ぶか ----- 演劇による国際交流の可能性 — 欧米とアジアでの活動から得た経験 ----- ジャパニーズ・シアター・ナウ ----- — ジャパン・ソサエティによる NY での日本現代演劇の紹介 -----	笹井宏益(国立教育研究所生涯学習研究部室長) 宮城 聡(ク・ナウカシアターカンパニー主宰・演出家・俳優) ポーラ・S. ローレンス(ジャパン・ソサエティ パフォーミング・アーツ 部門ディレクター)
8	1998/11/25	レジデントシアター成立への課題 — 公設民営化とマネージメント・スキルの開発 ----- 調和と対立の狭間にて — 米国の法律家 による芸術支援活動 ----- 挑戦するポスター 街に貼られた現代演劇 ----- — 現代演劇ポスター収集・保存・公開プロジェクトの活動 ----- 第 2 期: 制作実践セミナー I ~ III 「芸術団体にとっての NPO 法」 「NY における日本現代演劇の紹介」「他業界から学ぶ観客開拓① — 音楽編」レポート	衛 紀生(歌舞伎・演劇評論家、舞台芸術環境フォーラム代表) 福井健策(弁護士) 笹目浩之(現代演劇ポスター収集・保存・公開プロジェクト代表、 (株)ポスターハリス・カンパニー代表取締役/演劇プロデューサー)
9	1999/2/25	アートを起業する — 米国の NPO の活動から ----- 国際交流の経験 — ある戯曲が欧米でどのように上演され、受けとめられたか ----- 第 2 期: 制作実践セミナー IV 「他業界から学ぶ観客開拓② — 映画編」レポート	吉本光宏(ニッセイ基礎研究所主任研究員) 坂手洋二(燐光群主宰・劇作家・演出家)
10	1999/5/25	芸術家の権利と芸術振興政策 — 優れた芸術を生み出す環境整備とは ----- 日本を知る日本の俳優になるために — 「演劇研究室『座』による俳優養成講座」報告 ----- 日韓現代演劇交流 — 開きつつある扉の前に -----	小林真理(文化法・文化政策研究者) 壤 晴彦(俳優・演出家、演劇研究室『座』主宰) 木村典子(日韓舞台芸術交流コーディネーター)
11	1999/8/25	芸術文化団体にとっての NPO 法 ----- 「ユニーク」な日本から「ふつう」の日本へ ----- 大阪から見た関西演劇 — その変遷と現在 ----- 【森下スタジオ報告】①モリッサ・フェンリイによる創作活動・ショーイング ②日玉浩史によるワークショップ	伊藤裕夫(文化政策および民間非営利活動研究者) マイケル・ジャクソン(プロデューサー、翻訳家) 岩崎正裕(199Q 太陽族代表・作・演出)
12	1999/11/25	失敗の成功 — tpt のディレクターズ・ワークショップ ----- バック・トゥ・スクール — 大学院におけるアーツ・マネジメント教育の可能性 ----- 大地の糧、生命の表現 — アートキャンプ白州、12 年間の経験 ----- 【森下スタジオ報告】①国際舞踊夏期大学、②ヴェルティゴ・ダンスカンパニーワークショップ	デヴィッド・ルヴォー(シアタープロジェクト・東京[tpt]芸術監督・演出家) 奥山緑(舞台制作者) 木幡和枝(アートキャンプ白州実行委員会事務局長)
13	2000/2/25	芸術団体に対するリーガルエイド — 米 VLA での集中研修報告 ----- 新たな境を越えて — 初のアメリカツアー報告 ----- 人形劇『Kwaidan — 怪談』富山プロジェクトを終えて ----- 【森下スタジオ報告】劇場経営セミナーフォーラム	福井健策(弁護士・ニューヨーク州弁護士) 小池博史(パパ・タラマラ芸術監督・作家・演出家・振付家・舞台 美術家) 前田圭蔵(プロデューサー)

号	発行日	タイトル	著者・所属等
14	2000/5/25	土方巽を再構築する ----- —— 慶應義塾大学アート・センターによる研究アーカイヴ・システムの開発 さらば東京? 東京の再構築 —— 東京国際舞台芸術フェスティバルの諸問題 ----- 未来のコミュニティと不可能に挑む肉体 —— インドネシア・アメリカ・日本 ----- 共に生きる 21 世紀のために —— コミュニティダンスの普及を目指して ----- 【森下スタジオ報告】①伊藤キム + 輝く未来オープン・ワークショップスタジオ公演、 ②「NPO を中核とする芸術振興政策」構想研究会主催シンポジウム: アーツを支援 するために「アーツ・ムーディーズ (格付け機関) は有効か」	前田富士男 (慶應義塾大学文学部教授 [美学美術史学専攻]、 慶應義塾大学アート・センター副所長) 市村作知雄 (APA [芸術振興協会] 代表・東京国際舞台芸術フェス ティバル事務局長) 山崎広太 (振付家・ダンサー) 南村千里 (振付家・ダンサー・コミュニティダンス講師)
15	2000/8/25	欧州の都市文化政策と「創造空間」—— ボローニャ・バーミンガムの比較を通して ---- Encounters —— 邂逅の軌跡 ----- 社会とダンスの結び目 —— Japan Contemporary Dance Network の発足に向けて --- 【森下スタジオ報告】①制作実践セミナー Ⅲ 法律編: 舞台制作のための基礎知識 「著作権」と「契約」、②劇団解体社 × NYID 異文化間演劇コラボレーションプロジェクト Journey to Con-fusion 2 混成への旅 公開ワークショップ/ワーク・イン・プログレス 上演/シンポジウム	佐々木雅幸 (立命館大学政策科学部教授) オン・ケンセン (シアターワークス [シンガポール] 芸術監督・演出家) 佐東範一 (アーツアドミニストレーター)
16	2000/11/25	舞台芸術フェスティバルが育む芸術文化環境 ----- 遊園地の再生と逃走 —— セゾン文化財団の「芸術創造活動プログラム」と助成について - へこたれない火の粉 —— パフォーマンス・アートに関わって 25 年 ----- 【森下スタジオ報告】『2.5 Minute Ride』シンポジウム & ワークショップ	五島朋子 (九州芸術工科大学大学院博士後期課程在籍) 宮沢章夫 (劇作家、演出家、遊園地再生事業団主宰) 霜田誠二 (パフォーマンス・アーティスト)
17	2001/2/25	【シリーズ: 米国の文化政策①】クリエイティビティと社会の関係 ----- —— 米国の文化政策の発展について 業界の常識に挑戦? して —— リチャード・フォアマン率いるオントロジカル・----- ヒステリック・シアター —— 初来日公演を実現するまで 僕はアメリカでも孤独だった —— ベイツ・ダンス・フェスティバル ----- 【森下スタジオ報告】SAISON THEATER PROGRAM パークタワー・ネクストダンス・ フェスティバル・プレイヴェント ネクスト・ネクスト —— 次の次のダンスは森下から	ジジ・ブラッドフォード (Center for Arts and Culture エグゼクティブ・ ディレクター、詩人) 奥山 緑 (舞台制作者) 伊藤キム (振付家・ダンサー)
18	2001/5/25	広げすぎず 狭めすぎず —— 第 3 回アジア女性演劇会議について ----- 【シリーズ: 米国の文化政策②】文化政策とビュー・チャリタブル・トラストについて ----- 異文化紹介のメカニズム —— 英国ヴィジティン・アーツの理念と活動 ----- 【森下スタジオ報告】2001 JCDN 発足シンポジウム「全国のダンスの環境創りに向けて」	内野 儀 (東京大学大学院総合文化研究科助教授) マリアン・A. ゴドフリー (ビュー・チャリタブル・トラスト文化事業部ディ レクター)、スティーブン・K. ユライス (ビュー・チャリタブル・トラ スト文化事業部プログラム・オフィサー) テリー・サンデル (ヴィジティン・アーツディレクター)
19	2001/9/10	to be or not to be —— 舞台芸術団体に非営利法人格を適用することの妥当性と ----- 必要性について 【シリーズ: 米国の文化政策③】研究者から見た米国の文化政策 ----- 舞台の上でみえを切ったり、喚いたり ----- —— CJ8: カナダ/日本ダンス・パートナーシップについて 【森下スタジオ報告】①制作実践セミナー 2001 法律編: 舞台制作のための基礎知識「著作権」 と「契約」、②劇団解体社セゾンシアタープログラム『パイパイ/未開へ』公演、写真展	塩谷陽子 (アーキベラゴ代表、ジャパン・ソサエティー舞台公演部事業 担当) マーガレット・J. ヴィゾミアスキー (オハイオ州立大学教授 [公共政策 および芸術教育専攻]、同校芸術政策・運営プログラムディレクター) コリン・マッキンタイヤ (プロデューサー、フェスティバルディレクター)
20	2002/2/28	【シリーズ: 米国の文化政策④】9 月 11 日以降の米文化政策の展望 ----- 劇団解体社ワールドツアーを終えて ----- アメリカ —— 物語的ダンスフェスティバルのあとに —— ----- 【森下スタジオ報告】①セゾンシアタープログラム『Dreamtime in Morishita Studios』、 ②セゾンシアタープログラム パークタワー・ネクストダンスフェスティバル・プレイヴェント 「ネクスト・ネクスト —— 次の次のダンスは森下から」	ジェームズ・アレン・スミス (歴史学者、J. ボール・Getty 基金財 団理事長付シニアアドバイザー) 清水信臣 (演出家、劇団解体社主宰) 北村明子 (振付家・ダンサー、レニパソ主宰)
21	2002/6/10	特集: 日本の戯曲の翻訳 話し言葉の翻訳 ----- 日本の現代戯曲の同時代性を伝える —— ドラマ・リーディング ----- ～日本の若手劇作家の現在 in the UK 日本戯曲の英訳について ----- 【森下スタジオ報告】イデビアン・クルー『IDEVIAN LIVE 5 five 暗黙の了解～後編～』公演	斎藤 憐 (劇作家) 中山弘美 (舞台制作者) リアン・イングルスルード (演出家、俳優、通訳・翻訳家、演劇教育者)
22	2002/9/30	特集: 海外で活躍する日本のダンスアーティスト 日本の現代ダンスのアーティストが海外へ出る背景 ----- 僕がベルギーに居続けてしまう理由 ----- 海外で活躍するダンサーたち —— “里帰り” ワークショップの開催にあたって 遠藤康行 (ベルギー/シャルロワ・ダンス所属)、社本多加 (ベルギー/ローザス所属)、 安藤洋子 (ドイツ/フランクフルトバレエ団所属)、稲尾芳文、島崎麻美 (イスラエル/パ ットシェバ・ダンスカンパニー所属) へのインタビュー 【森下スタジオ報告】指輪ホテル『nowhere Girl』公演	佐藤まいみ (神奈川芸術文化財団コンテンポラリーアーツシリーズ プロデューサー) 日玉浩史 (振付家・ダンサー)

号	発行日	タイトル	著者・所属等
23	2002/11/30	ラオコオン・サマー・フェスティヴァル 2002 ----- 今、ここ、に立つ(丸腰の身体)からの出発 ----- —— ラオコオン・サマー・フェスティバルに参加して 全身の包帯を解くために —— ベイツ・ダンス・フェスティバルでのレジデンシー報告 ----	鴻 英良 (ラオコオン・サマー・フェスティヴァル [カンブナゲル・ハンブルク] 芸術監督、演劇批評誌「舞台芸術」責任編集) 大橋 宏 (演出家、DA・M 代表) 石川ふくろう (PROJECT FUKUROW 代表)
24	2003/2/28	芸術文化創造活動支援の可能性 —— ブルーラル・ファンディングの課題 ----- 第 10 回を迎えた世田谷パブリックシアター —— 舞台技術者養成講座 ----- ウェールズ ダンス・カンパニー —— ダイバージョンズとの複合的な交流事業 ----- 【森下スタジオ報告】セゾンシアタープログラム パークタワー・ネクストダンスフェスティバル・プレイヴェント「ネクスト・ネクスト 3」	坪内恵美子 (一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授) 市来邦比古 (舞台音響家、世田谷パブリックシアターテクニカルマネージャー) 井手茂太 (イデビアン・クルー主宰、振付家)
25	2003/5/31	「舞踊」雑考 (H・アール・カオス 1997-2002) ----- 「地域」を越えた舞台芸術の創造 —— 岡山舞台芸術セミナーの活動と展望 ----- ダンスの潮流を学ぶ —— 京都国際ダンスワークショップ・フェスティバル “ 京都の暑い夏 ”	大島早紀子 (H・アール・カオス主宰、演出・振付家) 大森誠一 (おかやまアートファーム代表、プロデューサー) 森 裕子 (京都の暑い夏事務局代表)
26	2003/8/31	ロンドンへの道・前編 ----- 新たな寓話の創出 —— 『RED DEMON』ロンドン公演を観て ----- 小劇場におけるロングラン公演への挑戦 ----- 【森下スタジオ報告①】ロベルト・ラモス=ベレア来日記念演劇ワークショップおよび レクチャー「フェルトリコの現代演劇と社会」、②ティーフクトリー『ハムレットクローン』 [現在][東京][ハムレット]2003 年度版 ドイツツアー プレ公演、③ The School of Hard Knocks Japan le [家]10,000 のステップで綴る記憶『動く彫刻』リパース・ サイコロジープロジェクト ワークインプログレス&ディスカッション	野田秀樹 (劇作家、演出家、俳優) キャサリン・ハンター (女優、演出家) 小原啓渡 (アートコンプレックス 1928 プロデューサー)
27	2003/12/10	フェルトリコの新しい演劇 ----- ロンドンへの道・中編 ----- 誰にでもオープンな英国のアートセンター —— チャプター・アートセンターでの研修を終えて 【森下スタジオ報告】スタッフ塾 in 森下スタジオ PART 2 レクチャーワークショップ 創作ワークショップ、公開パフォーマンス セゾン文化財団 (メセナ大賞 2003 舞台芸術牽引賞) 受賞の報告	ロベルト・ラモス=ベレア (劇作家、俳優、演出家、演劇ジャーナリスト、 批評家) / 訳: 古屋雄一郎 野田秀樹 秦 岳志 (劇団解体社制作・技術スタッフ)
28	2004/3/15	転換期にある関西小劇場 —— 大阪現代舞台芸術協会を通して我々に何が出来るか --- 指輪ホテル細腕繁盛記 (2001-2003) ----- リビングルーム さざら編 —— 栗東における『Living Room Project』の取り組み ----- 【森下スタジオ報告】パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル・プレイヴェント ネクスト・ネクスト、Just before the performance!	深津篤史 (桃園会主宰 劇作家 演出家 大阪現代舞台芸術協会 [DIVE] 会長) 羊屋白玉 (劇作家、演出家、俳優、指輪ホテル主宰) 白井 剛 (振付家ダンサー 映像作家 Study of Live works 発条ト代表)
29	2004/7/25	【シリーズ:世界の芸術支援】台湾・財団法人国家文化芸術基金について ----- 芸術振興政策における芸術 NPO の意義 ----- ロンドンへの道・後編 ----- 【森下スタジオ報告】芸術分野海外研修サポートプロジェクト シンポジウム Vol.1 海外で学ぶ~そのプロセスと成果~アーツマネジメント編	財団法人国家文化芸術基金会 資源開発部編 / 訳: 蘭 明 曾田修司 (跡見学園女子大学マネジメント学部教授、特定非営利活動 法人 ST スポット横浜理事長) 野田秀樹
30	2004/11/15	作品の熟成 ----- 【シリーズ:世界の芸術支援】ジャーウッドとは何か? ----- 日本の現代演劇をロシアへ —— 国立オムスク大学における日本文化講座 -----	川村 毅 (劇作家、演出家、T factory 主宰) ロアンヌ・ドッズ (英ジャーウッド・チャリティ事務局長) 村井 健 (演劇評論家、日露演劇会議事務局長)
31	2005/3/31	【シリーズ:世界の芸術支援】ロレックスの「メントー&プロトジェ ----- アートプログラム」について 誤解から理解へ —— 俳優教育でいま求められているもの ----- コンタクト・インプロビゼーションって何? を C.I.co. 的視点から -----	レベッカ・アーヴィン (ロレックスメントー&プロトジェ アートプログラ ム およびロレックス賞事務局長) 川南 恵 (舞台芸術コーディネーター/プロデューサー) 勝部ちこ (ダンサー、インプロバイザー、振付家、C.I.co. 代表)
32	2005/8/20	新しい批評の場を求めて ----- 集客から創客へ。 ----- 「オリジナルのワークショップを創る研究会」の活動について -----	長谷部浩 (演劇評論家、東京芸術大学助教授) 衛 紀生 (演劇評論家、県立宮城大学事業構想学部・大学院研究科 客員教授) 吉野さつき (ワークショップ・コーディネーター)
33	2005/12/10	声と言葉と身体をつなげる旅路 ----- 【シリーズ:世界の芸術支援】プリンセス・グレース財団 [USA] と ----- プリンセス・グレース賞について 瓶詰め状態の劇作家 —— アメリカにおける劇作家たちの状況 -----	池内美奈子 (ヴォイス・ティーチャー、新国立劇場演劇研修所講師) クリスティヌ・M. ジャンカテリーノ (プリンセス・グレース財団 [USA] 助成プログラムコーディネーター) アヤ・オガワ (劇作家、演出家、パフォーマー、ジャパン・ソサエティー 舞台芸術部門プログラム・オフィサー)
34	2006/3/25	DANCE BOX: 過去-現在-未来 ----- 我が闘争~うずめ劇場イン北九州 ----- ダンスとメディア —— その関係性と必要性 -----	大谷 燦 (NPO 法人 DANCE BOX Executive Director) ペーター・ゲスナー (うずめ劇場主宰) 飯名尚人 (Dance and Media Japan 代表)

号	発行日	タイトル	著者・所属等
35	2006/5/20	幽霊今昔 — 『四谷怪談』を演出して — 日独共同プロジェクト『四谷怪談』の現場から レニ・パッソの海外公演 フツウのダンス・カンパニーが海外でたくさん公演できるワケ	ヨッシ・ヴィーラー (演出家) 阿部初美 (演出家、『四谷怪談』演出補佐) 布施龍一 (レニ・パッソ代表)
36	2006/8/20	芸術家のくすり箱の誕生 — 才能を花開かせるしくみを創るために必要なこと — 【シリーズ:世界の芸術支援】NESTA とドリームタイム・フェローシップ・プログラムについて 私、新しい自分を見つけちゃいました	福井恵子 (芸術家のくすり箱代表) ヴェヌ・デュバ (NESTA [英国科学・技術・芸術基金] フェローシップ部門前ディレクター) 伊藤キム (振付家、ダンサー)
37	2006/12/10	リサーチ & ディベロップメント — プレイライツ・センターについて — インタビュー「…」には気をつけて — ミネアポリスの「プレイラボ」に参加して — ムネモシュネの贈り物 — 「記憶」をめぐる物語 —	ポリー・カール (米プレイライツ・センター芸術監督) 本谷有希子 (劇作家、演出家、「劇団、本谷有希子」主宰) ユディ・アーマド・タジュディン (テアトル・ガラシ [インドネシア] 主宰・芸術監督、演出家)
38	2007/3/5	モバイル — 現代異文化社会派演劇について — 『モバイル』への道 Dance Theatre LUDENS 2000-2005	アルヴィン・タン (ネセサリー・ステージ [シンガポール] 創設者芸術監督、演出家) 鐘下辰男 (劇作家、演出家、演劇企画集団 THE・GAZIRA 主宰) 岩淵多喜子 (振付家、ダンサー、Dance Theatre LUDENS 主宰)

【別表⑤】制作実践セミナー 開催歴一覧 (1996-2004 年度)			
開催期間	タイトル	講師	会場
1996/11/6	第 1 回「海外公演の実施と問題点」	曾田修司 (国際舞台芸術交流センター)、小山田徹 (ダムタイプ)	東京・モリイテントスペース
1997/1/16	第 2 回「ワークショップ活動の可能性 — 自治体との取り組みを中心に」	松本 修 (MODE)	森下スタジオ
1997/7/29	第 3 回「芸術団体の法人化」	桑野雄一郎 (濱田松本法律事務所、弁護士)、 楯屋一之 (有限会社ノイズ/劇団 NOISE)	森下スタジオ
1997/10/29	第 4 回「現代舞踊の活性化に向けて」	ローラ・ファーレ (ベイツ・ダンス・フェスティバル エグゼクティブ・ディレクター)、佐東範一 (制作/米 DTW インターン)	森下スタジオ
1998/2/6	第 5 回「地方公演のルート作り — 効果的なアプローチとプレゼンテーションの方法」	津村 卓 (財団法人地域創造)、坂手洋二 (燐光群)	森下スタジオ
1998/7/22	第 2 期・I 「芸術団体にとっての NPO 法」	伊藤裕夫 (電通総研)	セゾン文化財団会議室
1998/8/7	第 2 期・II 「ニューヨークにおける日本現代演劇の紹介」	ポーラ・S. ローレンス (ジャパン・ソサエティ)	セゾン文化財団会議室
1998/9/11	第 2 期・III 「他業種から学ぶ観客開拓 1 — 音楽編」	児玉 真 (カザルスホール)	セゾン文化財団会議室
1998/11/27	第 2 期・IV 「他業種から学ぶ観客開拓 2 — 映画編」	篠原弘子 (株式会社ブレノン・アッシュ)	森下スタジオ
2000/4/5-5/17	法律編: A コース「舞台作品・上演に関わる著作権」(全 5 回)	福井健策 (弁護士) ナビゲーター: 奥山緑 (舞台制作者)	森下スタジオ
2000/5/24-6/14	法律編: B コース「舞台芸術と契約」(全 4 回)	ゲスト講師 [A] 斎藤憐 (劇作家)、[B] 大和滋 (芸団協)	
2000/9/27-12/6	舞台制作者のためのマーケティング勉強会 (全 6 回)	和田充夫 (慶應義塾大学ビジネス・スクール教授)	セゾン文化財団会議室
2001/5/17-6/14	法律編「舞台作品・上演に関わる著作権」(全 5 回) 法律編「舞台芸術と契約」(全 5 回)	福井健策 (弁護士) ナビゲーター: 奥山緑 (舞台制作者) ゲスト講師 [A] 高萩宏 (世田谷パブリックシアター)、 [B] 宮田慶子 (劇団青年座)	森下スタジオ
2004/9/13	指定管理者制度はビジネスチャンス?	小林真理 (東京大学助教授) パネリスト: 市村作知雄 (NPO 法人 アートネットワーク・ジャパン理事)、 大野晃 (神奈川県立県民ホール館長)	国際フォーラム会議室
2004/10/4	ジャパニーズ・クールに波に乗る — マンガ、アニメ、ゲームの海外戦略 —	小野打恵 (株式会社ヒューマンメディア代表取締役社長) ゲスト: 村濱章司 (株式会社 GDH 代表取締役会長)	国際フォーラム会議室
2004/11/19	美術界から学ぶ — 新世代ギャラリストの戦略とは —	小山登美夫 (小山登美夫ギャラリーオーナー)	国際フォーラム会議室

【別表⑥】中国社会科学院 日本市場経済研究センター (北京) による翻訳出版事業「現代日本社会科学名著シリーズ」著作一覧 (1998-2000 年度)
出版: 中国人民大学出版社

助成年度	書名	著者	刊行年
1998	『株式会社発展史論』	大塚久雄	2001
	『スミスとリスト』	大河内一男	2000
1999	『複合不況』	宮崎義一	2000
	『円の国際史』	築地悠二	2002
2000	『反グローバリズム — 市場改革の戦略的思考』	金子 勝	2002
	『恐慌・不況の経済学』	林 直道	2005

【別表⑦】ジャパン・ソサエティ Japanese Theater NOW 参加アーティスト一覧

第 1 期: 1998-2002 年度			
助成年度	劇団	主宰者	上演作品
1998	燐光群	坂手洋二	『神々の国の首都』
1999	新宿梁山泊	金 守珍	『少女都市からの呼び声』
2000	青年団	平田オリザ	『東京ノート』
2001	劇団解体社	清水信臣	『バイバイ/未開へ』
2002	ク・ナウカ シアターカンパニー	宮城 聡	『天守物語』
第 2 期: 2004-06 年度			
助成年度	劇団	主宰者	上演作品
2004	燐光群	坂手洋二	『屋根裏』
2005	青年団	平田オリザ	『ヤルタ会談』『忠臣蔵・OL 編』
2006	指輪ホテル	羊屋白玉	『CANDIES girlish hardcore』

【別表⑧】ユディツィウム社による翻訳出版事業 著作一覧

第1期：1999-2003 年度			
助成年度 書名	著者	刊行年	
1999 『インターカルチャーと日本的なもの』他論文集 『日本の思想——土着と欧化の系譜——』	大橋良介 上山春平	1999 2001	
2000 『夕陽妄語』 『生物の世界』	加藤周一 今西錦司	2001 2002	
2001 『柔らかな個人主義の誕生』 『共通感覚論』	山崎正和 中村雄二郎	2003 2004	
2002 『日本人はなぜ無宗教なのか』 『伝統の創造力』	阿満利磨 辻井 喬	2004 2005	
2003 『日本にできることは何か——東アジア共同体を提案する』 『日本多神教の風土』	森嶋通夫 久保田展弘	2005 2006	
第2期：2004-06 年度			
助成年度 書名	著者	刊行年	
2004 『意識と本質』 『エコエティカ 生態倫理学入門』	井筒俊彦 今道友信	2006 2007	
2005 『日本の「構造改革」——いま、どう変えるべきか——』 『丸山眞男選 第一巻』	佐和隆光 丸山眞男	2007 2007	
2006 『丸山眞男選集 第二巻』	丸山眞男	2007	

【別表⑨】ベイツ・ダンス・フェスティバル(米・メイン州ルイストン) 参加舞踊家一覧

期間	参加舞踊家
1999 年 7 月 24 日－ 8 月 15 日	武元賀寿子(但し同フェスティバルへの助成として)
「ベイツ・ダンス・フェスティバル舞踊家派遣事業」参加舞踊家	
期間	参加舞踊家(カンパニー名)
2000 年 7 月 29 日－ 8 月 20 日	伊藤キム(伊藤キム＋輝く未来)
2001 年 7 月 28 日－ 8 月 19 日	北村明子(レニ・パッソ)
2002 年 7 月 27 日－ 8 月 18 日	石川ふくろう(PROJECT FUKUROW)

【別表⑩】セゾンシアタープログラム(2000-06 年度) *「森下スタジオ若手舞踊家育成プログラム関連事業」については【別表⑪】を参照

年度	事業名	主催	期間	開催地	備考
2000	世田谷パブリックシアター舞台技術者養成講座	(財)世田谷区コミュニティ振興交流財団	2000/6/10-2001/3/27	東京(世田谷パブリックシアター、シアタートラム)	
	国際舞踊夏期大学及びサテライト・プログラム	国際舞踊夏期大学	2000/8/3-8/26	北海道、東京(森下スタジオ)、静岡、宮城、愛知、愛媛	講師：笠井勲、中村千秋、ディディ・ドゥヴィリア、ジョン・ジャスパース、エイコ他
	『南洋くじら舞台』公演	燐光群＋国際交流基金	2000/10/10-12/21	東京(森下スタジオ)、沖縄	作・演出：坂手洋二
2001	『垂直の夢』公演	H・アール・カオス	2001/6/12-6/16	東京(ル テアトル銀座)	構成・演出・振付：大島早紀子 音楽監督：SUGIZO
	『バイバイ/未開へ』公演	劇団解体社	2001/6/15-6/24	東京(森下スタジオ)	作・構成・演出：清水信臣
	世田谷パブリックシアター舞台技術者養成講座	(財)世田谷区コミュニティ振興交流財団	2001/7/8-2002/2/17	東京(世田谷パブリックシアター、シアタートラム)	
	国際舞踊夏期大学及びサテライト・プログラム	国際舞踊夏期大学	2001/8/5-8/25	東京(森下スタジオ)、宮城、静岡、愛知、愛媛	講師：笠井勲、中村千秋、バーバラ・グラベル、ニナ・マーティン、クレグ・パターソン他
	『Dreamtime in Morishita Studios』レジデンシーおよびショーイング	シアターワークス(シンガポール)	2001/11/6-12/2	東京(森下スタジオ)	構想・演出：オン・ケンセン 出演【シンガポール】ジェレマイヤ・チョイ、ジャニス・コー、ロク・メンチュエ、ロー・キーホン [日本：グループA] グラインダーマン(パフォーマンス)、山中透(DJ) [日本：グループB] 羊屋白玉＋指輪ホテルメンバー(演劇)、西山美なコ(美術) 助成：アジア・カルチュラル・カウンシル 協賛：アサヒビール株式会社、プラスビジョン株式会社
					協力：世田谷パブリックシアター技術者養成講座
2002	世田谷パブリックシアター舞台技術者養成講座	(財)世田谷区コミュニティ振興交流財団	2002/7/22-2003/3/27	東京(世田谷パブリックシアター、シアタートラム)	
イ	国際舞踊夏期大学及びサテライト・プログラム	国際舞踊夏期大学	2002/8/2-8/25	東京(森下スタジオ他)、愛媛、北海道、静岡、愛知、宮城	講師：大野慶人、中村千秋、ディディ・ドゥヴィリア、ジョン・ジャスパース、バーバラ・グラベル、クレグ・パターソン他
	美術展『傾く小屋——美術家たちの証言 since 9.11』関連企画 鼎談『傾く日本社会——アートの役割』	東京都現代美術館、セゾン現代美術館	2002/11/24	東京都現代美術館講堂	スピーカー：村上陽一郎、小森陽一 - 進行：平田オリザ
2003	『ハムレットクローン』公演	ティーファクトリー	2003/6/28-7/6	東京(森下スタジオ)	作・演出：川村毅
	『バイバイ/幻影』公演	劇団解体社	2003/11/14-11/16、11/20-11/22	東京(森下スタジオ)	作・構成・演出：清水信臣
2004	『夜壺』公演	うずめ劇場	2004/11/3-11/6	東京(森下スタジオ)	作：唐十郎 演出：ペーター・ゲスナー
	『フィリピン ベッドタイム ストーリーズ』公演	燐光群	2004/11/24-11/29	東京(森下スタジオ)	演出：吉田智久
2005	日独共同創造演劇プロジェクト シアター X プロデュース公演 鶴屋南北『四谷怪談』	東京ドイツ文化センター、シアター X	2005/8/5-8/14	東京(稽古：森下スタジオ、公演：シアター X)	作：鶴屋南北 演出：ヨッシ・ヴィーラー 美術・衣裳：渡邊和子 助成：平成 17 年度文化庁国際芸術交流支援事業、財団法人ア

年度	事業名	主催	期間	開催地	サヒビール芸術文化財団、私的録音補償金管理協会 備考
2005	『Mobile — アジアの移住労働者』プロジェクト	ネセサリー・ステージ (シンガポール)	2006/1/9-1/21	東京(森下スタジオ)	演出:アルヴィン・タン、鐘下辰男 脚本:ハレーシュ・シャーマ他 助成:財団 法人アサヒビール芸術文化財団、東京都芸術文化発信事業助成、ナショナル・アーツ・カウンシル・シンガポール 協力:世田谷パブリックシアター、演劇企画集団 THE・ガジラ、劇団黒テント、青年団
2006	日米現代劇作家・戯曲交流プロジェクト	U.S./Japan Cultural Trade Network of Arts Midwest	2006/2/1-2007/1/31	米・ミネアポリス (プレイライツ・センター)	派遣劇作家:本谷有希子 翻訳対象作品: 『乱暴と待機』(英題: Vengeance Can Wait) 提携:プレイライツセンター(ミネアポリス)、 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 協力: ガスリー・シアター(ミネアポリス) 助成:ア ンドリュウ・W. メロン財団、在日米国大使館
	2006 年度日仏都市会議「都市の文化対話と連携」プロジェクト	総合研究開発機構(NIRA)、2006/5/8 在日フランス大使館、 (社)企業メセナ協議会、 日仏工業技術会(SFJTI)		東京(日仏会館)	共催:日仏メディア交流協会、 EU・ジャパンフェスト日本委員会、 日欧文化交流協会(AJEEC)
	『Mobile — アジアの移住労働者』プロジェクト	ネセサリー・ステージ (シンガポール)	2006/6/17-6/18	シンガポール	演出:アルヴィン・タン、鐘下辰男 脚本:ハレーシュ・シャーマ他 助成:財団 法人アサヒビール芸術文化財団、ナショナル・アーツ・カウンシル・シンガポール

【別表⑪】セゾンシアタープログラム 森下スタジオ若手舞踊家育成プログラム関連事業一覧(2000-04 年度)

共催:東京ガス都市開発株式会社 パークタワー・アートプログラム(2000-03 年度) 協力:ST スポット、セッションハウス、DANCE BOX 協賛:アサヒビール株式会社、トヨタ自動車株式会社 企画・制作協力:ハ
イウッド 機材協力:パークタワーホール、ル テアトル銀座

年度	開催日程	イベント名	会場	出演者
2000	2000/12/9	ネクスト・ネクスト(若手による舞踊小作品集)	森下スタジオ	石川ふくろう、オガワユカ、クルスタシア、たかぎまゆ、水と油
	2001/2/1-2/7	Just before the performance!(作品創作過程の見学およびトーク)	森下スタジオ	岩淵多喜子、永谷亜紀、佐藤ベチカ、山下 残、 マドモワゼル・シネマ
	2001/2/16-2/24	第 5 回パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル	パークタワーホール	岩淵多喜子、永谷亜紀、佐藤ベチカ、山下 残、 マドモワゼル・シネマ
2001	2001/12/8	ネクスト・ネクスト 2	森下スタジオ	天野由起子、北村成美、坂本公成、山田珠美
	2002/1/25、 1/31、2/1	Just before the performance!	森下スタジオ	岩淵多喜子(Dance Theatre LUDENS)×松澤慶信(舞踊美学)、 矢内原美邦×桜井圭介(ダンス批評)、 石川ふくろう(PROJECT FUKUROW)×石井達朗(舞踊評論家)
	2002/2/20-2/28	第 6 回パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル	パークタワーホール	岩淵多喜子/Dance Theatre LUDENS、矢内原美邦/ ニブロール、石川ふくろう/ PROJECT FUKUROW
2002	2002/12/21	ネクスト・ネクスト 3	森下スタジオ	岡本真理子、黒田育世、砂連尾理+寺田みさこ、飛び入り家系
	2003/2/17、 2/20、2/22	Just before the performance!	森下スタジオ	山田うん(Co. 山田うん)×松澤慶信(舞踊美学)、 矢内原美邦(ニブロール)×桜井圭介(ダンス批評)、 坂本公成(Monochrome Circus)×石井達朗(舞踊評論家)
	2003/2/26-3/5	第 7 回パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル	パークタワーホール	坂本公成/Monochrome Circus、矢内原美邦/ ニブロール、山田うん/ Co. 山田うん
2003	2003/12/20	ネクスト・ネクスト 4	森下スタジオ	相原マユコ、鈴木ユキオ、高野美和子、林 貞之
	2004/2/7、 2/13、2/17	Just before the performance!	森下スタジオ	砂連尾理+寺田みさこ×桜井圭介(ダンス批評)、 矢内原美邦(ニブロール)×石井達朗(舞踊評論家)、 黒田育世(BATIK)×松澤慶信
	2004/2/25-3/3	第 8 回パークタワー・ネクストダンス・フェスティバル	パークタワーホール	砂連尾理+寺田みさこ、矢内原美邦/ニブロール、黒田育世/ BATIK
2004	2004/12/18	ネクスト・ネクスト 5	森下スタジオ	北村成美、鈴木ユキオ、康本雅子

【別表⑫】継続プロジェクト支援プログラム 助成対象団体一覧(2001-06 年度)

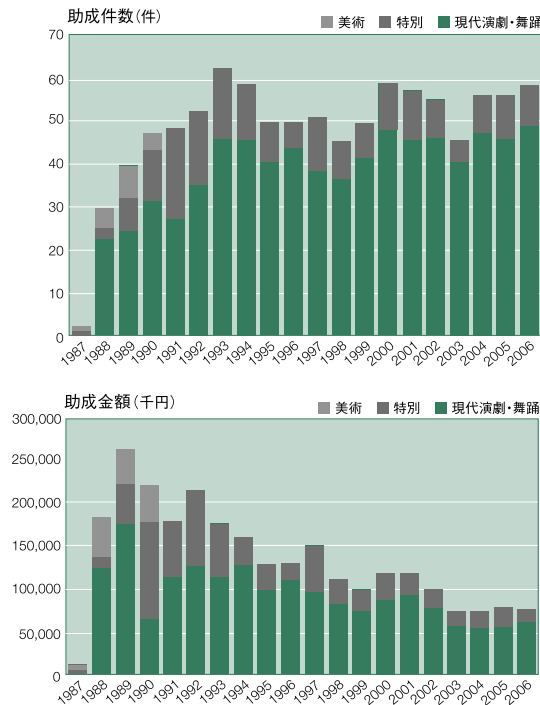
* 緑字は 2006 年度現在の助成対象者

ジャンル	対象者名	代表者・芸術監督	助成対象年度
演劇	ティーファクトリー(第三エロチカ)	川村 毅	2001-03
	ク・ナウカ シアターカンパニー	宮城 聡	2001-02
	劇団信臣	清水信臣	2004-06
	燐光群/(有)グッドフェローズ	坂手洋二	2006-08
舞踊	舞踊資源研究所	田中 涙	2004-06
	矢内原美邦(個人プロジェクト)	矢内原美邦	2005-06
パフォーマンス	ビーグル・インク(株)プロデュース	上田 茂	2006-08
	中馬芳子/The School of Hard Knocks Japan	中馬芳子	

■助成件数および助成金額(1987-2006 年度)

年度	助成件数(件)		
	現代演劇・舞踊	特別	美術
1987	1	1	1
1988	23	2	4
1989	24	7	7
1990	31	12	3
1991	27	20	
1992	35	17	
1993	46	16	
1994	46	12	
1995	40	9	
1996	43	6	
1997	38	12	
1998	36	8	
1999	41	8	
2000	48	10	
2001	45	11	
2002	45	8	
2003	40	4	
2004	47	8	
2005	46	9	
2006	49	8	
累計	750	188	15

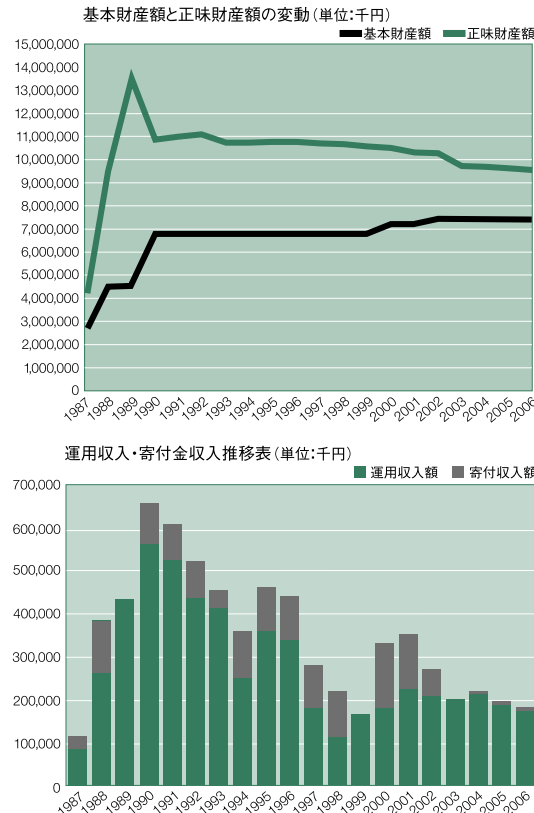
※ 89 年度の中止案件 3 件は除く
* 美術助成は 90 年度にて終了



年度	助成金額(千円未満切捨て)		
	現代演劇・舞踊	特別	美術
1987		10,000	10,000
1988	133,475	10,500	41,000
1989	174,680	45,226	37,863
1990	60,703	119,438	30,000
1991	115,280	64,465	
1992	120,973	85,616	
1993	113,250	62,500	
1994	128,643	31,350	
1995	100,000	27,830	
1996	110,500	17,394	
1997	99,000	49,430	
1998	84,174	25,212	
1999	78,000	20,433	
2000	92,600	25,208	
2001	96,100	22,140	
2002	77,500	21,000	
2003	56,000	13,000	
2004	54,420	14,800	
2005	57,125	17,600	
2006	59,969	14,100	
累計	1,812,396	697,246	118,863

■財産および収入の推移(1987-2006 年度)

年度	基本財産額	正味財産額
1987	2,645,000,000	4,189,784,319
1988	4,500,000,000	9,309,604,931
1989	4,500,000,000	13,571,750,954
1990	6,723,464,000	10,906,909,686
1991	6,723,464,000	11,019,105,332
1992	6,723,464,000	11,068,145,516
1993	6,723,464,000	10,687,650,597
1994	6,723,464,000	10,583,469,005
1995	6,754,915,150	10,668,787,494
1996	6,754,915,150	10,705,991,696
1997	6,754,915,150	10,581,734,118
1998	6,754,915,150	10,477,816,709
1999	6,754,915,150	10,407,897,491
2000	7,246,725,150	10,434,452,856
2001	7,246,725,150	10,314,379,942
2002	7,346,725,150	10,198,385,708
2003	7,359,315,150	9,651,734,220
2004	7,359,315,150	9,630,996,738
2005	7,359,315,150	9,608,270,865
2006	7,359,315,150	9,582,893,121



年度	運用収入額	寄付収入額
1987	90,668,044	25,000,000
1988	256,163,575	1,930,000,000
1989	431,006,076	4,170,000,000
1990	568,778,789	186,353,000
1991	521,209,103	84,031,250
1992	436,579,482	73,640,000
1993	416,490,929	50,000,000
1994	253,457,621	100,000,000
1995	365,684,529	100,000,000
1996	346,243,950	100,500,000
1997	190,552,306	100,000,000
1998	110,788,278	100,000,000
1999	174,081,067	0
2000	188,125,517	150,000,000
2001	224,827,914	137,000,000
2002	208,060,767	67,500,000
2003	201,796,002	0
2004	211,981,012	3,950,548
2005	193,719,435	5,000,000
2006	185,532,689	5,000,000

■金融情勢の変遷(1987-2006 年度)



■理事・監事一覧(1987-2006 年度)

	氏名	就任時期	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
			7月	6月	6月	6月	6月	6月	6月	6月	6月	6月	6月	6月	6月	4月	4月	4月	4月	4月	4月	4月
理事	第15期	第16期	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	第9期	第10期	第11期	第12期	第13期	第14期						
	1 堤 清二	1987																				
	2 生野重夫	1987																				
	3 石川六郎	1987																				
	4 河竹登志夫	1987																				
	5 木田 宏	1987																				
	6 紀国憲一	1987																				
	7 白洲正子	1987																				
	8 高丘季昭	1987																				
	9 永井道雄	1987																				
	10 羽倉信也	1987																				
	11 平岩外四	1987																				
	12 山崎富治	1987																				
	13 本野盛幸	1989																				
	14 八木忠栄	1993																				
	15 片山正夫	1997																				
	16 絹村和夫	1997																				
	17 佐野文一郎	1997																				
	18 安西邦夫	1999																				
	19 川口幹夫	1999																				
	20 小林陽太郎	1999																				
	21 森 稔	1999																				
	22 堤 康二	2001																				
	23 風間英昭	2003.11																				
	24 難波英夫	2003.11																				
理事合計数(各年度)			12	12	13	13	13	13	13	13	13	12	15	15	15	15	14	14	15	15	13	12
監事	1 堤 麻子	1987																				
	2 中瀬宏通	1987																				
	3 原後山治	1987																				
	4 伊藤 醇	1996																				
	5 後藤康男	1999																				
	6 生野重夫	2003																				
監事合計数(各年度)			3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2
理事・監事合計数(各年度)			15	15	16	16	16	16	16	16	16	15	18	18	18	18	17	17	17	17	15	14

■評議員一覧(1987-2006 年度)

氏名 第15期	就任時期 第16期	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
		7月 第1期	6月 第2期	6月 第3期	6月 第4期	6月 第5期	6月 第6期	6月 第7期	6月 第8期	6月 第9期	6月 第10期	6月 第11期	4月 第12期	4月 第13期	4月 第14期						
1 青木辰男	1987																				
2 江頭啓輔	1987																				
3 朝倉 摂	1987																				
4 阿部良雄	1987																				
5 生野重夫	1987																				
6 石井ふく子	1987																				
7 磯田一郎	1987																				
8 一柳 慧	1987																				
9 伊夫伎一雄	1987																				
10 岩田 勝	1987																				
11 沖 正一郎	1987																				
12 荻 昌弘	1987																				
13 小田島雄志	1987																				
14 川上 浩	1987																				
15 川口幹夫	1987																				
16 紀国憲一	1987																				
17 小池一子	1987																				
18 近藤道生	1987																				
19 三枝成彰	1987																				
20 佐野文一郎	1987																				
21 高丘季昭	1987																				
22 高橋照明	1987																				
23 團 伊玖磨	1987																				
24 遠山一行	1987																				
25 中川鋭之助	1987																				
26 中原祐介	1987																				
27 野村 喬	1987																				
28 増田通二	1987																				
29 水落 潔	1987																				
30 宮本保孝	1987																				
31 山口勝弘	1987																				
32 山口一信	1987																				
33 山崎正和	1987																				
34 高橋昌也	1989																				
35 三枝佐枝子	1991																				
36 荒井 豊	1993																				
37 植木 浩	1993																				
38 絹村和夫	1993																				
39 西村恭子	1993																				
40 宇佐見昭次	1995																				
41 後藤 茂	1995																				
42 佐治俊彦	1995																				
43 杉山駒吉	1995																				
44 中村雄二郎	1995																				
45 高橋康也	1997																				
46 山田晶義	1997																				
47 犬養康彦	1999																				
48 内野 儀	1999																				
49 坂本春生	1999																				
50 沼野充義	1999																				
51 松岡和子	1999																				
52 三島憲一	1999																				
53 柳瀬 治	1999																				
54 渡邊紀征	1999																				
55 伊東 勇	2001																				
56 林野 宏	2001																				
57 堤 麻子	2003																				
58 石井達朗	2005																				
評議員合計数(各年度)		33	33	33	33	33	33	33	33	34	34	31	31	31	31	24	23	20	20	19	19
理事・監事および 評議員合計数(各年度)		48	48	49	49	49	49	50	50	50	49	51	51	51	51	43	42	39	39	36	35

2006 年度事業概要

■助成事業

I. 国内プログラム

I-1. 現代演劇・舞踊助成 ― 創造環境整備

ワークショップ、会議、シンポジウム等

演劇・舞踊界の人材育成、システム改善、情報交流など芸術創造を支える環境の整備を目的とした助成プログラム。ワークショップ、会議、シンポジウム等の企画に対し、企画経費の一部を助成(2006年度実績:30万円～150万円)し、希望者には会場として森下スタジオを提供する(スタジオ提供のみの場合あり)。原則として同一テーマ/企画の継続助成は3年間で限度とする。現代演劇・舞踊界が現在抱えている問題点を明らかにし、その解決方法を具体的に提案する次の事業を重視する。

- 演出家、俳優、振付家、ダンサー、制作者、技術スタッフ等の技術向上を目的とした経験者対象の人材育成プログラム
- 劇場等による人材発掘・育成企画
- 情報交流の場の提供、情報公開を推進するシステムの整備などを目的とした会議、シンポジウムなど

アーツマネジメント留学・研修

国際的視野をもつアーツマネジャーの養成を目的とした海外への留学・研修に対し、100万円を上限として留学資金の一部を助成する。対象は下記のすべての条件を満たしている方とする。

- 演劇・舞踊関連の芸術経営/運営の専門家として3年以上の職歴があること
- 海外の専門教育機関への留学、あるいは劇場・芸術団体への3カ月以上の研修が内定していること
- 帰国後に留学の成果を活かし、国内の演劇・舞踊の振興に寄与する意欲と長期的展望を有すること

サバティカル(休暇・充電)

日本を拠点に活動する演出、振付、劇作、批評、プロデュースの専門家として5年以上の活動歴を有し、1カ月以上の海外渡航を希望する個人に対し、100万円を上限に、渡航費用の一部に対し助成金を交付。

- とくに、申請時点までに継続的に作品を発表・制作し、一定の評価を受けているアーティストやプロデューサー(制作者)で、2006年度中にサバティカル(休暇・充電)期間を設け、海外の文化や他

分野を含む芸術などに触れながら、これまでの活動を振り返り、さらに今後の展開のヒントを得たいと考えている方を優先する。

I-2. 現代演劇・舞踊助成 ― 芸術創造

芸術創造活動 I

演劇界・舞踊界での活躍が期待される若手の芸術家/芸術団体に対し、経常費を含む年間の活動経費全般を対象に、その一部に対して助成金を交付(2006年度実績:300万円/件)。および希望者には公演稽古、ワークショップ開催の場として森下スタジオを提供。原則3年間にわたって助成を行なうが、継続の可否に関しては毎年見直す。対象は下記すべての条件を満たしている個人または団体とする。ただし、プロデュース団体の場合は中心となる芸術家(演出家、脚本家、振付家)が固定していることを条件とする。

- 申請時点で過去3回以上の公演実績がある
- 活動歴が15年未満
- 2005年度の支出規模が300万円以上である

芸術創造活動 II

「芸術創造活動 I」の助成期間を終了した団体を申請対象者とする特別な継続助成プログラム。経常費を含む年間の活動費全般を対象に、その一部に対して助成金を交付(2006年度実績:300万円/件)。および希望者には公演稽古、ワークショップ開催の場として森下スタジオを提供。原則3年間にわたって助成を行なうが、継続の可否に関しては毎年見直す。

若手奨励助成

「芸術創造活動 I」に申請した一次選考通過者の中から今後の活動が注目される若手に対し奨励金を付与する。

* * *

特別助成[非公募]

国内における現代演劇・舞踊以外の芸術・文化分野の活動を支援。

II. 国際交流プログラム

II-1. 知的交流

現代演劇・舞踊助成 — 知的交流活動

日本の現代演劇・舞踊芸術に関する会議・シンポジウムの開催、翻訳出版、上演を目的とする翻訳などを通じた日本文化の紹介に対する助成プログラム。対象者には企画経費の一部を助成(2006年度実績:50万円～70万円)し、希望者には会議等の会場として森下スタジオを提供。

翻訳出版助成[非公募]

日本の社会科学・人文科学や文学に関する文献を海外に継続的に紹介する活動および関連事業に対して資金援助する。

II-2. 芸術交流

現代演劇・舞踊助成 — 芸術交流活動 I: プロジェクト支援

演劇・舞踊芸術の国際交流を通じた創造活動の活性化、ならびに日本の舞台芸術の国際化を目的とした、国際共同作業および公演、あるいはその過程で行なわれるワークショップ等に対するプログラム。森下スタジオの提供のみ資金助成は非公募)。対象は、公演の主体となる芸術家/芸術団体、または企画をプロデュース/マネジメントする個人/団体。ただし、海外の芸術家/芸術団体が日本で公演を行なう場合は、日本側の受け入れ先が確定していることを条件とする。とくに日本の現代演劇・舞踊の紹介に継続的に取り組もうとする非営利機関との共同創造事業を優先的に支援する。

現代演劇・舞踊助成 — 芸術交流活動 II: 継続プロジェクト支援

演劇・舞踊の国際交流においてとくに重要な意義をもつと思われる2年以上の継続プロジェクトへの支援を目的とした助成プログラム。企画経費の一部に対して助成金を交付(2006年度実績:150万円～300万円)。希望者には公演稽古、ワークショップ開催の場として森下スタジオを提供。3年を上限として助成を行なうが、継続の可否に関しては毎年見直す。対象となるのは、日本に活動の拠点を置き、申請時点で国際交流関係の事業の実績をもつ個人/団体。プロデュース団体の場合は中心となる芸術家(演出家、脚本家、振付家)が固定していることを条件とする。

現代演劇・舞踊助成 — 芸術交流活動 F: 日仏舞踊交流プログラム

「フランス・ダンス・03」からの寄付を得て、フランスを拠点に活動する現代舞踊家の活動紹介を支援する助成プログラムを2005年より2007年まで実施。レクチャー/デモンストレーション、公演などに対し制作費の一部を助成(2006年度実績:60万円)。希望者には森下スタジオを提供。フランスを拠点として活動をする舞踊/振付家で、日本に滞在し、自作のプレゼンテーションなどを通じて日仏現代舞踊交流に寄与するアーティストもしくは事業を制作する担当者、劇場などを対象とし、とくに、日本ではまだあまり紹介されていないアーティストの活動を優先する。

芸術交流活動[非公募]

海外の非営利団体との継続的なパートナーシップに基づいた芸術創造活動、日本文化紹介事業、フェローシッププログラム等に対して資金を提供する。

■ 自主製作事業・共催事業(セゾンシアタープログラム)

自主製作事業としてセミナー、ワークショップ、シンポジウムの主催、ニュースレターの刊行などを行なう。

共催事業「セゾンシアタープログラム」では、現代演劇・舞踊の創造過程を支援し、かつ日本の舞台芸術界を活性化させるために非営利団体等と協力して創造性ある企画を実施。

Program Outline – 2006

■ GRANT PROGRAMS

The grant-making activities of the Saison Foundation consist of (I) national programs designed to activate the fields of contemporary Japanese theater and dance, and (II) international programs intended to promote mutual understanding between Japan and other nations/areas through intellectual and artistic exchange projects.

I. NATIONAL PROGRAMS

I-1. Contemporary Theater and Dance **– Creative Environment Improvement Program**

For Workshops, Conferences, Symposia, etc.

This program supports workshops, conferences, symposia, and other projects aimed to improve the infrastructure of the contemporary performing arts community in Japan (Range of grants given in this program in 2006: ¥300,000 – ¥1,500,000). Priority use of the Foundation's rehearsal facilities in Tokyo (Morishita Studio) may be awarded instead of grants depending on the nature of the project.

For the year 2006, the Foundation invited projects with the following purposes in particular:

- Training workshops for developing and enhancing directing, acting, choreographing, dancing, administrating, and technical skills
- Talent discovery/development programs by halls and performing spaces, etc.
- Conferences or symposia for promoting data and information sharing/disclosure systems within the performing arts

For Arts Management Studies

This category assists Japanese performing arts managers to go abroad and study arts administration at universities or other educational institutions, or to undertake internships at performing arts organizations outside of Japan by awarding scholarships up to ¥1,000,000. Applicants must have (a) more than three years of professional experience in the field of performing arts administration, and (b) approval from the educational institution or performing arts organization accepting him or her for a period of more than three months, and (c) a long-term plan on how to contribute toward the development of Japanese theater or dance by applying the skills and knowledge acquired through their studies or internship.

Sabbatical Programs

This category gives partial support to individuals who wish to travel abroad to come into contact with inter-cultural experiences by awarding fellowships up to ¥1,000,000. Applicants must have (a) a base in Japan; (b) more than five years of professional working experience in one of the following occupations: directing,

choreography, playwriting, performing arts criticism, or producing; and (c) plan to travel abroad for more than one month.

- Priority will be given to artists or producers who have been creating and presenting works continuously until the time of applying to this program, have an established reputation in their respective fields, and are considering to take a sabbatical leave during fiscal year 2006 to reconsider their past activities and receive inspiration for future activities through inter-cultural experiences.

I-2. Contemporary Theater and Dance **– Artistic Creativity Enhancement (ACE) Programs**

The aim of these general operating support programs are to allow artists and/or companies to concentrate on their artistic work by awarding long-term grants of between three to six years and priority use of Morishita Studio for rehearsals and creative work.

Artistic Creativity Enhancement (ACE) Program I

This program awards grants and priority use of Morishita Studio for three consecutive years as a rule to promising Japanese theater and dance artists/companies with an active history of less than fifteen years and whose expenditures for the previous fiscal year were or are expected to be over ¥3,000,000. (Grants given in this program in 2006: ¥3,000,000/company.)

Artistic Creativity Enhancement (ACE) Program II

Grants and priority use of Morishita Studio are awarded for another three years as a rule to grantees chosen among the companies who have completed the above program. (Grants given in this program in 2006: ¥3,000,000/company.)

Incentive Aid to Young Artists

Small subsidies are awarded to a chosen few among the young performing artists/companies who have applied to and passed the first screening of the ACE I program.

* * *

Special Project Support Program [designated fund program]

This program awards grants to cultural or artistic projects belonging to fields other than contemporary theater or dance.

Note: Applications to this program are not publicly invited.

II. INTERNATIONAL PROGRAMS

II-1. Intellectual Exchange Programs

Contemporary Theater and Dance – *Intellectual Exchange Program*

The Contemporary Theater and Dance – Intellectual Exchange Program supports conferences, symposia, translation/publication and other related projects that improve the visibility of contemporary Japanese theater and dance within the international performing arts community (Grants given in this program in 2006: ¥500,000- ¥700,000). Priority use of Morishita Studio is also awarded depending on the grantee's request.

Translation/Publication Project Program [designated fund program]

Financial support is provided to translation and publication projects of Japanese social science and humanities literature and to activities related to these areas.

Note: Applications to this program are not publicly invited.

II-2. Artistic Exchange Programs

Contemporary Theater and Dance – *Creative Exchange Program (Studio Award)*

The aim of this program is to stimulate international creative projects and to promote Japanese performing arts on a global scale, including collaboration projects and performances, and/or workshops held during the process of such activities (only Studio Awards are given under this program). Artists/companies organizing collaboration projects or performance tours, or individuals and organizations involved in the production and/or management of the above projects are eligible to apply to this program. Artists/companies based outside of Japan who are planning to conduct a tour in Japan are required to find a Japanese host organization before submitting an application. Priority will be given to collaboration projects with not-for-profit organizations outside of Japan that are committed to working with and presenting contemporary Japanese theater and dance artists/companies.

Contemporary Theater and Dance – *Creative Exchange Program – For Long-Term Projects*

A grant program that awards long-term (maximum length: three years) grants to international exchange projects in which contemporary Japanese theater or dance artists/companies are involved and require more than two years until completion. (Grants given in this program in 2006: ¥1,500,000 – ¥3,000,000). Priority use of Morishita Studio is also awarded upon request. Those eligible to apply to this program are (a) professional individuals or companies based in Japan in the field of performing arts, and (b) with a history of artistic achievements in the area of intercultural exchange

activities at the time of application. Producing companies applying to this program are required to have a fixed artist (playwright, director, choreographer) for the project.

Contemporary Theater and Dance – *Franco-Japanese Dance Exchange*

Thanks to the generous donation made to our Foundation from the <france danse 03> program, The Saison Foundation has started a three-year grant program from 2005 to 2007 that will support contemporary dance artists based in France who plan to visit and present their work in Japan. Grants will be given as partial support to performances, lectures, and/or demonstrations that will take place in Japan with the aim to introduce the works and activities of French contemporary dance artists. Priority use of Morishita Studio is also awarded upon request. (Grant given in this program in 2006: ¥600,000). Dancers and/or choreographers based in France who plan to stay in Japan and contribute to the enhancement of Franco-Japanese contemporary dance exchange through activities such as presenting their work in Japan are eligible to apply to this program. Producers/art managers and theater halls planning to present such projects may also apply. Priority will be given to projects featuring French artists who are relatively unknown in Japan.

Artistic Exchange Project Program [designated fund program]

This designated fund program supports activities by not-for-profit organizations outside of Japan with a continuous partnership with the Saison Foundation, including creative work by artists/companies, projects with the aim to familiarize Japanese culture to other nations, and fellowship programs.

Note: Applications to this program are not publicly invited.

■ SPONSORSHIP AND CO-SPONSORSHIP PROGRAMS

Apart from making grants, the Saison Foundation sponsors and organizes seminars, workshops, and symposia, and publishes a newsletter.

In order to support and enhance the creative process within contemporary theater and dance and to stimulate the performing arts scene in Japan, the Saison Foundation also organizes creative projects by working with artists/companies, not-for-profit organizations, and other groups under its co-sponsorship program known as the Saison Theater Program.

本年度の事業について

常務理事 片山正夫

本年度は、現代演劇・舞踊分野を中心に、57 件・総額 7407 万円の助成を行なった。また、共催事業を 4 件開催した。助成金額は昨年比とほぼ横ばいである。本年度期中に日本銀行は 6 年ぶりの利上げを行なったが、金利状況はまだ財団の投資利回りを改善する水準にはなく、助成金を増額できるまでにはまだ時間がかかりそうである。

さて当財団は国際交流の推進をミッションのひとつに掲げているが、演劇分野でこれを追求しようとした時、どうしても直面せざるを得ないのが翻訳の問題である。同じ翻訳でも、海外戯曲の日本語訳のほうは、坪内逍遙の時代からの長い苦闘の歴史があるが、日本の戯曲を他言語に移し変える試みについては、まだ試行錯誤の段階にあるといえる。

かつて当財団では 1999 年度から 3 力年にわたり、日本劇作家協会による「現代日本の劇作」シリーズの英訳出版事業に対して助成を行なった。本シリーズには、80 年代以降のものだけで 23 本の重要な戯曲が収められており、その刊行は、日本の現代演劇を世界に紹介するうえで、大きな意義をもつものであった。ただし、そこに収録された戯曲がそのまま上演台本として使えるわけではなく、実際の上演に至るまでには、さらに次の段階の作業が必要となる。とくに日本の作品が海外の俳優によって演じられる場合、戯曲に込められた意味やニュアンスを正確に伝えられるまでには、時間をかけたプロセスが必要とされる。

多くの日本演劇の英訳に携わってきたリアン・イングスルード氏は、当財団のニュースレターで、翻訳は「共通の要素がない 2 つのコンテキストの間で常に行なわれている転換」であり「言語学的な意味での『言葉』とはあまり関係のない作業」であると述べ、翻訳のプロセスに現場サイドを巻き込んでいくことの重要性を指摘した。^{註 1)}

当財団では同様の認識の下で、ロンドン・プッシュシアターで行なわれた日本の若手劇作家作品のドラマ・リーディング(2001 年度)、米国レイリー劇場で行なわれた坂手洋二作『みみず』のリーディング(2003 年度)に対して助成を行ない、外国人俳優による日本の現代戯曲への取組みを、これまでも支援してきた。本年度はその発展形として、土田英生作『その鉄塔に男たちはいるという』の翻訳と米国でのワークショップに対して助成したが、これはニューヨーク T B Gシアターでの、米国人演出家・俳優による公演として結実した。

またこのテーマをさらに追求するため当財団では、米国の非営利団体 US/Japan Cultural Trade Network of Arts Midwest との共催事業「日米現代劇作家・戯曲交流プロジェクト」を、本年度から 3 年間の予定で開始した。これは、日本の現代戯曲を海外での上演に結びつけることを企図したもので、全米の劇作家支援機関

であるプレイライツ・センター(ミネアポリス)と提携し、当地のガスリー・シアター、東京国際芸術祭と協力しながら展開するものである。初年度の本年は、演出家・劇作家の本谷有希子氏^{註 2)}をプレイライツ・センターへ派遣、彼女の作品である『乱暴と待機』(英訳題名: Vengeance Can Waitを翻訳リーディング公演を実施した。劇作家、演出家米国人)テキストの翻訳者そして日米双方のドラマターグ(学芸)の 2 週間に及ぶ共同作業は、文化的差異とコミュニケーション各々の職能の役割分担等、さまざまな問題をつきつけるものであり、当事者にとって時にフラストレーションを伴うものでもあった。^{註 3)} が、翻訳に伴うさまざまな問題は、こういった地道なプロセスの積み重ねによってしか解決しえないと考えるべきであろう。このプロジェクトでは今後、翻訳の成果を、リーディングだけでなく劇場での公演にも繋げていく計画である。

このほか助成事業については各プログラムのセクションをご参照いただきたい。事業報告の詳細については本年度より当財団ホームページ上で閲覧できるシステムを整えた。

なお、本年度は現代演劇・舞踊助成の審査にあたり、下記の方々にご協力をいただいた。

石井達朗(舞踊評論家)

稲田奈緒美(舞踊評論家)

國吉和子(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館客員教授)

堤 広志(編集者/演劇・舞踊ジャーナリスト)

新野守広(「シアターアーツ」編集委員/立教大学教授)

森山直人(京都造形芸術大学准教授/現代演劇論、批評)

(敬称略・肩書きは 2006 年 2 月現在)

また、アサヒビール芸術文化財団、株式会社クレディセゾンには、昨年度に引き続きご支援をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

註

1) 『viewpoint』No. 21。

2) 主宰する劇団「劇団、本谷有希子」は、2005 年度より[現代演劇・舞踊助成]芸術創造活動 I の助成対象団体である。

3) 『viewpoint』No. 37 に詳しく報告されている。

About Our Programs in 2006

Masao Katayama Managing Director

In 2006, the Saison Foundation supported fifty-seven projects and companies mostly in the fields of contemporary theater and dance, and expended a total of ¥74,070,000 for grants. It also co-sponsored four projects. The total amount of the grants was virtually identical to the previous year. The Bank of Japan raised the rate of interest during this fiscal year for the first time in six years. The situation of interest rates, however, has not been enough to improve the Foundation's investment yield, and it is unseemly that a rise in the amount of grants will become possible very soon.

One of the missions of the Saison Foundation is to promote international exchange, and in the field of theater the issue of translation cannot be avoided. Translation of foreign plays into Japanese has matured through its long history of struggles since the time of the author and playwright Shoyo Tsubouchi (1857-1935), who was also a scholar of English literature, but it can be said that translation of Japanese plays into other languages is still in its trial-and-error stage.

The Saison Foundation supported the Japan Playwrights Association's project for English translation and publication of a series of anthologies, *Half a Century of Japanese Theater*, for three years from 1999. The publication of the series, which included twenty-three significant plays that were written after the 1980s, was a significant contribution to international recognition of Japanese contemporary theater. Translations such as these that were included in the anthologies, however, are not actual working scripts that can be transformed immediately into productions, and further work is necessary before they become sufficient enough to be presented on stage. A long-term process is needed in order to find ways to communicate precise meanings and nuances, especially when foreign actors perform a Japanese play.

American theater actor, director and teacher Leon Ingulsrud, who has worked on many English translations of Japanese plays, wrote in our newsletter that the primary feature of translation is the transposition between "contexts with non equivalent elements" and has "very little to do with language in the linguistic sense," and emphasized the importance of involving practical elements within the translation process.¹⁾

With such an identical perspective in mind, the Saison Foundation has supported Japanese contemporary play projects involving foreign actors, such as the drama-reading project at The Bush Theatre in London entitled *Emerging Japanese Playwrights* in the UK (2001) and a drama reading of Yoji Sakate's *Mimizu/Night Crawlers* at The Reily Theater at Louisiana State University (2003). The latest development in this type of project that we supported was the translation of Hideo Tsuchida's *It is said the men are over* in The Steel Tower in 2006 and related workshops in the U.S., which culminated in a production by an American team of director and actors at the TBG Theatre in New York.

In order to pursue this theme further, the Foundation also launched the Japan-U.S. Contemporary Plays and Playwrights Exchange Project in 2006, which was co-sponsored by an American non-profit organization, US/Japan Cultural Trade Network of Arts

Midwest. This is a three-year project aimed to realize overseas productions of Japanese contemporary plays and is organized in cooperation with two institutions in Minneapolis - The Playwrights' Center, an organization that supports American playwrights, and The Guthrie Theater - and with the Tokyo International Arts Festival. In the first year, we sent director/playwright Yukiko Motoya,²⁾ to The Playwrights' Center for the translation and drama reading of her *Vengeance Can Wait* (original title: *Ranbo to Taiki*). During the two-week cooperative process, the members of this project, which included the playwright, an American director, the translator of the text, and Japanese and American dramaturges, confronted problems related to cultural differences and communication, and perception gaps in the functions of the involved members, which sometimes caused frustration among them.³⁾ Yet it can be said that problems related to translation can only be overcome through the accumulation of steady working processes like this one. Within this project, we hope to bring the results of this translation process not only to further drama reading sessions but also to full productions at U.S. theaters in the future.

For details on other programs, please see the sections in the following pages. Furthermore, we have started a database system within our website from this year in which details on our grant and studio awarded projects are disclosed to the public (in Japanese).

Finally, we would like to thank the following persons who assisted us during the selection process for the 2006 contemporary theater and dance grant and studio awards:

Tatsuro Ishii (Dance Critic)
Naomi Inada (Dance Critic)
Kazuko Kuniyoshi (Visiting Professor, the Theatre Museum of Waseda University)
Hiroshi Tsutsumi (Editor/Theater and Dance Journalist)
Morihiro Niino (Contributing Editor, "Theater Arts"/Professor, Rikkyo University)
Naoto Moriyama (Associate Professor of the Department of Performing Arts at Kyoto University of Art and Design/Theater Studies and Criticism)

(Titles are of February 2006)

We also received support as in 2005 from the Asahi Beer Arts Foundation and Credit Saison Co., Ltd. We would like to take this opportunity to express our deep gratitude to them.

Notes

- 1) The Saison Foundation newsletter *viewpoint*, Issue No.21.
- 2) Her company, "gekidan motoyayukiko," has been a grantee of our Contemporary Theater and Dance - Artistic Creativity Enhancement Program I since 2005.
- 3) A detailed report of this project was featured in *viewpoint*, Issue No.37.

I. 国内プログラム / NATIONAL PROGRAMS

I-1. 現代演劇・舞踊助成 ― 創造環境整備

創造環境整備プログラムでは、現代演劇・舞踊界の創造基盤に関わる問題解決・改善に向けての活動を支援することを目的としている。2006 年度は 22 件の事業を採択した。

ここ数年の傾向として、地域から舞台芸術の活性化のための興味深い申請事業が増えている。青森を拠点に活動する ARTizan の「劇場拠点創造プロジェクト」は、2004 年に青森市に設立された市民によるアートサポート集団。地元の演劇プロデュースユニット「渡辺源四郎商店」との協力のもと、地域市民や学生を巻き込みながら、わずか 4 カ月のあいだに、空き店舗を改装して「アトリエ 1007」という演劇のための小スペースをオープンさせ、さらに演劇ワークショップ 公演を実施した。その経緯での奮闘ぶりは、彼らのブログ「『劇空間』セルフ・ビルド 120 日間の挑戦、つまり空き店舗をアトリエにしようぞ大作戦」に詳しい(<http://atorie1007.exblog.jp/>)。また、高知演劇ネットワーク/演会が高知県の 9 つの劇団で結成された任意団体で、「演劇祭 KOCHI」の開催など、高知における演劇活動の充実を目的に活動している。助成事業は、劇団間の壁を乗り越え優秀な人材を集結

させ、高知から優れた作品の発信を試みることで、高知の演劇レベルの向上を図る企画。今年度は鳥取に拠点を構える演出家中島諒人氏(鳥の劇場)を招き、「TheaterLab. こうち Me ― 佐川町桜座プロジェクト」を実施した。さらに県内のみならず韓国公演も実施。県下の演劇シーンに刺激を与えているようだ。

地域間交流事業にも積極的な取り組みがみられる。荻野達也氏による「Producers meet Producers 2006 地域の制作者のための創造啓発ツアー」では、東京外の地域の民間の制作者を東京に招き、重要な演劇関係者や施設を訪問、演劇制作に関する知識やネットワークの拡充を目的とするツアーを実施した。札幌、盛岡、仙台、名古屋、広島、北九州、福岡の 7 都市から 2 名ずつの制作者が参加した。ここでの出会いをきっかけに次年度に向けて新たな地域間事業が続々と誕生している。また、TOKYOSCAPE は、東京を拠点とする 6 つの有志の劇団が京都に滞在、昨夏の準備、ワークショップのプレイベントを経て、夏に 2 週間のフェスティバルを実施した。予想していた以上に困難な状況があった一方で、獲得したものも多かったようだ。

今後も継続した交流を続けて欲しい。

アジアダンス会議は、ユネスコの傘下にある国際演劇協会が主催するアジア間の現代舞踊の情報交流を目的に隔年で開催されている会議。第 3 回にあたる本事業では、国家や国民、民族、地域を代表して参加者が発表するのではなく、参加者の個人の活動/体験を発表のベースにして会議が進められた。前回に比して一世代若いダンス関係者が招聘されていたこともあり、それぞれの「現代におけるダンス」から派生するさまざまな問題が率直に話し合われる対話の場が実現した。主催者から詳細な報告書が出版されているので、参照されたい。

その他、大阪・日本橋の小劇場インディペンデントシアターによる DVD 配布による新たな宣伝方法の開発、芸術家のヘルスケアへのサポートを目的に設立された NPO 法人 芸術家のくすり箱の活動などの新しい取り組みに助成を行なった。



京都芸術センター「演劇計画2006」
Theatre Project 2006 organized by Kyoto Art Center.



高知演劇ネットワーク/演会「TheaterLab. こうち Me ― 佐川町桜座プロジェクト」2007 年 2 月
TheaterLab.Kochi ME - Sakawa Town Hall SAKURAZA Project, February 2007.

現代演劇・舞踊助成 ― 創造環境整備
助成対象 22 件/助成総額: 16,600,000 円

■演劇教育

A-T 創坊

ポストドラマ演劇の実践ワークショップ

2006 年 4 月 1 日ー 12 月 29 日

東京、山口(森下スタジオ、にしすがも創造舎、山口
情報芸術センター)

300,000 円 スタジオ提供 25 日間

京都芸術センター/財団法人京都市芸術文化協
会

演劇計画 2006

2006 年 9 月 2 日ー 2007 年 1 月 14 日

京都(京都芸術センター)

1,000,000 円

高知演劇ネットワーク/演会

TheaterLab. こうち Me ― 佐川町桜座プロジ
ェクト

2007 年 2 月 5 日ー 2 月 18 日

高知(佐川町立桜座)

1,000,000 円

シアター・ジャパン・プロダクションズ

ニューヨーク・アクターズ・ワークショップ・イン・ト
ーキョー

2006 年 8 月 26 日ー 9 月 8 日

東京(森下スタジオ)

スタジオ提供 12 日間

特定非営利活動法人 シアタープランニングネッ
トワーク

ベラ・マーリン&アレキサンダー・デラメア in 演技
ワークショップ ― 21 世紀演劇のためのスタニス
ラフスキイ

2006 年 6 月 29 日ー 7 月 2 日

東京(森下スタジオ)

300,000 円 スタジオ提供 4 日間

社団法人 日本劇団協議会

フィリップ・ゴーリエ演劇ワークショップ

2006 年 7 月 24 日ー 8 月 4 日

東京(森下スタジオ)

スタジオ提供 12 日間

■舞踊教育

セッションハウス企画室

レジデンス・アーティスト・システム「育てて、外へ。」
プロジェクト

2006 年 4 月 1 日ー 2007 年 3 月 31 日

東京(セッションハウス)

1,000,000 円

Dance Company BABY-Q

Dance Company BABY-Q Workshop vol.2

2006 年 8 月 1 日ー 8 月 6 日

東京(森下スタジオ)

500,000 円 スタジオ提供 7 日間

■舞台芸術一般

特定非営利活動法人 ST スポット横浜

創造共同体 ― 契約アーティストのいる劇場 ―

2006 年 4 月 1 日ー 2007 年 3 月 31 日

神奈川、東京(ST スポット横浜、BankART 1929、森
下スタジオ、急な坂スタジオ)

1,000,000 円 スタジオ提供 30 日間

■情報交流

吾妻橋ダンスクロッシング実行委員会

吾妻橋ダンスクロッシング

2006 年 10 月 13 日ー 2007 年 3 月 9 日

東京(アサヒ・アートスクエア)

1,000,000 円 スタジオ提供 13 日間



セッションハウス企画室「レジデンス・アーティスト・システム『育てて、外へ。』プロジェクト」
Session House Residence Artists System by Session House Planning Office.

ARTizan

劇場拠点創造プロジェクト

2006 年 4 月 1 日ー 12 月 31 日

青森(アトリエ 1007)

1,000,000 円

インディペンデントシアター

インディペンデントシアター ロングランプロジェクト

2006 年 11 月 1 日ー 2007 年 3 月 26 日

大阪(インディペンデントシアター 1st、インディペン
ントシアター 2nd)

1,000,000 円

荻野達也

Producers meet Producers 2006 地域の

制作者のための創造啓発ツアー

2006 年 6 月 2 日ー 6 月 10 日

東京(森下スタジオ、にしすがも創造舎、こまばアゴラ
劇場、俳優座、世田谷パブリックシアター、ザ・スズナリ)

500,000 円

芸術家のくすり箱

芸術家のくすり箱

2006 年 4 月 1 日ー 2007 年 3 月 31 日

東京(森下スタジオ、芸能花伝舎、日本財団ビル、森
下文化センター)

1,500,000 円 スタジオ提供 6 日間

芸術分野海外研修サポートプロジェクト

芸術分野海外研修サポートプロジェクト

2006 年 4 月 1 日ー 2007 年 3 月 31 日

東京(跡見学園女子大学茗荷谷キャンパス、芸能花
伝舎)

1,000,000 円

ダンス・アンド・メディア・ジャパン

ダンス・アンド・メディア・ジャパン

2006 年 7 月 10 日ー 2007 年 3 月 12 日

東京、静岡、岡山(森下スタジオ、下田市田牛青少年
の家、ザイム、ノイエルイーナ・アサヒアートスクエア)

1,000,000 円 スタジオ提供 20 日間

ダンス・ワークショップ・リンク事務局

ダンス・ワークショップ・リンク



シアター・ジャパン・プロダクションズ「ニューヨーク・アク
ターズ・ワークショップ・イン・トーキョー」森下スタジオ、2006
年 8-9 月

NY Actors Workshop in Tokyo organized by Theater
Japan Productions at Morishita Studio, August-
September 2006.



シアタープランニングネットワーク「ベラ・マーリン&アレキ
サンダー・デラメア in 演技ワークショップ ― 21 世紀演劇
のためのスタニスラフスキイ」森下スタジオ、2006 年 6-7
月

Bella Merlin & Alexander Delamere in Acting
Workshop on Stanislavski for the 21st Century by
Theatre Planning Network at Morishita Studio, June-
July 2006.

2006年4月7日-5月14日
京都、福岡、東京、広島、愛媛、高知、大阪、宮城、高知(京都芸術センター、パピオピールーム、森下スタジオ、広島総合体育館、松山大学、ダンス・クリーム、近畿大学会館他)
1,000,000円

TOKYOSCAPE 実行委員会

TOKYOSCAPE

2006年7月26日-8月6日

京都(アトリエ劇研、人間座スタジオ、アートコンプレックス1928、須佐命舎)

1,500,000円 スタジオ提供14日間

日本国際パフォーマンス・アートフェスティバル(ニパフ)実行委員会

第11回ニパフ・アジア&中南米パフォーマンス・アート連続展+第3回アジア&中南米パフォーマンス・アート東京会議

2006年7月15日-8月1日

東京、愛知、長野、埼玉(森下スタジオ、新宿街頭、日本陶磁器センター、ネオンホール、石上寺)

スタジオ提供6日間

社団法人国際演劇協会 日本センター

ITI 第3回アジアダンス会議 — 流れる、切る、つながる、重なる

2007年2月6日-2月12日

東京(森下スタジオ)

スタジオ提供14日間

パフォーマンス・アート・インタラクティブ

アート・カンファレンス「GAZE — 目の中に私の顔がうつってる —」

2006年11月20日-12月22日

東京(あざみ野アートフォーラム、トキアートスペース、表参道画廊、ネコタロー)

1,000,000円

■留学・サバティカル

水沼 健

海外舞台公演および舞台芸術環境の視察

2006年5月4日-2007年5月2日

ベルリン、ニューヨーク、ジャカルタ、ジョクジャカルタ

1,000,000円



パフォーマンス・アート・インタラクティブ「アート・カンファレンス」GAZE — 目の中に私の顔がうつってる —
」東京、2006年11-12月

Art Conference X GAZE - I can see my face in your eyes - organized by Performance Art Interactive in Tokyo, November-December 2006.

I-1. Contemporary Theater and Dance – Creative Environment Improvement Program

The Creative Environment Improvement Program supports projects with the aim to improve the basic framework for creative activities in the field of contemporary theater and dance. In 2006, twenty-two projects were awarded grants.

In recent years, applications concerning interesting projects for activation of performing arts from regional communities are on the increase. ARTisan, which conducted "Theater Base Creation Project," is an art-support group operated by citizens that was established in Aomori City in 2004. In cooperation with Watanabe Genshiro Shoten, a local theater producing unit, and getting citizens and students of the region involved, ARTisan converted an untenanted store into a small space called "Atelier 1007" and organized theater workshops and performances there within only four months. Their effortful process is thoroughly reported in their weblog, *120 Days of Self-Building "Drama Space" or the Let's-Change-a-Vacant-Store-into-an-Atelier Project*. KOCHI THEATRE NETWORK/enkai is a voluntary association formed by nine theater companies in Kochi that aims to enrich theater activities in the prefecture through projects such as "Theatre Festival KOCHI". The project to which we awarded a grant was a program aimed to improve the standard of theater of Kochi by bringing together talented people from different theater companies and producing excellent theatrical pieces created in Kochi. In 2006, Makoto Nakashima, the artistic director of BIRD Theatre Company TOTTORI, was brought in and organized "TheaterLab. KochiME - Sakawa Town Hall SAKURAZA Project." The project led not only to performances in the prefecture, but also to a tour in South Korea. It seems that the project has been stimulating the theater scene of the prefecture.

Projects for interregional exchange were also active. In "Producers meet Producers 2006: Impressive 3 days for Regional Producers," a project organized by Tatsuya Ogino, producers working for private regional theater companies were invited to a tour of Tokyo in order to enhance their knowledge on theater production and for expanding networks, and visited important people and institutions in theater. Two

producers each from Sapporo, Morioka, Sendai, Nagoya, Hiroshima, Kita-Kyushu, and Fukuoka participated in this tour, which has triggered a lot of new interregional projects that have begun one after another. Following preparations and pre-festival workshops in the summer 2005 to promote Tokyo-based theater to the theater community in Kyoto, six Tokyo theater companies based involved in the TOKYOSCAPE project voluntarily stayed in Kyoto and organized a two-week festival in the summer 2006 there. It seems that the experience was fruitful for them, though they had confronted many difficulties than they had originally expected. We hope this kind of exchange between regions will continue.

"Asian Dance Conference" is a conference for inter-Asia data sharing and communication regarding contemporary dance and is organized every other year by the International Theatre Institution (ITI), an organization affiliated with UNESCO. The third conference focused on presentations based on the participants' individual activities and experiences rather than representing one's nation, people, ethnic group, or region. This, and the fact that people from the international dance community belonging to a younger generation than the previous conference were invited to the 2006 event contributed to creating an opportunity for communication in which each participant's opinions on various issues deriving from the theme of "dance in the contemporary world" were discussed. Further information on this conference can be found in a detailed report published by the organizer.

In addition to these projects, we supported other developments such as a new publicity method for theater through the distribution of DVDs by a small theater in Osaka called in → dependent theater, and activities of Total Health Care for Artists Japan, a non-profit organization that has been established to support health care of artists.



「吾妻橋ダンスクロッシング」東京、2006 年 10 月
 × Azumabashi Dance Crossing ㄒ in Tokyo, October 2006.



ARTizan「劇場拠点創造プロジェクト」青森、2006 年
 Theater Base Creation Project by ARTizan in Aomori, 2006.



荻野達也「Producers meet Producers 2006 地域の制作者のための創造啓発ツアー」東京、2006 年 6 月
 Producers meet Producers 2006 Impressive 3 days for Regional Producers by Tatsuya Ogino in Tokyo, June 2006.

Contemporary Theater and Dance – Creative Environment Improvement Program

22 Grantees / Total appropriations:
 ¥16,600,000

■ Workshops and Educational Projects

[Theater/Drama]

Association of Japanese Theatre Companies
 The Workshop of Philippe Gaulier
 July 24 - August 4, 2006
 Tokyo (Morishita Studio)
 Studio Rental: 12 days

A-T creative workshop
 Practical workshop for post dramatics theater
 April 1 - December 29, 2006
 Tokyo, Yamaguchi (Morishita Studio, Nishisugamo Arts Factory, YCAM)
 ¥300,000 Studio Rental: 25 days

KOCHI THEATRE NETWORK/enkai
 TheaterLab. Kochi ME – Sakawa Town Hall
 SAKURAZA Project
 February 5 - February 18, 2007
 Kochi (Sakawa Town Hall SAKURAZA)
 ¥1,000,000

Kyoto Art Center/Kyoto Arts Culture Foundation
 Theatre Project 2006
 September 2, 2006 - January 14, 2007
 Kyoto (Kyoto Art Center)
 ¥1,000,000

Theatre Japan Productions, Inc.
 New York Actors Workshop in Tokyo
 August 26 - September 8, 2006
 Tokyo (Morishita Studio)
 Studio Rental: 12 days

Theatre Planning Network (NPO)
 Bella Merlin & Alexander Delamere in Acting Workshop on Stanislavski for the 21st Century
 June 29 - July 2, 2006
 Tokyo (Morishita Studio)
 ¥300,000 Studio Rental: 4 days

[Dance]

Dance Company BABY-Q
 Dance Company BABY-Q Workshop vol. 2
 August 1 - August 6, 2006
 Tokyo (Morishita Studio)

¥500,000 Studio Rental: 7 days

Session House Planning Office
 Session House Residence Artists System
 April 1, 2006 - March 31, 2007
 Tokyo (Session House)
 ¥1,000,000

[General Performing Arts]

ST Spot Yokohama
 the creation company plus
 April 1, 2006 - March 31, 2007
 Kanagawa, Tokyo (ST Spot Yokohama, Bank-ART1929, Morishita Studio, Steep Slope Studio)
 ¥1,000,000 Studio Rental: 30 days

[Data Sharing/Communication]

ARTizan
 Theater Base Creation Project
 April 1 - December 31, 2006
 Aomori (Atelier1007)
 ¥1,000,000

Azumabashi Dance Crossing Committee
 Azumabashi Dance Crossing
 October 13, 2006 - March 9, 2007
 Tokyo (Asahi Art Square)

¥1,000,000 Studio Rental: 13 days

Dance and Media Japan
 Dance and Media Japan
 July 10, 2006 - March 12, 2007
 Tokyo, Shizuoka, Okayama (Youth Center of Tohji, ZAIM, Noie Ruina, Asahi Art Square)
 ¥1,000,000 Studio Rental: 20 days

Dance Workshop Link Office
 Dance Workshop Link
 April 7 - May 14, 2006
 Kyoto, Fukuoka, Tokyo, Hiroshima, Ehime, Osaka, Miyagi (Kyoto Art Center, Papio Bee Room, Morishita Studio, Hiroshima Prefectural Sports Center, Matsuyama University, Dance Cream, Kinki University Kaikan, Kimachi-doori Shimin Center Hall)
 ¥1,000,000

in → dependent theatre
 in → dependent theatre Longrun Project
 November 1, 2006 - March 26, 2007
 Osaka (Independent Theater 1st and 2nd)
 ¥1,000,000

Japan Art Manager Study Abroad Support Project
 United Fellows of the Arts
 April 1, 2006 - March 31, 2007
 Tokyo (Atomi University, Geino Kadensha)



TOKYOSCAPE 京都公演、2006 年 7-8 月
 TOKYOSCAPE in Kyoto, July-August 2006.

¥1,000,000

Japan Center of the International Theatre Institute

ITI 3rd Asian Dance Conference
February 6 - February 12, 2007
Tokyo (Morishita Studio)
Studio Rental: 14 days

Nippon International Performance Art Festival (NIPAF) Executive Committee

11th NIPAF Asia & Latin America Performance Art Series + 3rd Asia & Latin America Performance Tokyo Meeting
July 15 - August 1, 2006
Tokyo, Aichi, Nagano, Saitama (Morishita Studio, Shinjuku Street, Japan Pottery Center, Neon Hall, Sekijouji)
Studio Rental: 6 days

Tatsuya Ogino

Producers meet Producers 2006 Impressive 3 days for Regional Producers
June 2 - June 10, 2006
Tokyo (Morishita Studio, Nishi-sugamo Arts Factory, Komaba Agora Theater, Haiyu-za Theater, Setagaya Public Theatre, The Suzunari)
¥500,000

Performance Art Interactive

Art Conference "GAZE - I can see my face in your eyes -"
November 20 - December 22, 2006
Tokyo (Art Forum Azamino, Toki Art Space, Gallery Omotesando, Nekotaro)



「ダンス・ワークショップ・リンク」京都、2006年4月
Dance Workshop Link in Kyoto, April 2006.

¥1,000,000

TOKYOSCAPE

TOKYOSCAPE
July 26 - August 6, 2006
Kyoto (Atelier GEKKEN, Studio Ningenzu, ART COMPLEX 1928, SUSAMEISHA)
¥1,500,000 Studio Rental: 14 day

Total Health Care for Artists Japan

Total Health Care for Artists Japan
April 1, 2006 - March 31, 2007
Tokyo (Morishita Studio, Geino Kadensha, The Nippon Zaidan Building, Morishita Bunka Center)
¥1,500,000 Studio Rental: 6 days

[Arts Management Scholarship & Sabbatical Programs]

Takeshi Mizunuma

To see and grasp the theatrical situations in foreign countries
May 4, 2006 - May 2, 2007
Berlin, New York, Jakarta, and Jogjakarta
¥1,000,000



「Dance Company BABY-Q Workshop vol.2」森下スタジオ、2006年8月
Dance Company BABY-Q Workshop vol.2 at Morishita Studio, August 2006.

**I-2. 現代演劇・舞踊助成
—— 芸術創造活動**

芸術団体に対し複数年にわたって運営助成を行なう本プログラムでは、現代演劇・舞踊界での活躍が今後期待される若手と、次段階としてさらに国際的な活躍が期待される中堅の芸術団体の育成を目的とし、芸術創造活動ⅠとⅡの2段階(原則としてそれぞれ3年間の継続助成)で、助成金の交付および森下スタジオの提供による支援を行なっている。

本年度は芸術創造活動Ⅰの助成対象者として、演劇のマレピトの会とチェルフィッチュが新たに選抜された。また2003年度にStudy of Live works 発条トで芸術創造活動Ⅰを終了した舞踊のAbsTが芸術創造活動Ⅱに採択され、前年度からのⅠ、Ⅱの継続助成をあわせると9団体への助成を行なった。

マレピトの会は、岸田戯曲賞をはじめ劇作家として数々の受賞歴をもつ松田正隆が、自身の過去の戯曲を離れ、これまでとは異なる舞台作品を創造するために2003年に設立した集団。舞台芸術におけるリアリティとは何かを徹底して考え、演劇でしか表現し得ない作品を模索し、創作する。今年度は、活動を始めて以来3年間の集大成となった『アウトダフェ』を兵庫、東京で上演し、好評を得た。

チェルフィッチュは、現代にフィットした演劇を新たな手法で創造することを目指して1997年に結成された岡田利規のソロユニット。STスポット横浜を中心に活動してきた。「超リアル口語」「ノイズーな身体性」と呼ばれる表現スタイルをもつ。「チェルフィッチュ」とは、英語で自分本位という意味のセルフフィッシュ(selfish)を幼児語化した造語であり、現代の日本——とくに東京——の社会と文化の特性を表わす。今年度は、これまでの活動の集大成といえるエンジョイを新国立劇場で上演し、論議を呼んだ。

¥1,000,000

Japan Center of the International Theatre Institute

ITI 3rd Asian Dance Conference
February 6 - February 12, 2007
Tokyo (Morishita Studio)
Studio Rental: 14 days

Nippon International Performance Art Festival (NIPAF) Executive Committee

11th NIPAF Asia & Latin America Performance Art Series + 3rd Asia & Latin America Performance Tokyo Meeting
July 15 - August 1, 2006
Tokyo, Aichi, Nagano, Saitama (Morishita Studio, Shinjuku Street, Japan Pottery Center, Neon Hall, Sekijouji)
Studio Rental: 6 days

Tatsuya Ogino

Producers meet Producers 2006 Impressive 3 days for Regional Producers
June 2 - June 10, 2006
Tokyo (Morishita Studio, Nishi-sugamo Arts Factory, Komaba Agora Theater, Haiyu-za Theater, Setagaya Public Theatre, The Suzunari)
¥500,000

Performance Art Interactive

Art Conference "GAZE - I can see my face in your eyes -"
November 20 - December 22, 2006
Tokyo (Art Forum Azamino, Toki Art Space, Gallery Omotesando, Nekotaro)



「ダンス・ワークショップ・リンク」京都、2006年4月
Dance Workshop Link in Kyoto, April 2006.

¥1,000,000

TOKYOSCAPE

TOKYOSCAPE
July 26 - August 6, 2006
Kyoto (Atelier GEKKEN, Studio Ningenzu, ART COMPLEX 1928, SUSAMEISHA)
¥1,500,000 Studio Rental: 14 day

Total Health Care for Artists Japan

Total Health Care for Artists Japan
April 1, 2006 - March 31, 2007
Tokyo (Morishita Studio, Geino Kadensha, The Nippon Zaidan Building, Morishita Bunka Center)
¥1,500,000 Studio Rental: 6 days

[Arts Management Scholarship & Sabbatical Programs]

Takeshi Mizunuma

To see and grasp the theatrical situations in foreign countries
May 4, 2006 - May 2, 2007
Berlin, New York, Jakarta, and Jogjakarta
¥1,000,000



「Dance Company BABY-Q Workshop vol.2」森下スタジオ、2006年8月
Dance Company BABY-Q Workshop vol.2 at Morishita Studio, August 2006.

**I-2. 現代演劇・舞踊助成
—— 芸術創造活動**

芸術団体に対し複数年にわたって運営助成を行なう本プログラムでは、現代演劇・舞踊界での活躍が今後期待される若手と、次段階としてさらに国際的な活躍が期待される中堅の芸術団体の育成を目的とし、芸術創造活動ⅠとⅡの2段階(原則としてそれぞれ3年間の継続助成)で、助成金の交付および森下スタジオの提供による支援を行なっている。

本年度は芸術創造活動Ⅰの助成対象者として、演劇のマレピトの会とチェルフィッチュが新たに選抜された。また2003年度にStudy of Live works 発条トで芸術創造活動Ⅰを終了した舞踊のAbsTが芸術創造活動Ⅱに採択され、前年度からのⅠ、Ⅱの継続助成をあわせると9団体への助成を行なった。

マレピトの会は、岸田戯曲賞をはじめ劇作家として数々の受賞歴をもつ松田正隆が、自身の過去の戯曲を離れ、これまでとは異なる舞台作品を創造するために2003年に設立した集団。舞台芸術におけるリアリティとは何かを徹底して考え、演劇でしか表現し得ない作品を模索し、創作する。今年度は、活動を始めて以来3年間の集大成となった『アウトダフェ』を兵庫、東京で上演し、好評を得た。

チェルフィッチュは、現代にフィットした演劇を新たな手法で創造することを目指して1997年に結成された岡田利規のソロユニット。STスポット横浜を中心に活動してきた。「超リアル口語」「ノイズーな身体性」と呼ばれる表現スタイルをもつ。「チェルフィッチュ」とは、英語で自分本位という意味のセルフフィッシュ(selfish)を幼児語化した造語であり、現代の日本——とくに東京——の社会と文化の特性を表わす。今年度は、これまでの活動の集大成といえるエンジョイを新国立劇場で上演し、論議を呼んだ。

I-2. Contemporary Theater and Dance – Artistic Creativity Enhancement (ACE) Programs

AbsTは、Study of Live works 発条トの主宰でもある白井剛の創作活動を基盤として活動するプロジェクト。とくに白井剛の振付作品として映像、音楽その他のメディアとの共同作業による作品創造を行ない、白井の構成・演出・振付によるダンス作品、自身のソロ作品、白井自身が映像を撮影し創り上げるビデオ・ダンスの制作などを展開。今年度は、トヨタコレオグラフィーアワードでソロ作品、『質量slide,&.』を上演し、「次代を担う振付家賞」を受賞した。

継続助成が決まったもののうち、3団体が本年度で助成最終年度を迎えた。芸術創造活動Ⅰでは、舞踊のBATIKが国内外でのツアーを中心に、海外のカンパニーとの共同創造等も行ない、今年度は新作『ペンダントイヴ』を発表した。また主宰黒田育世の振付家、ダンサーとしての活動も充実していた。芸術創造活動Ⅱでは、演劇の指輪ホテルが今年度、『CANDIES – girlish hardcore』の北米ツアーで本格的なアメリカデビューを果たし、舞踊のレニ・バスソはとくに海外での活動が充実しており、数多くの海外ツアーや共同創造に取り組んだ。本年度の活動概要については後述のデータ編を参照されたい。

また、2004年度より開始した、今後の活動が期待される若手アーティストへの支援策の一環として、芸術鑑賞やワークショップ参加などの研修を奨励する若手奨励助成は、2006年度も引き続き行なった。今年度は、演劇分野では、ニットキャップシアターのごまのはえ、Port Bの高山明、シベリア少女鉄道の土屋亮一、五反田団の前田司郎、舞踊分野では金魚の鈴木ユキオ、Dance Company BABY-Qの東野祥子に対し、奨励金を付与した。

The Artistic Creativity Enhancement (ACE) Programs, which offer operating support to theater and dance companies on a multi-year basis through grants and priority use of Morishita Studio, are divided into two levels (basically three years for each level). The first level, Program I, is designed to support the young generation of artists whose activities are expected to make an impact on the fields of contemporary Japanese theater or dance in the future; Program II is for the further development of full-fledged companies which are expected to become active within the international performing arts community.

In 2006, two theater companies, marebitonokai and chelfitsch, were newly selected as ACE Program I grantees, and AbsT, a dance company that had completed ACE Program I as the company known as Study of Live works BANETO in 2003, was selected as an ACE Program II grantee. A total of nine companies, including those that had been selected last year, were given support under both levels of these programs.

Masataka Matsuda, a playwright who has won the Kishida Drama Award and many other awards, established marebitonokai in 2003 to remove himself from the plays that he had written in the past and to produce new work that differ from them. The company pursues and creates what only theater can express by thoroughly examining what the reality of performing arts could be. *Auto-da-fe*, a new work that showed what the company had accomplished within three years since its establishment, was presented and well received in Hyogo and Tokyo in 2006.

Toshiki Okada launched his solo unit, chelfitsch, in 1997 with the aim to create theater in consistency with contemporary society through new methods and has worked mainly at ST Spot, a small theater in Yokohama. Okada's style has been acknowledged as "hyper-realistic colloquialism" and having a "noisy corporeality." The name chelfitsch is a coinage that comes from baby-talk like mispronunciation of the English word "selfish" and represents the character of the infantile and self-centered society and culture of today's Japan, especially that of Tokyo. In 2006, chelfitsch presented *Enjoy*, a new play that could be regarded

as its highest achievement and eventually stimulated arguments in Japan, at the New National Theatre.

AbsT is a project based on the works by Tsuyoshi Shirai, who is also the artistic director of Study of Live works BANETO. The project features Shirai's choreographic creations in collaboration with music and other media, such as dance pieces that are arranged, directed, and choreographed by Shirai, his solo pieces, and video dance work with original video images shot by Shirai himself. This year, AbsT presented Shirai's solo piece, *Mass, slide, &.*, at the Toyota Choreography Award competition and won the Next Age Choreographer Award.

Among the grant recipients since the previous years, the following three companies completed their grant-receiving terms in 2006. BATIK, a dance company that was a grantee of Program I, carried out domestic and international tours as well as collaborative creations with foreign companies, and presented a new piece, *Pendant Eve*, in 2006. Activities by Ikuyo Kuroda, the company's artistic director, as an individual choreographer and dancer were also fruitful. Yubiwa Hotel, a grantee of Program II, made its formal debut in the US presenting *CANDIES – girlish hardcore* during its North American tour in 2006. Leni-Basso, also a grantee of Program II, was especially active overseas carrying out numerous international tours and creative collaboration projects. Details on the activities of these companies in 2006 are listed in the following pages.

The Saison Foundation also continued to operate a grant program that we started in 2004 as part of our scheme to support young promising artists: a program that encourages them to have opportunities to see and appreciate works of art and/or to participate in workshops. In 2006, grants were given to Gomanohae of Knit Cap Theater, Akira Takayama of Port B, Ryoichi Tsuchida of Siberia Shojō Tetsudo, and Shiro Maeda of Gotandadan in the field of theater, and to Yukio Suzuki of Kingyo and to Yoko Higashino of BABY-Q in the field of dance.

現代演劇・舞踊助成 ― 芸術創造活動 I
助成対象 6 件 / 助成総額 18,000,000 円

Contemporary Theater and Dance – Artistic Creativity Enhancement Program I
6 Grantees / Total appropriations: ¥18,000,000

マレビトの会[演劇/京都]
marebitonokai [theater/Kyoto]

2006 年度より
From 2006



『アウトダフェ』兵庫公演、2006 年 9 月
Auto-da-fe in Hyogo, September 2006.



松田正隆
Masataka Matsuda

主宰: 松田正隆 (劇作家・演出家)
制作: 橋本裕介
artistic director: Masataka Matsuda
(playwright, director)
producer: Yusuke Hashimoto
gravitational_h@ybb.ne.jp
http://marebito.gekken.net

- 継続助成対象期間
2006 年度から 2008 年度まで
- 2006 年度の助成内容
年度: 2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日
金額: 3,000,000 円
- 2006 年度のおもな活動
[公演活動]
06 年 5 月『パライゾノート/船福本』(京都)
9、12 月『アウトダフェ』(兵庫、東京)

- Grant-receiving term
From 2006 to 2008
- Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000
- Major activities during fiscal year 2006
[Performances]
May 2006: *Paraiso Note*, *THE SHIP-GIRL*
FUKUMOTO in Kyoto
September, December: *Auto-da-fe* in Hyogo, Tokyo



『体と関係のない時間』京都公演、2006 年 9 月 撮影：福森クニヒロ
Feeling the Mind, incorporeal time in Kyoto, September 2006. Photo: Kunihiro Fukumori



岡田利規 撮影：佐藤暢隆
Toshiki Okada. Photo: Nobutaka Sato

主宰：岡田利規(劇作家・演出家)
制作：中村 茜
artistic director: Toshiki Okada (playwright,
director)
producer: Akane Nakamura

info@chelfitsch.net
http://chelfitsch.net

■継続助成対象期間

2006 年度から 2008 年度まで

■2006 年度の助成内容

年度：2006 年 4 月 1 日ー 2007 年 3 月 31 日
金額：3,000,000 円
スタジオ提供(2006 年 6 月から 2007 年 5 月までの
期間)1 日間

■2006 年度のおもな活動

[公演活動]

06 年 7 月：東京大学表象文化論学会参加公演『ク
ーラー』
8 月大阪ショートプレイフェス参加公演『ズレスポンス』
(ほうほう堂×チェルフィツチュ)
9 月：京都芸術センター『抽象再訪』参加公演『体
と関係のない時間』
12 月『エンジョイ』(新国立劇場)
07 年 2 月『耳かき』(ほうほう堂×チェルフィツチュ)
3 月：アイホール・ワークショップ公演、ベケット生誕
100 周年記念フェス ベケットラジオ『カスカンド』

[その他]

06 年 5 月：日本文学会参加、ワークショップ(東京)、
春期ワークショップ(神奈川)
6 月：ドイツワールドカップ記念劇作家フェスに日本代
表として参加
7 月：慶應義塾大学で講義
8 月：夏期ワークショップ(神奈川)
9 月『新潮』に小説「私の場所の複数」を発表
10 月：横浜アートプラットフォーム「急な坂スタジオ」
レジデンスアーティストに決定、アイホールにて定期
ワークショップ開始(08 年 3 月まで)

■Grant-receiving term

From 2006 to 2008

■Details on support during fiscal year 2006

Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000
Studio Rental (between June 2006 till May 2007):
1 day

■Major activities during fiscal year 2006

[Performances]

July 2006: Performance of *the Air conditioner*
at Association of Culture and Representations,
University of Tokyo
September: Performance of *Freeing the Mind,*
incorporeal time at Kyoto Art Center
December: *Enjoy* at the New National Theater,
Tokyo
March 2007: *Cascando* (written by Samuel
Beckett) at Tokyo International Arts Festival 2007

[Other Projects]

September 2006: Toshiki Okada published a
novel "A Place of My Own" in *Shincho* magazine
October: Selected as a residential artist at
Yokohama Art Platform "Steep Slope Studio"



『るつぽ』2006 年
The Crucible, 2006



三浦 基
Motoi Miura

主宰: 三浦 基 (演出家)
制作: 田嶋結菜
artistic director: Motoi Miura (director)
producer: Yuna Tajima
yunat@chiten.org
http://www.chiten.org

■継続助成対象期間
2005 年度から 2007 年度まで

■2006 年度の助成内容
年度: 2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日
金額: 3,000,000 円

■2006 年度のおもな活動

[公演活動]

06 年 5、6、9 月: 第 11 回公演『るつぽ』(Shizuoka 春の芸術祭参加公演、京都公演、とっとりパフォーミングアーツ 2006 参加公演、カイロ国際実験演劇祭参加公演)
10 月: 吾妻橋ダンスクロッシング参加公演『話セバ解カル』
07 年 2 月: 第 12 回公演『ワーニャ伯父さん』(京都、香川)

■Grant-receiving term
From 2005 to 2007

■Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000

■Major activities during fiscal year 2006

[Performances]

May, June, and September 2006: Chiten vol. 11 *The Crucible* at Shizuoka Spring Art Festival, in Kyoto, at Tottori Performing Arts 2006, at Cairo International Theatre Festival
October: *Hanaseba Wakaru (If you can talk we will understand)* at Azumabashi Dance Crossing in Tokyo
February 2007: Chiten vol. 12 *Uncle Vanya* in Kyoto and Kagawa



『遭難、』東京公演、2006 年 10 月 撮影：引地信彦
SOUNAN, (Disaster) in Tokyo, October 2006. Photo: Nobuhiko Hikiji



本谷有希子
Yukiko Motoya

主宰：本谷有希子（劇作家・演出家）
制作：寺本真美
artistic director: Yukiko Motoya (playwright,
director)
producer: Mami Teramoto
gekidan@motoyayukiko.com
http://www.motoyayukiko.com

■継続助成対象期間
2005 年度から 2007 年度まで

■2006 年度の助成内容
年度：2006 年 1 月 1 日ー 2006 年 12 月 31 日
金額：3,000,000 円
スタジオ提供（2006 年 6 月から 2007 年 5 月までの
期間）31 日間

■2006 年度のおもな活動

[公演活動]
06 年 5 月：番外公演『劇団、本谷有希子（アウェー）
密室彼女』（東京）原案：乙一、脚本・演出：本谷有
希子
10 月：日本劇団協議会・創作劇奨励公演・劇団、本
谷有希子第 11 回公演『遭難、』（東京）

[その他]
06 年 7 月：セゾン文化財団共催事業「日米現代劇
作家・戯曲交流プロジェクト」に参加、小説『生きて
るだけで、愛』が第 135 回芥川賞にノミネート
07 年 1 月：鶴屋南北戯曲賞を受賞

■Grant-receiving term
From 2005 to 2007

■Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: January 1, 2006 - December 31, 2006
Grant: ¥3,000,000
Studio Rental (between June 2006 till May 2007):
31 days

■Major activities during fiscal year 2006

[Performances]
May 2006: Extra performance, gekidan
motoyayukiko (AWAY) *Mi-shitsu-Kanojo (She is
in a Closed room)* in Tokyo / Original idea: Otsu-
ichi, Script and Direction: Yukiko Motoya
October: gekidan motoyayukiko 11th act.
SOUNAN, (Disaster) in Tokyo

[Other Activity]
July 2006: Yukiko Motoya participated in Saison
Theater Program: Japan-U.S. Contemporary
Plays and Playwrights Exchange Project at The
Playwrights' Center, Minneapolis



「山田うん×平野公崇」東京公演、2006 年 5 月 撮影：斉藤巧一郎
Yamada Un × Masataka Hirano in Tokyo, May 2006. Photo: Koichiro Saito



山田うん 撮影：鹿島聖子
Un Yamada. Photo: Shoko Kashima

主宰：山田うん(振付家・ダンサー)
制作：菊丸喜美子
artistic director: Un Yamada (choreographer,
dancer)
producer: Kimiko Kikumaru
kikumaru@cancancan.co.jp
<http://www1.ocn.ne.jp/~yaun/>

■継続助成対象期間
2005 年度から 2007 年度まで

■2006 年度の助成内容
年度：2006 年 4 月 1 日ー 2007 年 3 月 31 日
金額：3,000,000 円
スタジオ提供(2006 年 6 月から 2007 年 5 月までの
期間)21 日間

■2006 年度のおもな活動

[公演活動]
06 年 5 月：山田うん×平野公崇(東京)
6、10 月『ワン◆ピース』『W. i. f. e.』東日本地域巡回
公演(宮城、茨城、北海道)
7 月『W. i. f. e.』インドネシア公演、『ワン◆ピース』ギ
リシャ公演
9 月：北九州芸術劇場主催・ダンスラボ 2006
『BARBABAR』
07 年 1 月『ひび』Co. 山田うん×deepblue 国際共
同制作公演(東京、ベルギー 3 都市)
3 月：Co. 山田うん×いわき市民共同製作公演

[その他]
ワークショップ(山口、東京、神奈川、石川)

■Grant-receiving term
From 2005 to 2007

■Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000
Studio Rental (between June 2006 till May 2007):
21 days

■Major activities during fiscal year 2006

[Performances]
May 2006: Co production and performance with
Masataka Hirano (saxophonist) in Tokyo
June, October: *One ◆ Piece, W. i. f. e.* East Japan
Tour in Miyagi, Ibaraki, Hokkaido
July: *W. i. f. e.* at Indonesian Dance Festival 2006 /
One ◆ Piece at Patras 2006 in Greece
September: Dance LABO 2006 *BARBABAR* at
Kitakyushu Performing Arts Center
January 2007: *Hibi* premiere (International co
production and performance with deepblue) in
Tokyo
March: Co production and performance with
citizens of Iwaki in Fukushima.

[Other Projects]
Workshops in Yamaguchi, Tokyo, Kanagawa,
Ishikawa



黒田育世
Ikuyo Kuroda

主宰: 黒田育世(振付家・ダンサー)
制作: 高樹光一郎
artistic director: Ikuyo Kuroda
(choreographer, dancer)
producer: Koichiro Takagi
info@batik.jp
http://batik.jp/

■継続助成対象期間
2004 年度から 2006 年度まで

■2006 年度の助成内容
年度: 2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日
金額: 3,000,000 円
スタジオ提供 (2006 年 6 月から 2007 年 5 月までの
期間) 105 日間

■2005 年度のおもな活動

[公演活動]

06 年 4 月新作ワークインプログレスショーイング(岡山)
7 月: トライアル vol.3(森下スタジオ)
8-9 月: 朝日舞台芸術賞受賞記念・キリンドダンスサポ
ート公演『SHOKU』(神奈川、兵庫、新潟、高知)
9 月オーストラリア-日本ダンスエキスチェンジ(AJdx)
2006(オーストラリア 2 都市)
10 月: トライアル vol.4(森下スタジオ)

[黒田の個人活動]

06 年 4 月: 舞踊批評家協会賞受賞、『モニカモニカ
天領』公演(岡山)
5 月私の恋人〜暇さえあれば体当たり』公演(東京)、
「Video dance 2006」にて『ラストパイ』上映
7 月、10-12 月、07 年 1-2 月: ジョセフ・ナジ振付『遊
* ASOBU』にダンサーとして参加(フランスにて初演、
ヨーロッパツアー、日本公演)
7 月『モニカ モニカ モニカ 広島』公演



『SHOKU』撮影: 清水俊洋
SHOKU. Photo: Toshihiro Shimizu

■ Grant-receiving term
From 2004 to 2006

■ Details on support during fiscal year 2006

Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000
Studio Rental (between June 2006 till May 2007):
105 days

■ Major activities during fiscal year 2006

[Performances]

April 2006: Work in progress showing in Okayama
July: BATIK Trial vol. 3 at Morishita Studio
August-September: The Asahi Performing Arts
Award 2004 winner's performance *SHOKU* in
Kanagawa, Hyogo, Niigata, Kochi
September: Australia-Japan Dance Exchange

2006, collaborative piece by BATIK and DANCE
NORTH / SPRINTER GROUP in Okayama
October: BATIK Trial vol. 4 at Morishita Studio

[Activities by Ikuyo Kuroda]

April 2006: Awarded the Dance Critics Society of
Japan Prize/Monica Monica Tenryo in Okayama
May: *Watashi no koibito* in Tokyo / *Last Pie*
showed at "Video dance 2006"
July: Participated as a dancer in *ASOBU*,
choreographed by Josef Nadj, premiered at the
Festival d'Avignon / Performance of *Monica
Monica Monica Hiroshima*

AbsT [舞踊/東京]
AbsT [dance/Tokyo]

2006 年度より
From 2006



『白井剛&アルディッティ弦楽四重奏団』撮影:池田ひらく
Tsuyoshi Shirai & the Arditti Quartet. Photo: Hiraku Ikeda



白井 剛 撮影:長谷川豊弥
Tsuyoshi Shirai. Photo: Toyohiro Hasegawa

主宰: 白井 剛(振付家・ダンサー)
制作: 高樹光一郎
artistic director: Tsuyoshi Shirai
(choreographer, dancer)
producer: Koichiro Takagi
Takagi_hiwood@mac.com

■継続助成対象期間
2006 年度から 2008 年度まで

■2006 年度の助成内容
年度: 2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日
金額: 3,000,000 円
スタジオ提供 (2006 年 6 月から 2007 年 5 月までの
期間) 70 日間

■2006 年度のおもな活動

[公演活動]
06 年 5 月『質量, slide, & 』チュニジアツアー
6 月: アサヒアートフェスティバル 隅田川船上パフォー
マンス
7 月: トヨタ コレオグラフィー アワード 2006 ネクス
テージにて『質量, slide, & 』を上演
8-9 月: アルディッティ弦楽四重奏団とのコラボレーシ
ョン ジョン・ケージ作曲『44 のハーモニー』ダンス
バージョン (石川、島根、東京、宮崎、長野)
9 月: 伊藤キム『禁色』ヨーロッパツアーにダンサーと
して参加 (リヨン、デュッセルドルフ)
07 年 2 月: 新作『しはに』東京公演

[その他]
06 年 5、6、9 月: 京都造形芸術大学のジュネ研究会
に参加

■Grant-receiving term
From 2006 to 2008

■Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000
Studio Rental (between June 2006 till May 2007):
70 days

■Major activities during fiscal year 2006

[Performances]
May 2006: *Mass, slide, &* performed at
Rencontres Choreographiques de Carthage in
Tunis
June: Performance on a river boat as part of the
Asahi Art Festival in Tokyo
August-September: Collaboration work with the
Arditti Quartet on John Cage's *44 Harmonies*
and tour of Japan with the quartet (Ishikawa,
Shimane, Tokyo, Miyazaki, Nagano)
September: Participated as a dancer in Kim Ito's
Kinjiki tour of Lyon and Dusseldorf
February 2007: Premier of *Shihani* in Tokyo

[Other Activities]
May, June, and September 2006: Participated in
the Jean Genet Project at Kyoto University of Art
and Design



『CANDIES – girlish hardcore –』イギリス公演、2006 年 1 月 撮影：谷口雅彦
CANDIES – girlish hardcore – in U.K., January 2006. Photo: TANIGUCHI Masahiko



羊屋白玉 撮影：野村佐紀子
Shirotama Hitsujiya. Photo: Sakiko Nomura

主宰：羊屋白玉（劇作家・演出家・俳優）
制作：佐藤道元
artistic director: Shirotama Hitsujiya
(playwright, director, and actor)
producer: Michimoto Satoh
michimoto@yubiwahotel.com
http://www.yubiwahotel.com

■継続助成対象期間
2004 年度から 2006 年度まで

■2006 年度の助成内容
年度：2006 年 4 月 1 日 – 2007 年 3 月 31 日
金額：3,000,000 円
スタジオ提供（2006 年 6 月から 2007 年 5 月までの
期間）79 日間

■2006 年度のおもな活動

[公演活動]

06 年 4 月エイブルアート・オンステージ参加事業『東京境界線紀行』（東京）劇作・演出
8 月『Please Send Junk Food in HOKKAIDO』（北海道）
9 月：北米ツアー『CANDIES – girlish hardcore』（ポートランド、ニューヨーク）
07 年 3 月CANDIES – girlish hardcore（大阪）『YIN & YANG（CANDIES – girlish hardcore & Please Send Junk Food）』（森下スタジオ）

[ワークショップ]

06 年 7-8 月『Please Send Junk Food』ワークショップ
ブオーデション（北海道）
12 月『やがて亡くなってしまおう演劇のためのワークショップ』（森下スタジオ）
07 年 1 月『やがて亡くなってしまおう演劇のためのワークショップ 2』（森下スタジオ）
4 月『やがて亡くなってしまおう演劇のためのワークショップ 3』（森下スタジオ）

[その他]

06 年 8 月：日本演出者協会「演劇大学 2006 in 札幌」企画部運営・ワークショップ参加（北海道）、石川雷太個展トークゲスト（東京）
11 月：リチャード・フォアマン＆ソフィー・ハヴィランド主催「ブリッジプロジェクト」ワークショップ参加（京都）
07 年 1-2 月：東京国際芸術祭のアメリカ現代戯曲＆劇作家シリーズに羊屋が演出家として参加

■Grant-receiving term
From 2004 to 2006

■Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 – March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000
Studio Rental (between June 2006 till May 2007): 79 days

■Major activities during fiscal year 2006

[Performances]

April 2006: *Tokyo Borders Travel Sketch* by Able Art On Stage, written and directed by Shirotama Hitsujiya (Tokyo)
August: *Please Send Junk Food in Hokkaido*
September: *CANDIES – girlish hardcore* North American Tour (Portland and New York)
March 2007: *CANDIES – girlish hardcore* in Osaka; *YIN&YANG with Please Send Junk Food & CANDIES – girlish hardcore* (Morishita Studio)

[Workshops]

July - August 2006: Workshop for audition of *Please Send Junk Food* in Hokkaido
December: *Workshop for the theatre that may die in due time* at Morishita Studio
January 2007: *Workshop for the theatre that may die in due time, part 2* at Morishita Studio
April: *Workshop for the theatre that may die in due time, part 3* at Morishita Studio

[Other activities]

August 2006: Organization and direction of the Japan Directors Association's Theater University 2006 in Sapporo, talk session with Raita Ishikawa at his exhibition in Tokyo
November: The Bridge Project workshop with Richard Foreman and Sophie Haviland in Kyoto
January-February 2007: Hitsujiya participates as a director in the 'Tokyo International Arts Festival' s American Contemporary Plays & Playwrights Series



『ショートピースアンソロジー』森下スタジオ 2006 年 11 月 撮影:布施龍一
Short Pieces Anthology at Morishita Studio, November 2006. Photo: Ryuichi Fuse



北村明子 撮影:永妻亜矢子
Akiko Kitamura. Photo: Ayako Nagatsuma

主宰:布施龍一
芸術監督:北村明子(振付家・ダンサー)
executive director: Ryuichi Fuse
artistic director: Akiko Kitamura
(choreographer, dancer)

info@leni-basso.com
http://www.leni-basso.com/

■継続助成対象期間

2004 年度から 2006 年度まで

■2006 年度の助成内容

年度:2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日

金額:3,000,000 円

スタジオ提供(2006 年 6 月から 2007 年 5 月までの
期間)113 日間

■2006 年度のおもな活動

[公演活動]

06 年 6 月 Ghostly Round ヨーロッパツアー 2006(ギリ
シャ、スイス、ドイツ)

11 月『ショートピースアンソロジー』東京公演(森下
スタジオ/セゾンシアタープログラム)

07 年 1 月『Finks』ニューヨーク公演

1-2 月『Ghostly Round』ヨーロッパツアー 2007(オ
ランダ、ベルギー)

3 月『ショートピースアンソロジー』長野公演

[海外共同製作]

06 年 10 月:フィラデルフィアのダンスカンパニー
Group Motion からの委嘱作品『Rondo』東京公演

[その他]

06 年 11 月:CINARS 2006 ブース出展(モントリオ
ール)

07 年 3 月:東京芸術見本市ビデオプレゼンテーシ
ョン参加

■Grant-receiving term

From 2004 to 2006

■Details on support during fiscal year 2006

Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007

Grant: ¥3,000,000

Studio Rental (between June 2006 till May 2007):
113 days

■Major activities during fiscal year 2006

[Performances]

June 2006: *Ghostly Round* 2006 European Tour in
Greece, Switzerland, Germany

November: *Short Pieces Anthology* Tokyo
performance at Morishita Studio / Saison Theater
Program

January 2007: *Finks* New York performance

January-February: *Ghostly Round* 2007 European
Tour in The Netherlands, Belgium

[International Collaboration Project]

October 2006: Staging of *Rondo*, commissioned
by the Philadelphia-based dance company
Group Motion, in Tokyo

[Other Activities]

November 2006: Booth presentation at CINARS,
in Montreal

March 2007: Video presentation at the Tokyo
Performing Arts Market

特別助成〔非公募〕

現代詩の理論的指導者だった故・小野十三郎の多彩な詩業を記念し、現代詩の新しい創造的な書き手を奨励する大阪文学協会〈小野十三郎賞実行委員会〉主催の「第8回小野十三郎賞」に対して、2005年度に続き助成を行なった。

また、本年度は海外文化の日本への紹介に関わるふたつの事業が採択された。ひとつは大修館書店による、モダンダンスの流れを築いたルドルフ・ラバンの自伝(1935年刊/原作はドイツ語)の翻訳出版事業(翻訳:日下四郎)であり、これによって舞踊史における重要な文献の初の和訳が刊行された。また、ロシア民謡フェスティバル実行委員会が主催したシンポジウム「ロシア民謡の魅力と可能性 ― 日本とロシアの新しい文化交流をめざして」では、一時代のムーブメントとしてロシア民謡を懐古するのではなく、現代のロシアの文化を日本に伝えるなど、大胆な発想の転換を求める議論が展開され、ロシア文化を今後日本に紹介してゆくためのヒントが提示された。

この他、創作能(ザビエル)公演実行委員会による、フランシスコ・ザビエル生誕500年を記念して行なわれた創作能『ザビエル』(加賀乙彦作)の公演事業に対しても支援を行なった。

特別助成〔非公募〕

助成対象4件/助成総額 1,800,000 円

社団法人大阪文学協会〈小野十三郎賞実行委員会〉

第8回小野十三郎賞
2006年4月1日ー11月25日
大阪
200,000 円

大修館書店
翻訳単行本『ルドルフ・ラバンの舞踊観 ― クラシック・バレエではない身体意識とは』ルドルフ・ラバン著/日下四郎訳
2006年4月1日ー2007年3月20日
東京
300,000 円

創作能(ザビエル)公演実行委員会
フランシスコ・ザビエル生誕五百年記念公演
2006年10月4日
東京(宝生能楽堂)
1,000,000 円

ロシア民謡フェスティバル実行委員会
ロシア民謡フェスティバルシンポジウム(第4回)「ロシア民謡の魅力と可能性 ― 日本とロシアの新しい文化交流をめざして」
2006年9月30日
東京(江戸東京博物館ホール)
300,000 円

Special Project Support Program
[designated fund program]

Following a grant in 2005, a second-year grant was given to the Ono Tosaburo Award Committee of the Osaka Bungaku Kyokai (Osaka Literature Association) this year for The Eighth Ono Tosaburo Award, which is an award that encourages new and creative poets in celebration of the extensive poetry works of Ono, who was a theoretical leader in Japanese contemporary poetry.

Two projects focused on foreign arts and culture were selected in 2006 as well. One was the translation and publication of the autobiography of Rudolf Laban, who contributed to the establishment of modern dance, by Taishukan Shoten [Taishukan Publishing Co., Ltd.]. This was the first Japanese translation (by Shiro Kusaka) of the significant work in dance history literature, which was originally written in German and published in 1935. The other project was a symposium organized by the Russian Traditional Music Festival Executive Committee entitled "In Search of a New Cultural Exchange Relationship between Japan and Russia." This was a symposium in which clues for presenting Russian culture to Japan in the future were pursued through challenging discussions, such as criticism on the retrospective views that regard the popularity of Russian traditional music in Japan during the postwar years as a transitory movement in a limited historical period and instead placed emphasis on introducing contemporary Russian culture in the years to come.

Additionally, we supported *Xavier*, a new noh play written by Otohiko Kaga, organized by the Modern Noh (Xavier) Performance Committee in celebration of the five hundredth anniversary of the birth of St. Francis Xavier.

Special Project Support Program
[designated fund program]

4 Grantees / Total appropriations: ¥1,800,000

Modern Noh (Xavier) Performance
Committee

Performance to Celebrate the 500th Anniversary of the Birth of St. Francis Xavier
October 4, 2006
Tokyo (Hosho Nohgakudo)
¥1,000,000

Ono Tosaburo Award Committee

The Eighth Ono Tosaburo Award
April 1 - November 25, 2006
Osaka
¥200,000

Russian Traditional Music Festival Executive
Committee

Symposium: In Search of a New Cultural Exchange Relationship between Japan and Russia
September 30, 2006
Tokyo (Edo Tokyo Museum Hall)
¥300,000

Taishukan Shoten

Publishing of *Rudolf Laban – till Modern Dance was born*
April 1, 2006 - March 20, 2007
Tokyo
¥300,000

II. 国際交流プログラム / INTERNATIONAL PROGRAMS

II-1. 知的交流 / Intellectual Exchange Programs

現代演劇・舞踊助成 — 知的交流活動
国際会議・シンポジウムの開催、翻訳出版などを通して日本の現代演劇・舞踊芸術の国際化を促進する事業に対して助成をする本プログラムでは、今年度3件の事業に対して助成した。

クリエイション・ブックスによる「Hijikata: Revolt of the Body (土方: 肉体の反乱)」は、関係者からのインタビューを中心にまとめられた土方巽の生涯と作品に関する伝記の初の英語出版事業。著者は、英・キングストン大学教授のスティーブン・バーバー氏。欧米の読者にわかりやすいように日本の歴史と文化に関する情報を補足しながらまとめているため、読みやすいものに仕上がった。学生や研究者からの注文が多く、評判も高いということなので、今後も広く、日本文化を学ぶテキストとして読まれることを期待したい。

『その鉄塔に男たちはいるという』米国公演に向けた戯曲翻訳推敲とワークショップの実施」は、ニューヨークのシアター・アーツ・ジャパン、ウォーケン・グレイシア劇場と、作者の土田英生氏並びに氏の主催する劇団MONOとがパートナーとなり、翻訳台本の推敲から、リーディングやワークショップなどの約1年間の作業を経て、アメリカ人の演出家と俳優による上演までを実施したプロジェクト。作業は非常に丁寧に行なわれ、米訳の質の高さだけではなく、作品の評判も良かったようだ。その手法は日本の現代演劇における翻訳上演の今後のモデルにもなるのではないか。さらに、この事業をきっかけに日本劇作家協会の理事である土田氏とザ・ドラマティスト・ギルド・オブ・アメリカに繋がりが生まれ、氏はドラマティスト・ギルドのアソシエイト・メンバーとして認定された。

本年が助成の最終年度となった日露演劇会議の「ロシア国立オムスク大学での第三回『日本文化講座』実施」は、先方からの日本の舞台芸術と地方都市の行政との関係について教えて欲しいという依頼を受け、地方自治

体で公共施設管理などの業務に携わってきた演劇ジャーナリストの加藤佳子氏を講師として派遣、今回はオムスクの国立農業大学での講座も行なわれた。



日露演劇会議「ロシア国立オムスク大学での第3回『日本文化講座』実施、2006年5月
Seminar on Japanese Culture, 3rd Session at Omsk National University, Russia, May 2006.

現代演劇・舞踊助成 — 知的交流活動
助成対象3件 / 助成総額: 1,800,000円

有限会社キューカンバー・MONO
「その鉄塔に男たちはいるという」米国公演に向けた戯曲翻訳推敲とワークショップの実施
2006年12月5日 - 12月9日
ニューヨーク (Sheila Gray Studio [ワークショップ会場], TBG Theatre [公演会場])
500,000円

クリエイション・ブックス
Hijikata: Revolt of the Body
2006年4月1日 - 7月27日
ロンドン
700,000円

日露演劇会議
ロシア国立オムスク大学での第三回『日本文化講座』実施
2006年5月17日 - 5月23日
オムスク (ロシア国立オムスク大学および同農業大学)
600,000円

Contemporary Theater and Dance – Intellectual Exchange Programs

The aim of this program is to improve the visibility of contemporary Japanese theater and dance within the world's performing arts community by supporting international conferences, symposia, and translation/publication projects related to the above two fields of the performing arts. In 2006, the program supported three projects.

Hijikata: Revolt of the Body by Creation Books Ltd. was a project to publish the first English biography of Tatsumi Hijikata. The author, Stephen Barber, professor of Kingston University in the U.K, wrote about the life and work of Hijikata by interviewing people who knew the Butoh master and added facts on Japanese history and culture so that the book would be accessible to European and American readers. The book has been well received, with many orders by students and scholars alike, and will perhaps become a widely read text on Japanese culture.

“Workshop, Reading, and Discussion for Developing the Script and Translation of *it is said the men are over in The Steel Tower*” was a project in which the Kyoto-based theater company MONO cooperated with Theatre Arts Japan of New York and the U.S. theater company woken'glacier in order to realize the New York production of the play written by its playwright and artistic director Hideo Tsuchida with an American director and American actors through the process of polishing the English translation of the script, reading sessions, and workshops that lasted for about a year. The process was conducted very meticulously, and not only the quality of the English script but also the performance itself was well received. This project can be regarded as a model of successful translation and representation of a Japanese contemporary play. In addition, this project enabled Tsuchida, who is also a member of the board of directors of Japan Playwrights Association, to build ties with The Dramatists Guild of America, and was invited to become an associate member of the Guild.

In its final grant-receiving year, Japan Russia Theatre Forum organized the third

session of a seminar on Japanese culture at Omsk State University, Russia, and sent Yoshiko Kato, a theater journalist who has also been engaged in administration work at public institutions of a local government, as a lecturer in response to a request from the university for a seminar on the relationship between the performing arts and the administration of regional cities in Japan. Seminars were held also at Omsk State Agrarian University.

Contemporary Theater and Dance – Intellectual Exchange Programs
3 Grantees / Total appropriations: ¥1,800,000

Creation Books Ltd.
Hijikata: Revolt of the Body
April 1 - July 27, 2006
London
¥700,000

Cucumber/MONO
Workshop, Reading, and Discussion for Developing the Script and Translation of *it is said the men are over in The Steel Tower* (a. k. a. "The Happy Lads")
December 5 - December 9, 2006



有限会社キューカンバー・MONO『その鉄塔に男たちはいるという』米国公演
Cucumber/MONO performance of *it is said the men are over in The Steel Tower*

New York (Sheila Gray Studio [for workshops],
TBG Theatre [for performances])
¥500,000

Japan Russia Theatre Forum
Seminar on Japanese Culture, 3rd Session at
Omsk State University, Russia
May 17 - May 23, 2006

Omsk (Omsk State University, Omsk State
Agrarian University)
¥600,000

翻訳出版助成 [非公募]

日本の社会科学および人文科学などに関する文献を海外に継続的に紹介する活動を支援する本プログラムでは、アメリカでの出版事業、およびドイツでの翻訳出版事業に対して助成が行なわれた。

アメリカのハワイ大学出版では、1950年代と60年代における日本の前衛芸術(絵画、彫刻、音楽、演劇、舞踊)に関する書籍 *Radicals and Realists in the Japanese Nonverbal Arts: The Avant-Garde Rejection of Modernism* を2006年7月に刊行。著者であるノースウエスタン大学歴史学教授(日本史専攻)のトーマス・R. H. ヘイヴンズは、本書の取材・調査のために数回にわたって来日し、20世紀における日本の前衛芸術にとって極めて重要だった20年間について分析する世界初の文献を完成させた。

ミュンヘンに拠点を置く出版社ユディツィウム社は、当財団の助成を受けて1999年度から2003年度までの5年間にわたって日本の社会科学、人文科学の著作をシリーズとしてドイツ語に翻訳出版し、2004年度からは3年間にわたる第2期が開始された。その最

終年度にあたる2006年度には、第2期の初年度(2004年度)の助成金が充当された井筒俊彦著『意識と本質』が4月に、また今道友信著『エコエティカ 生圏倫理学入門』が07年3月に刊行された。この後、第2期2年度(2005年度)の助成金が充当された佐和隆光著『日本の「構造改革」——いま、どう変えるべきか——』と丸山眞男選集第一巻、および第2期3年度(2006年度)の助成金を充てた丸山眞男選集第二巻の翻訳出版が予定されている。

翻訳出版助成 [非公募]
助成対象2件/助成総額2,300,000円

ユディツィウム社
日本の現代社会に関する著書2冊を独語へ翻訳・出版(第2期・3年目)
2006年4月1日ー2007年3月31日
ミュンヘン
2,000,000円

ハワイ大学出版局
Radicals and Realists in the Japanese Nonverbal Arts: The Avant-Garde Rejection of Modernism 刊行
2005年7月18日ー2006年7月23日
ホノルル
300,000円

Translation/Publication Project Program [designated fund program]

This program provides financial assistance to multi-year projects aimed to introduce literature on Japanese social science and humanities to other languages and cultures. In 2006, grants were awarded to projects that took place in the U.S. and in Germany.

University of Hawaii Press published a book on Japanese avant-garde painting, sculpture, music, theater, and dance in the 1950s and the 1960s entitled *Radicals and Realists in the Japanese Nonverbal Arts: The Avant-Garde Rejection of Modernism*, in July 2006. The writer, Thomas R. H. Havens, a professor of Japanese history at Northeastern University, visited Japan on several occasions to do research and interviews for the book and completed the first analysis in the world on the two decades that were extremely significant in the history of Japanese avant-garde arts in the twentieth century.

iudicium Verlag GmbH, a publishing company based in Munich, completed a five-year series to translate and publish works of social science and humanities by

Japanese authors from 1999 to 2003 with the support from the Saison Foundation, and started a new three-year series from 2004. In the last year of its grant-receiving term, Toshihiko Izutsu's *Consciousness and Reality*, to which the grant for the first year of the second series (2004) was appropriated, was published in April 2006, and Tomonobu Imamichi's *Eco-ethica: An Introduction to Eco-Ethics* was published in March 2007. Future translation and publishing projects include Takamitsu Sawa's *The "Reformation" of Japan - How to change it now* and the first volume of the selected works of Masao Maruyama - to both which the grant for the second year of the second series (2005) will be allocated - and the second volume of the Masao Maruyama anthology, to which the grant for the final year of the second series (2006) will be allocated.

Translation / Publication Project Program
[designated fund program]
2 Grantees / Total appropriations: ¥2,300,000

Iudicium Verlag GmbH
Translation and publishing of two titles on contemporary Japanese society into German
April 1, 2006 - March 31, 2007
Munich
¥2,000,000

University of Hawaii Press
Publishing of *Radicals and Realists in the Japanese Nonverbal Arts: The Avant-Garde Rejection of Modernism*
July 18, 2005 - July 23, 2006
Honolulu
¥300,000



ユディツイウム社「今道友信著作の独語訳出版」
Cover of a book by Tomonobu Imamichi published by iudicium Verlag GmbH of Munich.

II-2. 芸術交流 / Artistic Exchange Programs

現代演劇・舞踊助成 — 芸術交流活動 I:
プロジェクト支援

このプログラムでは、国際間の相互理解を推進する日本の現代演劇・舞踊の海外公演、招聘受け入れ公演、国際共同創造事業に対して、森下スタジオの貸与を行なっている。今年度は3件の事業が森下スタジオを稽古場や作品発表の場として使用した。

コンドルズの欧州公演ジュピターは当初、ブラジルツアーを行なう予定だったものが、諸般の事情で中止になったものの、国際交流基金からの招聘で急遽実現したもの。初めてのヨーロッパツアーで、ロンドン、パリ、ローマを巡演したが、観客からの反応が良かったとのことなので、今後のヨーロッパでの活動が期待される。

山の手事情社によるワルシャワ・ドラマ劇場との交流事業では、2005年のポーランドのワルシャワ・ドラマ劇場で公演を行なってきた以来、交流を続けていた同劇場の芸術監督ピョートル・チェシラック氏を演出家として招聘し、劇団の俳優とゴンプロヴィチの『王女イヴォナ』を上演した。

NW&D (Nina Winthrop and Dancers) による『Constraints』は、ニューヨーク在住

の振付家ニナ・ウィンスロップによるダンス・プロジェクト。今回は、氏を中心に、日本人ダンサーの鈴木邦江、勝部ちこ、鹿島聖子、林洋子が参加し、東京とニューヨークでレジデンスを行ないながら作品を創作、ニューヨークで発表した。

現代演劇・舞踊助成 — 芸術交流活動 I:
プロジェクト支援
助成対象3件

■海外公演

コンドルズ
コンドルズ ヨーロッパツアー 2007
2007年1月10日 - 1月25日
ロンドン、パリ、ローマ(サドラーズ劇場、パリ日本文化会館、オーデトリウム)
スタジオ提供 28日間

■共同制作

NW&D Inc. (Nina Winthrop and Dancers)
「Constraints」
2007年1月22日 - 2月16日
東京(森下スタジオ)
スタジオ提供 26日間

劇団山の手事情社/有限会社アップタウンプロダクション
山の手事情社 ワルシャワ・ドラマ劇場 交流事業
2006年12月21日 - 12月22日
東京(森下スタジオ)
スタジオ提供 61日間



「山の手事情社 ワルシャワ・ドラマ劇場 交流事業」森下スタジオ、2006年12月
Yamanote Jijosha and Teatr Dramatyczny m. st. Warszawy (Poland) Exchange Project at Morishta Studio, December 2006.



NW&D Inc.(Nina Winthrop and Dancers)『Constraints』森下スタジオ, 2007 年 2 月 撮影: Eri Yajima
Constraints by NW&D Inc. at Morishita Studio, February 2007. Photo: Eri Yajima

Contemporary Theater and Dance – Creative Exchange Program (Studio Award)

This program awards priority use of the rehearsal facilities at Morishita Studio to projects that will contribute to promoting mutual understanding between Japan and other cultures, such as international tours by contemporary Japanese theater and dance companies, performances in Japan by foreign performing artists, and international collaboration projects. In 2006, the following three awarded projects used Morishita Studio for rehearsals and/or performances of new works. Although the Condors' plan for a tour in Brazil was canceled due to unavoidable circumstances, the Japan Foundation invited the dance company to go on a tour with *Jupiter*, the piece that was to be shown in Brazil, to Europe. In this first European tour of the company, the piece was well received in London, Paris, and Rome and we expect future developments for the company in Europe.

The Tokyo theater company Yamanote Jijosha invited Piotr Cieślak, artistic director of Teatr Dramatyczny m. st. Warszawy, with whom they had been establishing close ties with since 2005 when the company performed at the theater in Warsaw, as the director of Witold Gombrowicz's *Iwona, księżniczka Burgunda*, which was performed by the actors of Yamanote Jijosha.

An international dance collaboration project for a work entitled *Constraints* by NW&D (Nina Winthrop and Dancers) also took place at Morishita Studio. This was a project led by New York-based choreographer Nina Winthrop, and during

her residency in Tokyo she worked with Japanese dancers Kunie Suzuki, Chico Katsube, Shoko Kashima, and Yoko Hayashi, and presented the piece in New York.

Contemporary Theater and Dance – Creative Exchange Program (Studio Award)

3 Awardees

■ Touring Projects

Condors

Condors European Tour 2007

January 10 - January 25, 2007

London, Paris, Rome (Sadler's Wells, Maison de la culture du Japon - Paris, Auditorium Parco della Musica)

Studio Rental: 28 days

■ International Collaboration Projects

NW&D Inc. (Nina Winthrop and Dancers) *Constraints*

January 22 - February 16, 2007

Tokyo (Morishita Studio)

Studio Rental: 26 days

Yamanote Jijosha / Uptown Production Inc. Yamanote Jijosha and Teatr Dramatyczny m. st. Warszawy (Poland) Exchange Project

December 21 - December 22, 2006

Tokyo (Morishita Studio)

Studio Rental: 61 days

現代演劇・舞踊助成 ― 芸術交流活動 II: 継続プロジェクト支援

国際交流の推進に中心的な役割を果たしているカンパニーが主催する2年以上3年以内の国際交流プロジェクトに対して最長3年にわたって助成金が支給され、さらに希望があれば、森下スタジオ使用の優先権が付与されるプログラム。今年度は、昨年度からの継続を3件、新規2件を採択した。

新規の採択となったのは、燐光群による「フィリピン国際交流プログラム」と中馬芳子/スクール・オブ・ハード・ノックス・ジャパンプロジェクトの『「A Page Out of Order」スクール・オブ・ハード・ノックス・ジャパンプロジェクト」。

燐光群は、1996年よりフィリピンの演劇界との交流事業を継続して実施しており、04年には森下スタジオでフィリピンとの、「ベッド」をテーマにして書かれた両国の戯曲をオムニバス式で、両国の俳優によって上演する国際共同事業『フィリピン・ベッドタイム・ストーリーズ』（演出: 吉田智久）を上演している。本プロジェクトは、フィリピン演劇と関係の深い演出家の吉田智久を中心に、この『フィリピン・ベッドタイム・ストーリーズ』で上演される新作を増やし、演劇交流を深めていくことを考えている。助成の開始年にあたる今年度は、吉田がミンダナオ島をはじめフィリピン各地を視察。フィリピンの政治社会歴史と日本との関係を調査取材した。また、日本とフィリピン両国でツアー公演を実施した。

スクール・オブ・ハード・ノックスは振付家・ダンサーの中馬芳子によって80年にニューヨークに設立されたカンパニーで多分野のアーティストと多くの国々を舞台に、国家や民族、人種を越えた新しい芸術表現の可能性を探るパフォーマンスを行なっている。今年度は、インド・マニプール、マケドニア、カンボジア、ニューヨークそして日本のダンサーやミュージシャンが参加し、日本ツアーとニューヨーク公演が実施された。

最終年度を迎えた劇団解体社は、昨年度のプロジェクトの集大成として発表された『Dream Regime, Tokyo』の上演終了後の活動を模索するために、フリースペース・カンパスで「Reflection 連鎖系」の三部作を上演した。本プロジェクトに関与してきたブラジルド

イッ、フランス、韓国、イギリスのアーティストが参加し、『シャーマン』、『「剥製」態』、『「要塞」にて』を発表した。この3年間、かつてない規模で「夢の体制」(＝グローバルゼーション)下における「越境」の可能性を探ってきた解体社の「旅」の今後に注目し続けたい。

同じく、3年間の助成を終了する舞踊資源研究所の国際共同制作ダンス・プロジェクト「気配の探求」III「森の物語」は田中泯の「踊りの場所は、劇場だけではない。東京の森を探し、そこで変化する環境、人、気配、気象を感じながら、だれにでも無料で観てもらえる公演にしたい」との考えをもとに始められたプロジェクト。今年度は、インド、ハンガリー、ロシア、ギリシャ、インドネシアと日本のダンサーが参加。例年の通り、井の頭公園の一角には多くの観客を交えた祭りのような高揚した雰囲気生まれ、通常の劇空間の公演とは異なる稀有な場が出現した。

「パブリック＝アン＋パブリック」は、舞踊カンパニーのニブロールを主宰する振付家／ダンサーの矢内原美邦による個人プロジェクトで、映像作家の高橋啓祐と「身体と映像がつくりだす空間の追求」をテーマに活動している。2005年の初年度は、オーストラリアの振付家／ダンサーのジョー・ロイドと作品を創作、発表。今年度は、台湾のアーティスト、フーチン・チャンとジンティン・リン、北京の8ggとの交流事業を展開、台湾、日本の両方でレジデンシーをして作品を創作、作品発表をした。両作品とも発表後、ギャラリーや美術館フェスティバルからの招聘の申し出があり、今後の発展が期待される。

Contemporary Theater and Dance – Creative Exchange Grant Program – For Long-Term Projects

This program awards grants to international exchange projects that will take place for more than two years and will be completed within three by Japanese performing arts companies who are playing an important role in promoting international exchange. Priority use of Morishita Studio is also awarded upon request. In 2006, two projects were chosen as grantees in addition to the three ongoing developments since the previous year: “Cultural Exchange Program with the Philippines” by Theater Company Rinko-gun, and “‘A Page Out of Order’ Yoshiko Chuma/The School of Hard Knocks Japan Project” by Yoshiko Chuma/The School of Hard Knocks Japan Project.

Theater Company Rinko-gun has been continuing exchange programs with the Philippine theater scene since 1996, and carried out an international collaboration project, *Philippine Bedtime Stories* (directed by Toshihisa Yoshida), at Morishita Studio in 2004, in which plays written in the Philippines and Japan using “bed” as a theme were staged as an omnibus with performers from both countries. Toshihisa Yoshida, a director of Rinko-gun who has established close ties with the theater community in the Philippines, has been the central figure in this international cultural exchange program, which includes plans to enhance exchange in theater between the two countries and to increase the number of new plays that will be featured within the *Philippine Bedtime Stories* omnibus series. In 2006, the first year of the grant-receiving term, Yoshida visited the island of Mindanao and other areas in the Philippines to do research on local politics, society, and history and their relationship with Japan. Performance tours were carried out in the Philippines and Japan as well.

School of Hard Knocks, a company established by choreographer/dancer Yoshiko Chuma in New York in 1980, creates works with artists from diverse genres and in various countries that transcend boundaries among nations and ethnicity. In 2006, with the participation of dancers and musicians from Manipur of India, Macedonia, Cambodia, New York, and Japan, a tour of Japan and a performance in New York were realized.

Gekidan Kaitaisha, the theater company

that completed its grant-receiving term in 2006, presented a trilogy, *Reflection*, at its atelier, CANVAS, to examine the way the company should pursue after their latest full length work *Dream Regime, Tokyo* that had been presented as a highpoint of the project in 2005. The trilogy consisted of *Shaman*, *Bodies of “Taxidermy”* and *At a “Fortress”* and was created with artists from Brazil, Germany, Korea, and the U.K. who had previously participated in the project. During the past three years, Kaitaisha has been pursuing on an unprecedented scale the possibility to transcend borders under the “dream regime,” or, in other words, globalization, and as a foundation that has supported the *Dream Regime* project for three years, we are interested in how the future of their continuing journey will be.

<In Search of Subtle Presence> work IV – ‘Rite of Forest’ by Dance Resources on Earth, which also completed its three-year grant-receiving term in 2006, is an international dance project that was based on Min Tanaka’s idea, “Places for dance are not limited to theaters. I want to present a performance that is free of charge and for everyone in a forest in Tokyo, dancing together while feeling the changes in the atmosphere, the people, the subtle presence, and climate.” In 2006, dancers from India, Hungary, Russia, Greece, Indonesia, and Japan participated in this project. As in the past series of this project, an exciting atmosphere was created within the 2006 performance and a large audience gathered in a section of Inogashira Park as if it was a festival, and an extraordinary occasion quite different from the standard theater performance was realized.

public=un+public is an individual project by Mikuni Yanaiharu, the choreographer/dancer and artistic director of the dance company, Nibroll, to pursue “a space created by bodies and images” with Keisuke Takahashi, a video artist, which the Saison Foundation supported for two years. In 2005, the first year of the grant-receiving term, she created and presented a piece with Jo Lloyd, an Australian choreographer/dancer. In 2006, an exchange program with Taiwanese artists Fu-Chin Chiang and Jiun-Ting Lin, and 8gg of Beijing was carried out, and they created and presented a work-in-residence both in Tokyo and Taiwan. These two pieces have received invitations from galleries, art museums, and festivals, which proves a bright outlook on the project’s future.

現代演劇・舞踊助成 ― 芸術交流活動 II: 継続プロジェクト支援

助成対象 5 件 / 助成総額 13,500,000 円

Contemporary Theater and Dance – Creative Exchange Grant Program – For Long-Term Projects

5 Grantees / Total appropriations: ¥13,500,000

燐光群 [演劇/東京]
Theater Company Rinko-gun [theater/Tokyo]

2006 年度より
From 2006



フィリピン国際交流プログラム、東京、2006 年 3 月
Cultural Exchange Program with the Philippines in Tokyo, March 2006.



吉田智久
Toshihisa Yoshida

■ 継続助成対象期間
2006 年度から 2008 年度まで

■ 2006 年度の助成内容
年度: 2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日
金額: 3,000,000 円
スタジオ提供: 35 日間

■ 2006 年度のおもな国際交流活動
フィリピン国際交流プログラム
東京、兵庫、マニラ(森下スタジオ、アイホールシナゲ
アーツスタジオ、フィリピン国立劇場スタジオシアター)

■ Grant-receiving term
From 2006 to 2008

■ Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000
Studio rental: 35 days

■ Major activities during fiscal year 2006
Cultural Exchange Program with the
Philippines
Tokyo, Hyogo, Manila (Morishita Studio, AI-HALL,
Sinag Arts Studio, Cultural Centre of the
Philippines Studio Theater)

演出: 吉田智久(演出家)
制作: 古元道広
director: Toshihisa Yoshida (director)
producer: Michihiro Furumoto
rinkogun@alles.or.jp
<http://www.alles.or.jp/~rinkogun/>



『A Page Out of Order』2006 年 8 月 撮影:chisato NISHIKAWA
A Page Out of Order, August 2006. Photo: chisato NISHIKAWA



中馬芳子 撮影:Jonathan Slaff
Yoshiko Chuma. Photo:Jonathan Slaff

■継続助成対象期間

2006 年度から 2008 年度まで

■2006 年度の助成内容

年度:2006 年 4 月 1 日ー 2007 年 3 月 31 日

金額:3,000,000 円

スタジオ提供:5 日間

■2006 年度のおもな国際交流活動

『A Page Out of Order』中馬芳子/スクール・オブ・ハード・ノックス・ジャパンプロジェクト
新潟、大阪、東京(まつだい農舞台、black chamber、アサヒ・アートスクエア)

■Grant-receiving term

From 2006 to 2008

■Details on support during fiscal year 2006

Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007

Grant: ¥3,000,000

Studio rental: 5 days

■Major activities during fiscal year 2006

A Page Out of Order Yoshiko Chuma/The School of Hard Knocks Japan Project
Niigata, Osaka, Tokyo (Matsudai Noubutai, black chamber, Asahi Art Square)

芸術監督:中馬芳子(振付家・パフォーマー)

制作:上田 茂

artistic director: Yoshiko Chuma
(choreographer, performer)

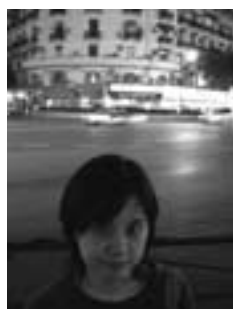
producer: Shigeru Ueda

ueda@beagle-inc.com

http://beagle-inc.com



『パブリック=アン+パブリック』vol.2 イン・アジア 2006 年 撮影:Kazuto Imura
public=un+public vol.2 in Asia, 2006. Photo: Kazuto Imura



矢内原美邦 撮影:高橋啓祐
Mikuni Yanaihara. Photo: Keisuke Takahashi

主宰: 矢内原美邦 (振付家・ダンサー)
artistic director: Mikuni Yanaihara
(choreographer, dancer)

mikuni@nibroll.com
<http://www.nibroll.com/>

■ 継続助成対象期間
2005 年度から 2006 年度まで

■ 2006 年度の助成内容
年度: 2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日
金額: 1,500,000 円
スタジオ提供: 3 日間

■ 2006 年度のおもな国際交流活動
『パブリック=アン+パブリック』vol.2 イン・アジア
東京、神奈川、台北 (森下スタジオ, BankART
studio NYK, 台北クリエーター劇場)

■ Grant-receiving term
From 2005 to 2006

■ Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥1,500,000
Studio rental: 3 days

■ Major activities during fiscal year 2006
public=un+public vol.2 in Asia
Tokyo, Kanagawa, Taipei (Morishita Studio,
BankART studio NYK, Guling St. Avant Garde
Theatre)



Dream Regime Project 『Reflection 連鎖系「要塞」にて』 撮影:宮内勝
Dream Regime Project "Reflection: Chain Systems At a 'Fortress'". Photo: MIYAUCHI Katsu



清水信臣
Shinjin Shimizu

主宰: 清水信臣 (演出家)
制作: 秦 岳志
artistic director: Shinjin Shimizu (director)
company manager: Takeshi Hata
gekidan@kaitaisha.com
<http://www.kaitaisha.com/>

■ 継続助成対象期間
2004 年度から 2006 年度まで

■ 2006 年度の助成内容
年度: 2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日
金額: 3,000,000 円

■ 2006 年度のおもな国際交流活動
「夢」の体制
東京 (フリースペース・キャンパス)

■ Grant-receiving term
From 2004 to 2006

■ Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000

■ Major activities during fiscal year 2006
Dream Regime
Tokyo (Free Space CANVAS)



国際共同制作ダンス・プロジェクト「気配の探求」Ⅳ「森の祝祭」および他公演、井の頭公園(東京)、2006 年 撮影:奥山智明
International Dance Project <In Search of Subtle Presence> work IV "Rite of Forest" and other performances, at Inogashira Park in Tokyo, 2006. Photo: Tomoaki Okuyama



田中 泯
Min Tanaka

主宰: 田中 泯
制作: 斎藤 朋
artistic director: Min Tanaka
producer: Tomo Saito
artcamp@sf7.so-net.ne.jp
<http://www.min-tanaka.com/>

■ 継続助成対象期間
2004 年度から 2006 年度まで

■ 2006 年度の助成内容
年度: 2006 年 4 月 1 日 - 2007 年 3 月 31 日
金額: 3,000,000 円

■ 2006 年度のおもな国際交流活動
国際共同制作ダンスプロジェクト「気配の探求Ⅳ 森の祝祭」および他公演
東京(井の頭公園)

■ Grant-receiving term
From 2004 to 2006

■ Details on support during fiscal year 2006
Fiscal year: April 1, 2006 - March 31, 2007
Grant: ¥3,000,000

■ Major activities during fiscal year 2006
International Dance Project <In Search of Subtle Presence> work IV "Rite of Forest" and other performances
Tokyo (Inogashira Park)

現代演劇・舞踊助成 ― 芸術交流活動：
日仏舞踊交流プログラム

昨年度「フランス・ダンス・03」^{註)}より受け入れた寄付金を元に、2005 年から 2007 年までの期間限定で開設された、日仏間のダンス交流の促進を目的としたプログラム。本年度は、1 件の助成が決定した。

助成対象者の大岩淑子は、フランスに在住するダンサー／振付家。1992 年からニューヨークのジュリアードスクールに学び、96 年トワイラ・サープのカンパニー THARPI、ビル・T. ジョーンズ／アーニー・ゼーンドランスカンパニーを経て、03 年からエクサンプロヴァンス国立振付センター／バレエブレルジョカージュで活躍していた。自身の振付作品も多く発表している。欧米での活動経験に加え、ヨガ、フィジカルセラピー（頭蓋仙骨療法）などで獲得した方法を創作やワークショップに用いて活動をしている。本助成では、麻布 die pratz を会場に、康本雅子、オリヴィエ・ベッソンと『夜明けのしっぽを聴く／Listening to My Tail at Dawn』を発表。あわせて森下スタジオでワークショップ「からだを聴くこと（大岩淑子）」「誰かと踊ること（オリヴィエ・ベッソン）」を実施した。

註)

2003 年度、日本全国で開催された、フランスのコンテンポラリー・ダンスを紹介するフェスティバル。主催はフランス外務省 AFFA フランス大使館朝日新聞社、フランス・ダンス・03 実行委員会。

現代演劇・舞踊助成 ― 芸術交流活動：
日仏舞踊交流
助成対象 1 件／助成総額：600,000 円

大岩淑子
大岩淑子ダンスプロジェクト
2006 年 8 月 10 日－ 8 月 19 日
東京（森下スタジオ、麻布 die pratz）
600,000 円 スタジオ提供 6 日間

Contemporary Theater and Dance –
Japan-France Dance Exchange Program

This program was established with a donation received in 2004 from the “france danse 03” project,¹⁾ with the aim to promote dance exchange between France and Japan. It will be operated only from 2005 to 2007. In 2006, one project was awarded a grant.

The grantee, Toshiko Oiwa, is a dancer/choreographer living in France. She studied at The Juilliard School in New York from 1992, participated in Twyla Tharp's company, THARPI, as well as Bill T. Jones/Arnie Zane Dance Company in 1996, and joined Ballet Preljocaj at the national choreographic center of Aix-en-Provence from 2003; in the meantime, she has also presented many of her own choreographic work. Oiwa has organized workshops and created work based yoga, physical therapy (especially craniosacral therapy), and her experiences in Europe and the U.S. With this year's grant, she presented *Listening to My Tail at Dawn* at die pratz in Azabu, Tokyo, with Masako Yasumoto and Olivier Besson, and coordinated two workshops, “To Listen to One's Own Body” (by Toshiko Oiwa) and “To Dance with Someone” (by Olivier Besson), at Morishita Studio.

1) “france danse 2003” was a festival held throughout Japan in 2003 to promote contemporary French dance that was sponsored by the French Ministry of Foreign Affairs' Association Française d'Action Artistique (AFAA), the Embassy of France in Japan, Asahi Shimbun, and the france danse 03 Committee.

Contemporary Theater and Dance –
Japan-France Dance Exchange Program
1 Grantee / Total appropriation: ¥600,000

Toshiko Oiwa
Toshiko Oiwa Dance Project
August 10 - August 19, 2006
Tokyo (Morishita Studio, Azabu die pratz)
¥600,000 Studio Rental: 6 days

芸術交流活動[非公募]

海外の非営利団体との継続的なパートナーシップに基づく本プログラムでは、フェロースhipなどの人物交流事業や日本文化紹介事業等に対して助成を行なった。

当財団は 1989 年度より、ニューヨークに本部を置くアジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) が日米の芸術家、学者、専門家、機関のために行なっている相互的フェロースhip プログラム「日米芸術交流プログラム」に対して支援を行なっている。当財団からの 2005 年度の助成金が充当された 2006 年度には、遠藤水城（キュレーター研究）田中悠美子（音楽）、田添かおり（絵画・彫刻）、藤堂彰宏（音楽）、山本奈那（写真）の 5 名による渡航・滞在プロジェクトが実施された。また、2006 年度に支給された助成金は、同交流プログラムの 2007 年度の助成対象に選ばれた橋本聡（絵画・彫刻）、常楽泰（舞踊）、小林エリカ（文学）、小林美香（美術館学）、菅原朋子（音楽）などのアーティストや専門家の渡航・滞在費用に充当される。

日本の現代演劇を紹介する 5 カ年プロジェクト「ジャパニーズ・シアター・ナウ」を 1998 年度から 2002 年度まで行なったニューヨークのジャパン・ソサエティーでは、2004 年度より第 2 期を開始。その 3 年度目には、同ソサエティーの 2006 年度秋のテーマである「Girl, Girly, Girlish」の一環として、劇作家・演出家・俳優の羊屋白玉率いる指輪ホテルによる『CANDIES – girlish hardcore』が上演された。終演後の観客とのトークイベントや、ニューヨークの演劇関係者が羊屋を囲んでのラウンドテーブルディスカッションも開催され、双方向的な交流が行なわれた。

芸術交流活動[非公募]
助成対象 2 件／助成総額 10,000,000 円

アジア・カルチュラル・カウンシル
日米芸術交流プログラム（2007 年度の活動に充当）
2007 年 1 月 1 日－ 12 月 31 日
アメリカ、日本
7,000,000 円

ジャパン・ソサエティー
ジャパニーズ・シアター・ナウ（第 2 期 3 年目）
指輪ホテル『CANDIES – girlish hardcore』公演
2006 年 9 月 14 日－ 9 月 16 日
ニューヨーク（ジャパン・ソサエティー）
3,000,000 円

**Artistic Exchange Project Grant Program
[designated fund program]**

This program, which is based on continuing partnership with non-profit organizations outside of Japan, supported fellowship programs and projects to introduce Japanese culture.

Since 1989, the Saison Foundation has given support each year to the New York-based Asian Cultural Council's (ACC) Japan-United States Arts Program, an interactive fellowship program for U.S. and Japanese artists, scholars, specialists, and organizations. The grant awarded to the ACC program in 2006 was appropriated to the travel expenses of five professionals traveling from Japan to the U.S. during the 2007/2008 season: visual artist Satoshi Hashimoto, dance artist Yutaka Jyoraku, novelist Erika Kobayashi, photography historian/curator Mika Kobayashi, and musician Tomoko Sugawara.

Japan Society, Inc. in New York began in 2004 the second series of *Japanese Theater NOW*, a program originally run for five years from 1998 to 2002. In the third year of the current series, the theater company Yubiwa Hotel, led by playwright/director/performer Shirotama Hitsujiya, presented *Candies: girlish hardcore* under the Society's theme for the autumn of 2006, "Girl, Girly, Girlish." Apart from the performances, opportunities

for interactive exchange were made possible through a post-performance Q & A session with audience members and a roundtable discussion between Hitsujiya and prominent members of the theater and dance community in New York.

**Artistic Exchange Project Grant Program
[designated fund program]**

2 Grantees / Total appropriations: ¥10,000,000

Asian Cultural Council

ACC Japan-United States Arts Program
Fellowships (for activities taking place during 2007)

January 1 - December 31, 2007

U.S., Japan

¥7,000,000

Japan Society, Inc.

Japanese Theater NOW II – Year Three:

Yubiwa Hotel in *CANDIES – girlish hardcore*

September 14 - September 16, 2006

New York (Japan Society)

¥3,000,000



ジャパネンサエティー「ジャパニーズシアターナウ」(第2期3年目)、指輪ホテル『CANDIES - girlish hardcore』公演、
2006年9月 撮影:Tom DiMauro
Japanese Theater NOW II - Year Three: Yubiwa Hotel in *CANDIES – girlish hardcore*, organized by the Japan
Society, Inc., September 2006. Photo: Tom DiMauro

森下スタジオのその他の利用者
(2006 年 6 月 1 日ー 2007 年 5 月 31 日)

Other users of Morishita Studio
(June 1, 2006 - May 31, 2007)

利用団体名 User name	利用日数 number of days
イデビアン・クルー / NPO 法人 days Idevian Crew / days	3
伊藤キム Kim Itoh	1
コンタクト・インプロビゼーション・グループ C.I.co, Contact Improvisation Group C.I.co,	13
株式会社サードステージ Third stage, Inc	3
Dance in Deed!	3
Dance Theatre LUDENS	57
パパ・タラフマラ Pappa TARAHUMARA	24
遊園地再生事業団 / (有)ウクレレ Yuenchi Saisei Jigyoudan / ukulele	6

ニュースレター『viewpoint』の刊行
セゾン文化財団のニュースレター
『viewpoint』では、舞台芸術界におけるインフラストラクチャーの整備や芸術団体の運営、国際的な共同制作・公演事業、サバティカル(海外での休暇・充電)などの活動の成果を中心に、当財団の助成・共催事業に関連する論考、レポートを幅広く掲載している。発行部数は毎号 1400 部。芸術団体、自治体、助成財団、マスコミ、大学、シンクタンク、研究者などに無料配布している。

第 35 号(2006 年 5 月発行)

- 幽霊今昔 —『四谷怪談』を演出して
ヨッシ・ヴィーラー(演出家[ドイツ/スイス])
- 日独共同プロジェクト『四谷怪談』の現場から
阿部初美(演出家)
- レニ・バッソの海外公演 フツウのダンス・カンパニーが海外でたくさん公演できるワケ
布施龍一(レニ・バッソ代表)

Publishing of viewpoint

The Saison Foundation's newsletter *viewpoint* carries a wide range of reports and essays, including the results of the Foundation's research grants and the outcome of projects supported by the Foundation. Fourteen hundred copies are published for each issue, which are circulated free of charge to art organizations, local governments, foundations, the press, universities, think tanks, researchers, etc.

Issue No. 35 (May 2006)

- *Ghosts, Past and Present – About Directing “Yotsuya-Kaidan”*
by Jossi Wieler, Director (Germany / Switzerland)
- *On-site Report on the Japanese-German collaborative theater project “Yotsuya-Kaidan”*
by Hatsumi Abe, Director
- *International tours of Leni-Basso Why the ordinary company can do so many performances in abroad?*
by Ryuichi Fuse, Producer of Leni-Basso

Issue No. 36 (August 2006)

- *Establishment of Total Health Care for Artists Japan – How to make a system to*

第 36 号(2006 年 8 月発行)

- 芸術家のくすり箱の誕生 — 才能を花開かせるしくみを創るために必要なこと
福井恵子(芸術家のくすり箱代表)
- [シリーズ:世界の助成・支援機関] NESTA とドリームタイム・フェローシップ・プログラムについて
ヴェヌ・デュバ(英国科学・技術・芸術基金 [NESTA] フェローシップ部門 前ディレクター)
- 私、新しい自分を見つけちゃいました
伊藤キム(振付家・ダンサー)

第 37 号(2006 年 12 月発行)

- リサーチ & ディベロップメント — プレイライツ・センターについて
ポリール・カール(プレイライツセンター[アメリカ]芸術監督)
- 「・・・」には気をつけて — ミネアポリスの「プレイラボ」に参加して
本谷有希子(劇作家・演出家、「劇団、本谷有希子」主宰)
- ムネモシュネの贈り物 — 「記憶」をめぐる物語
ユディ・アー・マド・タジュディン(テアトル・ガラシ[インドネシア]主宰)

encourage talent development

by Keiko Fukui, Representative, Total Health Care for Artists Japan

- *Arts grant-making and supporting institutions in the world: 5. NESTA and the Dream Time Fellowship Programme*
by Venu Dhupa (U.K.)
- *Discovering My New Self*
by Kim Itoh, Choreographer, Dancer

Issue No. 37 (December 2006)

- *Research and Development – The Playwrights' Center at a glance*
by Polly, Artistic Director, The Playwrights' Center (U.S.A.)
- *Be careful about “・・・” – Participating in the PlayLabs Festival in Minneapolis*
by Yukiko Motoya, Playwright, Director, gekidan motoyayukiko
- *On Mnem[a]syne: In Remembrance of The Other*
by Yudi Ahmad Tajudin, Director, Teater Garasi (Indonesia)

Issue No. 38 (March 2007)

- *Mobile: Contemporary Intercultural Social Theatre*
by Alvin Tan, Artistic Director, The Necessary Stage (Singapore)

第 38 号(2007 年 3 月発行)

- モバイル — 現代異文化社会派演劇について
アルヴィン・タン(演出家、ネセサリー・ステージ[シンガポール]芸術監督)
- 『モバイル』への道
鐘下辰男(劇作家・演出家、演劇企画集団 THE・ガジラ主宰)
- Dance Theatre LUDENS 2000-2005 — セゾン文化財団芸術創造活動助成を得て
岩淵多喜子(振付家・ダンサー、Dance Theatre LUDENS 主宰)

● *The Road to “Mobile”*

by Tatsuo Kaneshita, Playwright, Director, PLAY PROJECT TEAM THE GAZIRA

- *Dance Theatre LUDENS 2000-2005 – As a grantee of The Saison Foundation Artistic Creativity Enhancement Programs*
by Takiko Iwabuchi, Choreographer, Dancer, and Director, Dance Theatre LUDENS

共催事業(セゾンシアタープログラム) / CO-SPONSORSHIP PROGRAMS (Saison Theater Program)

日米現代劇作家・戯曲交流プロジェクト
期日:2006年7月10日-7月22日
会場:ミネアポリス(プレイライツ・センター)
主催:U.S./Japan Cultural Trade Network of Arts Midwest

【初年度】日本の現代戯曲を海外での上演に結びつけるための、3年間にわたる現代戯曲翻訳と劇作家交流のプロジェクト。全米の劇作家サポート専門機関であるプレイライツ・センターと提携し、ミネアポリスのガスリー・シアター、東京国際芸術祭と協力しながら展開する。本年は、「劇団、本谷有希子」主宰で演出家、劇作家の本谷有希子を派遣。『乱暴と待機』(英訳題名:Vengeance Can Wait)を翻訳、リーディング公演を実施した。

2006年度日仏都市会議「都市の文化対話と連携」プロジェクト
期日:2006年5月8日
会場:日仏会館会議場
主催:総合研究開発機構、企業メセナ協議会、日仏工業技術会、フランス大使館

The following four projects took place within the Saison Theater Program in 2006.

Japan-U.S. Contemporary Plays and Playwrights Exchange Project
Dates: July 10 - July 22, 2006
Venue: The Playwrights' Center, Minneapolis
Presented by: U.S./Japan Cultural Trade Network of Arts Midwest

This was the first year of a three-year exchange project to promote contemporary Japanese playwrights and the English translations of their works to U.S. audiences in cooperation with The Playwrights' Center, a service organization that supports U.S. playwrights, along with The Guthrie Theater in Minneapolis and with the Tokyo International Arts Festival. In 2006, Yukiko Motoya, playwright, director, and artistic director of theater company gekidan motoyayukiko, was selected for this project and her play entitled *Vengeance Can Wait* (original Japanese title: *Rambo to Taiki*) was translated into English and was presented to U.S. audiences in the form of a public reading session during the PlayLabs Festival at The Playwrights' Center.

Symposium franco-japonais sur les cités du future 2006
Date: May 8, 2006

都市の世紀を担う創造的文化的都市政策の実践者である日仏の都市関係者・文化人等により、日仏都市間の文化対話を基調とした連携・交流活動の促進および欧州・アジア諸都市への発展可能性などについて語り合った。

Mobile — アジアの移住労働者 プロジェクト(2年目)
期日:2006年6月17日-18日
会場:ドラマ・センター(シンガポール)
主催:ネセサリー・ステージ(シンガポール)
助成:アサヒビール芸術文化財団、ナショナル・アーツ・カウンシル・シンガポール

アジアの移住労働者をテーマとするシンガポール・フィリピン・タイ・日本の4カ国協働事業。演出は、ネセサリー・ステージの芸術監督アルヴィン・タン。日本からは、共同演出/劇作家として鐘下辰男、俳優2名が参加。2006年1月に森下スタジオで2週間のレジデンシーを行ない、作品創作を行なった。今年度は、

Venue: Maison Franco-Japonaise (Tokyo)
Presented by: National Institute for Research Advancement, Association for Corporate Support of the Arts, Japan (Kigyo Mecenat Kyogikai), la Société Franco-Japonaise des Technique Industrielles, Embassy of France (Tokyo)

This was an international symposium featuring French and Japanese urban and cultural experts on creative cultural city policies in which the means and possibilities to enhance cultural dialogue and alliance between the cities in both nations as well as in Asia and Europe were discussed.

Mobile – Asian Migrant Worker Project by The Necessary Stage (Singapore / Second Year)
Dates: June 17 - June 18, 2006
Venue: Drama Centre, Singapore
Supported by: Asahi Beer Arts Foundation, National Arts Council Singapore

This was a theater project directed by Alvin Tan, Artistic Director of The Necessary Stage of Singapore, in which artists from four Asian nations - Singapore, the Philippines, Thailand, and Japan - collaborated with each other on the theme of Asian migrant workers. The artists from Japan who participated in this project were playwright and director Tatsuo Kaneshita (as co-director and co-playwright) and two actors. After a two-

さらに推敲と稽古を重ね5月にシンガポールでレジデンシーを行ない、6月にシンガポール・アーツ・フェスティバルで世界初演を実施。その後、マレーシアでも公演。2007年3月16日から18日には財団法人せたがや文化財団の主催(企画制作:世田谷パブリックシアター)によりシアター・トラムで上演された。

レニ・バッソ プロデュース公演 ショートピース・アンソロジー
期日:2006年11月9日-12日
会場:森下スタジオ
主催:レニ・バッソ

1994年の設立以来、北村明子の振付・演出作品を上演してきたレニ・バッソの若手育成プロジェクト。北村明子の監修のもと、同カンパニーの中心的ダンサーによる小作品を上演する。11月上旬に森下スタジオで初演、その後まつもと市民芸術館公演を実施。

week creative residency at Morishita Studio in Tokyo in January 2006, the play went through modifications during a residency in Singapore in May, and had its world premiere at the Singapore Arts Festival in June 2006, which was followed by a tour of Malaysia. The Setagaya Arts Foundation/Setagaya Public Theatre presented *Mobile* at the Theatre Tram in Tokyo from March 16 to March 18, 2007.

Short Pieces Anthology produced by Leni-Basso
Dates: November 9 - November 12, 2006
Venue: Morishita Studio
Presented by: Leni-Basso

This was a project to develop the choreography skills of its young members by the Tokyo-based company Leni-Basso, which has been producing works choreographed and directed by its artistic director Akiko Kitamura since its establishment in 1984. Under the supervision of Kitamura, short dance pieces created by the main dancers of the company were shown at Morishita Studio in November 2006 and at the Matsumoto Performing Arts Centre in Nagano in March 2007.

事業日誌

(2006 年 4 月 - 2007 年 3 月)

2006 年

- 5 月 8 日 共催事業 2006 年度日仏都市会議「都市の文化対話と連携」プロジェクト(日仏会館会議場にて)
- 5 月 20 日『viewpoint』第 35 号発行
- 6 月 13 日理事会開催(2005 年度事業および収支決算報告の件)
評議員会開催(2005 年度事業および収支決算報告の件)
- 6 月 16 日文化庁に 2005 年度事業および収支決算報告書提出
- 6 月 17 日セゾンシアタープログラム ネセサリー・ステージ(シンガポール)『Mobile — アジアの移住労働者』(6 月 18 日まで/
シンガポールドラマ・センターにて)
- 7 月 10 日セゾンシアタープログラム 日米現代劇作家・戯曲交流プロジェクト(7 月 22 日まで/ミネアポリス、プレイライツ・センターにて)
- 8 月 20 日『viewpoint』第 36 号発行
- 10 月 2 日 2007 年度《現代演劇・舞踊助成》募集開始
- 11 月 9 日セゾンシアタープログラム レニ・バッソ プロデュース公演
ショートピース・アンソロジー(11 月 12 日まで/森下スタジオにて)
- 12 月 10 日 『viewpoint』第 37 号発行
- 12 月 15 日 2007 年度《現代演劇・舞踊助成》申請締切

2007 年

- 2 月 22 日 2007 年度アドバイザー・ミーティング開催
- 3 月 5 日『viewpoint』第 38 号発行
- 3 月 13 日理事会開催(2007 年度事業計画および収支予算の件)
評議員会開催(2007 年度事業計画および収支予算の件)
- 3 月 14 日 2007 年度助成決定発表
- 3 月 28 日文化庁に 2007 年度事業計画書および収支予算書提出

REVIEW OF ACTIVITIES

(April 2006 - March 2007)

2006

- May 8 *Symposium franco-japonais sur les cités du future 2006* (Symposium on the future of French and Japanese cities), organized by the National Institute for Research Advancement (NIRA) and co-sponsored by The Saison Foundation, is held at La Maison Franco-Japonaise in Tokyo
- May 20 The Saison Foundation's newsletter *viewpoint* Issue No.35 is published
- June 13 Board of Directors Meeting in Tokyo (Agenda: report on activities and settlement of accounts for fiscal year 2005)
Board of Trustees Meeting in Tokyo (Agenda: report on activities and settlement of accounts for fiscal year 2005)
- June 16 Report on activities and settlement of accounts for fiscal year 2005 submitted to the Agency for Cultural Affairs
- June 17 Saison Theater Program: The Necessary Stage's *Mobile* opens at Drama Centre, Singapore (till June 18)
- July 10 Saison Theater Program: Japan-U.S. Contemporary Plays and Playwrights Exchange Project at The Playwrights' Center, Minneapolis (till July 22)
- August 20 *viewpoint* Issue No.36 is published
- October 2 Application period for the 2007 Contemporary Theater and Dance Grants and Studio Awards begins
- November 9 Saison Theater Program: Leni-Basso's *Short Pieces Anthology* opens at Morishita Studio (till November 12)
- December 10 *viewpoint* Issue No.37 is published
- December 15 Application deadline for the 2007 Contemporary Theater and Dance Grants and Studio Awards

2007

- February 22 Advisory meeting for the 2007 Grant and Studio Awards held in Tokyo
- March 5 *viewpoint* Issue No.38 is published
- March 13 Board of Directors Meeting in Tokyo (Agenda: proposal of plans and budget for fiscal year 2007)
Board of Trustees Meeting in Tokyo (Agenda: proposal of plans and budget for fiscal year 2007)
- March 14 Announcement of 2007 Grant and Studio Awards
- March 28 Plans and budget for fiscal year 2007 submitted to the Agency for Cultural Affairs

会計報告 FINANCIAL REPORT

収支計算書
2006年4月1日－2007年3月31日

STATEMENT OF REVENUES AND EXPENSES from April 1, 2006 to March 31, 2007

単位:円 / in yen

I 収入の部	REVENUES	
1. 基本財産運用収入	Investment income from endowment	108,021,414
2. 運用財産運用収入	Investment income from operating funds	76,640,578
3. 寄付金収入	Contributions	5,000,000
4. 賃貸収入	Income from lease	10,639,957
5. 助成金収入	Grant for Joint Programs	2,000,000
6. その他の収入	Other income	1,766,100
7. 特定目的基金取崩収入	Transfer income from designated fund	200,600,000
当期収入合計	Net Total Revenue	404,668,049
前期繰越収支差額	Balance brought forward	135,539,824
収入合計	TOTAL REVENUE	540,207,873
II 支出の部	EXPENSES	
1. 事業費	Program services	151,067,440
(うち助成事業)	Grant programs	74,069,915)
2. 管理費	Management and general	64,713,846
3. 借地権購入支出	Leasehold deposit	188,764,521
当期支出合計	Total expenses	404,545,807
当期収支差額	FUND BALANCES	122,242
次期繰越収支差額	BALANCE CARRIED FORWARD	135,662,066

貸借対照表
2007年3月31日現在

BALANCE SHEET as of March 31, 2007

単位:円 / in yen

I 資産の部	ASSETS	
1. 流動資産	Current assets	
現金預金	Cash	134,264,493
未収収益等	Accrued revenue	3,041,546
流動資産合計	Total current assets	137,306,039
2. 固定資産	Fixed assets	
基本財産	Endowment	
土地	Land	2,254,915,150
有価証券	Securities	5,104,400,000
基本財産合計	Total endowment fund	7,359,315,150
特定目的資産	Designated fund	324,522,640
その他の固定資産	Other fixed assets	1,784,293,265
固定資産合計	Total fixed assets	9,468,131,055
資産合計	TOTAL ASSETS	9,605,437,094
II 負債の部	LIABILITIES	
負債合計	TOTAL LIABILITIES	22,543,973
III 正味財産の部	NET ASSETS	
正味財産	Net assets	9,582,893,121
(うち当期正味財産減少額)	Decline of assets	25,377,744)
負債および正味財産合計	TOTAL LIABILITIES AND NET ASSETS	9,605,437,094

資金助成の概況
1987-2006 年

SUMMARY OF GRANTS
from 1987 to 2006

分野 category	年度 year	申請件数 number of applications	助成件数 number of grants	助成金額(円) grants in yen
現代演劇・舞踊助成 Contemporary Theater and Dance Program Grants	1987-2002	2,523	568	1,584,880,920
	2003	147	40	56,000,000
	2004	162	47	54,420,430
	2005	176	46	57,125,160
	2006	164	49	59,969,915
	累計 Total	3,172	750	1,812,396,425
非公募助成 Designated Fund Program Grants	1987-2002		159	637,746,449
	2003		4	13,000,000
	2004		8	14,800,000
	2005		9	17,600,000
	2006		8	14,100,000
	累計 Total		188	697,246,449
合計 GRAND TOTAL			938	2,509,642,874

2006 年度《現代演劇・舞踊助成》プログラムの概況

Data on Contemporary Theater and Dance Programs in 2006

プログラム programs	国内プログラム National Programs				国際交流プログラム International Programs				合計 Total
	創造環境整備 Creative Environment Improvement Programs		芸術創造 Artistic Creativity Enhancement Programs		知的交流 Intellectual Exchange Program	芸術交流 Artistic Exchange Programs			
	ワークショップ、 会議・シンポジ ウム Workshops, Conferences and Symposia	アーツマネジメ ント留学・研修 Arts Management Study Program サバティカル (休暇・充電) Sabbatical Programs	芸術創造活動Ⅰ Artistic Creativity Enhancement Program I	芸術創造活動Ⅱ Artistic Creativity Enhancement Program II	知的交流活動 Intellectual Exchange Program	I: プロジェクト 支援(スタジオ 助成) I: Creative Exchange Program (Studio Awards only)	Ⅱ: 継続プロジ ェクト支援 Ⅱ: Creative Exchange Program – For Long-Term Projects	F: 日仏舞踊交流 F: Franco- Japanese Dance Exchange	
申請件数 number of applications	44	0 3	73* 6	3**	9	8	9***	9	164
助成件数 number of awards	21	0 1	6* 6	3**	3	3	5***	1	49
助成金額(円) grants in yen	15,600,000	1,000,000	18,000,000 469,915	9,000,000	1,800,000	—	13,500,000	600,000	59,969,915

* うち継続 4 件 / Including four extended grants

** うち継続 2 件 / Including two extended grants

*** うち継続 3 件 / Including three extended grants